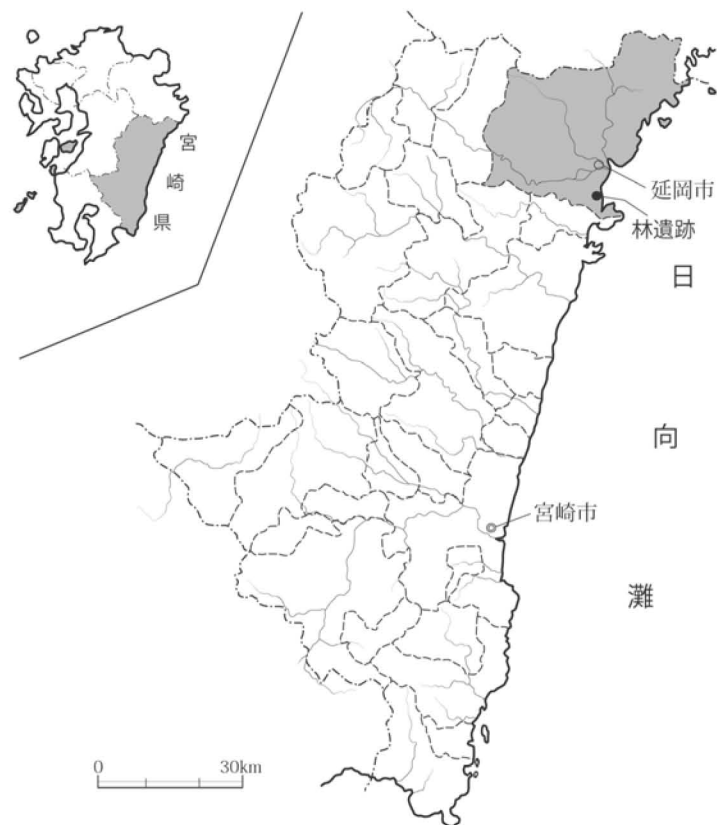


HAYASHI

林 遺 跡 II

一般国道10号延岡道路建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 4



宮崎県埋蔵文化財センター



林遺跡遠景（南より）

序

林遺跡は宮崎県の北部にある延岡市伊形町に所在し、宮崎県教育委員会が昭和61年度から昭和63年度にも一般国道10号土々呂バイパス建設事業に伴う発掘調査を行い、旧石器から中近世の多岐にわたる貴重な資料が確認されています。

今回は、一般国道10号延岡道路建設事業に伴い、国土交通省九州地方整備局延岡河川国道事務所の委託を受け、平成9年度から平成12年度にかけて、宮崎県埋蔵文化財センターがその隣接地の発掘調査を実施しました。

約4年にわたる調査で、遺跡からは後期旧石器時代の遺構や遺物をはじめ、古墳時代から中近世の集落跡等、多大な成果を挙げることができました。特に県北地域では中近世の集落の調査事例が少なく、当時の生活を再現する上で貴重な資料を得ることができました。本書はこれらの調査結果をまとめたものであります。

こうした先人の歩みを振り返り、郷土の歴史を解明する貴重な資料が得られたことは、大きな成果と言えるでしょう。

本書が学術資料としてだけでなく、学校教育や生涯学習の場など広く一般に活用され、埋蔵文化財の保護と活用に対する認識と理解の一助となることを期待します。

調査にあたって御協力いただいた関係諸機関をはじめ、地元の方々に心からの謝意を表します。

平成20年3月

宮崎県埋蔵文化財センター

所長 清野 勉

例 言

1. 本書は、一般国道10号延岡道路建設事業に伴い実施された、宮崎県延岡市伊形町2120-1ほか所在の林遺跡の発掘調査報告書である。調査は国土交通省九州地方整備局延岡河川国道事務所の委託を受けて宮崎県教育委員会が主体となり、宮崎県埋蔵文化財センターが実施した。
2. 発掘調査は4か年に分けて実施した。各年度の調査期間及び調査面積は以下の通りである。
平成9年度：平成9年6月30日～平成10年1月30日（9,800m²）
平成10年度：平成10年5月6日～平成11年3月25日（14,400m²）
平成11年度：平成11年4月8日～平成11年8月24日（3,500m²）
平成12年度：平成12年6月8日～平成12年7月31日（720m²）
3. 現地調査に関する実測および写真撮影は主に鈴木健二、東憲章、日高広人、米久田真二、黒木欣綱、松永幸寿、橋川敬子が担当し、一部を和田理啓、高橋誠、福田泰典、松本茂、柳田晴子の協力を得た。なお、遺構実測の一部（写真測量）については株式会社マエダ、空中写真については(株)スカイサーベイに委託した。
4. 土層断面および土器の色調については農林水産省農林水産技術会議事務局監修の「新版標準土色帖」に準拠した。
5. 遺物および図面等の整理については宮崎県埋蔵文化財センターにて行った。そのうち図面作成・遺物実測・トレースについては東・日高および整理作業員が行い、一部の石器実測については株式会社文化財研リサーチに委託した。
6. 観察表および計測表は東・日高が作成した。
7. 石器の石材同定については赤崎広志・松田清孝（宮崎県総合博物館）、宍戸章（宍戸地質研究所）氏をはじめ多くの方々からご教示を得た。また貝種同定には西邦雄氏からご教示を得た。
8. 自然科学分析については古環境研究所に委託した。また、獣骨同定には西中川駿氏（鹿児島大学獣医学科解剖学教室）に玉稿を頂いた。
9. 本書に使用した方位は座標北と磁北があり、座標北を用いた場合は「G. N.」、磁北を用いた場合は「M. N.」と明記し区別した。座標は国土座標第Ⅱ系に拠る。またレベルは海拔絶対高を用いた。これらの基準点の設置は、株式会社ジバングサーベイ、株式会社エースコンサルタントに委託した。
10. 遺物写真については、東・日高が撮影した。
11. 本書に使用した位置図は、国土地理院発行の5万分の1図『延岡』を、また周辺地形図は国土交通省九州地方整備局延岡河川国道事務所作成の1千分の1図を基に作成した。
12. 本書で使用した遺構略号は次のとおりである。
SA＝竪穴住居跡、SB＝掘立柱建物跡、SC＝土坑、SD＝土壙、SE＝溝状遺構、
SF＝井戸状遺構、SI＝礫群、SZ＝廃棄土坑
13. 挿図の縮尺は各図に示している。
14. 本書の執筆は松林豊樹・東・日高が担当し、編集は日高が行った。文責については本文目次に記した。
15. 調査の記録類および出土遺物は、宮崎県埋蔵文化財センターに保管している。

插图目次

第I章

第1図 遺跡位置図 5

第2図 遺跡周辺地形図 7

第II章

第3図 調査区及び年度別調査範囲 8

第4図 基本層序及び各地区の層序 15

第III章

第5図 A1区礫群分布図 16

第6図 A1区礫群実測図 17

第7図 A1区遺構分布図 19・20

第8図 A1区検出遺構実測図 21

第9図 A区出土遺物実測図 22

第IV章

第10図 B1区, B2区, B3区遺構分布図 24

第11図 B3区SA1~3, SE1実測図 25

第12図 B4区, B5区遺構分布図 27・28

第13図 B5区SC1実測図 27

第14図 B5区SE2, SE3実測図 30

第15図 B5区石組井戸SF1実測図 31

第16図 B区(B2~B5区)出土遺物実測図 32

第17図 B区(B5区)出土遺物実測図 33

第18図 B6区遺構分布図, 検出遺構実測図 35

第19図 B7区遺構分布図 36

第20図 B区(B6区・B7区)出土遺物実測図 36

第21図 B7区SD2実測図 37

第22図 B区出土墓石・板碑実測図 38

第23図 B区出土五輪塔実測図(空風輪・火輪) 39

第24図 B区出土五輪塔実測図(火輪) 40

第25図 B区出土五輪塔実測図(火輪・水輪) 41

第26図 B区出土五輪塔実測図(水輪) 42

第27図 B区出土五輪塔実測図(水輪) 43

第28図 B区出土五輪塔実測図(地輪) 44

第29図 五輪塔法量凡例 51

第V章

第30図 C・D区Ⅶ層調査範囲 52

第31図 C・D区旧石器時代第I文化層遺物分布図 53

第32図 C・D区出土石器実測図1 53

第33図 C・D区旧石器時代第II文化層遺構分布図 55

第34図 C・D区礫群実測図1 56

第35図 C・D区礫群実測図2 57

第36図 C・D区礫群実測図3及び出土石器実測図2 58

第37図 C区小土坑実測図 60

第38図 D区自然流路実測図 61

第39図 C・D区第II文化層遺物分布図 63

第40図 C・D区第II文化層遺物分布図[流紋岩I] 66

第41図 C・D区出土石器実測図3 67

第42図 C・D区出土石器実測図4 68

第43図 C・D区出土石器実測図5 69

第44図 C・D区出土石器実測図6 70

第45図 C・D区出土石器実測図7 71

第46図 C・D区第II文化層遺物分布図[流紋岩II] 75

第47図 C・D区出土石器実測図8 76

第48図 C・D区出土石器実測図9 77

第49図 C・D区出土石器実測図10 78

第50図 C・D区出土石器実測図11 79

第51図 C・D区出土石器実測図12 80

第52図 C・D区出土石器実測図13 81

第53図 C・D区出土石器実測図14 82

第54図 C・D区出土石器実測図15 83

第55図 C・D区出土石器実測図16 84

第56図 C・D区第II文化層遺物分布図[流紋岩III] 85

第57図 C・D区第II文化層遺物分布図[流紋岩IV] 88

第58図 C・D区出土石器実測図17 89

第59図 C・D区出土石器実測図18 90

第60図 C・D区出土石器実測図19 91

第61図 C・D区出土石器実測図20 92

第62図	C・D区出土石器実測図21	93
第63図	C・D区第Ⅱ文化層遺物分布図 [流紋岩V]	96
第64図	C・D区出土石器実測図22	97
第65図	C・D区出土石器実測図23	98
第66図	C・D区出土石器実測図24	99
第67図	C・D区出土石器実測図25	100
第68図	C・D区出土石器実測図26	101
第69図	C・D区出土石器実測図27	102
第70図	C・D区出土石器実測図28	103
第71図	C・D区出土石器実測図29	104
第72図	C・D区第Ⅱ文化層遺物分布図 [ホルンフェルス]	107
第73図	C・D区出土石器実測図30	108
第74図	C・D区出土石器実測図31	109
第75図	C・D区出土石器実測図32	110
第76図	C・D区出土石器実測図33	111
第77図	C・D区出土石器実測図34	112
第78図	C・D区出土石器実測図35	113
第79図	C・D区第Ⅱ文化層遺物分布図 [頁岩Ⅰ]	115
第80図	C・D区出土石器実測図36	116
第81図	C・D区第Ⅱ文化層遺物分布図 [頁岩Ⅱ]	117
第82図	C・D区出土石器実測図37	118
第83図	C・D区出土石器実測図38	119
第84図	C・D区出土石器実測図39	120
第85図	C・D区第Ⅱ文化層遺物分布図 [チャート]	123
第86図	C・D区第Ⅱ文化層遺物分布図 [黒曜石・安山岩]	124
第87図	C・D区第Ⅱ文化層遺物分布図 [石材別]	125
第88図	C・D区出土石器実測図40	126
第89図	C・D区出土石器実測図41	127
第90図	C・D区第Ⅱ文化層遺物分布図 [砂岩ほか]	128
第91図	C・D区出土石器実測図42	129

第92図	C・D区第Ⅲ文化層遺物分布図	130
第93図	C・D区出土石器実測図43	131
第94図	C・D区縄文時代遺物分布図	132
第95図	C区出土石器実測図	133
第96図	C・D区出土石器実測図44	134
第97図	C・D区出土石器実測図45	135
第98図	C・D区出土石器実測図46	136
第99図	C1区遺構分布図	145・146
第100図	C2区, C3区, C4区遺構分布図	147
第101図	C区土壙墓・土坑実測図	151
第102図	C4区SC1及び出土遺物実測図	152
第103図	C区(C1区～C2区)出土遺物実測図	153
第104図	C2区出土遺物実測図	154
第105図	C区(C3区～C4区)出土遺物実測図	155
第106図	C区(C2区～C4区)出土遺物実測図	156

第Ⅵ章

第107図	D1区遺構分布図	161
第108図	D2区, D3区遺構分布図	162
第109図	D1区SA1及び出土遺物実測図	163
第110図	D1区SA2及び出土遺物実測図	164
第111図	D1区SA3, SA4, SA5及び出土遺物実測図	165
第112図	D2区SC1・D3区SC2及び出土遺物実測図	167
第112図	D区遺構外出土遺物実測図	168

第Ⅶ章

図1	林遺跡D1区C・11グリッドにおける植物珪酸体分析結果	183
図2	林遺跡C1区I・6グリッドにおける植物珪酸体分析結果	183
図3	林遺跡C3区SC7における植物珪酸体分析結果	183

表 目 次

第Ⅲ章

第1表 A1区礫群一覧表 17

第Ⅳ章

第2表 A・B区遺物観察表 46

第3表 B区遺物観察表 47

第4表 A・B区遺物計測表 47

第5表 B区空風輪法量表 48

第6表 B区火輪法量表1 48

第7表 B区火輪法量表2 49

第8表 B区水輪法量表1 49

第9表 B区水輪法量表2 50

第10表 B区地輪法量表 51

第11表 B区墓石・板碑法量表 51

第Ⅴ章

第12表 C・D区礫群一覧表 59

第13表 C区土坑一覧表 60

第14表 C・D区旧石器時代石器計測表1 137

第15表 C・D区旧石器時代石器計測表2 138

第16表 C・D区旧石器時代石器計測表3 139

第17表 C・D区旧石器時代石器計測表4 140

第18表 C・D区旧石器時代石器計測表5 141

第19表 C・D区旧石器時代石器計測表6 142

第20表 C区縄文土器観察表 143

第21表 C・D区縄文時代石器計測表 143

第22表 C区出土遺物観察表1 156

第23表 C区出土遺物観察表2 157

第24表 C区出土遺物計測表 158

第25表 C2区SZ1出土具種一覧表 158

第Ⅵ章

第26表 D区出土遺物観察表1 170

第27表 D区出土遺物観察表2 171

第28表 D区出土遺物観察表3 172

第29表 D区出土石器計測表 172

第Ⅶ章

表1 林遺跡における種実同定結果 174

表2 林遺跡出土イネ果実実測値 175

表1 林遺跡から出土した木材の樹種同定結果 177

表1 林遺跡における植物珪酸体分析結果 182

第Ⅷ章

第30表 林遺跡検出 掘建柱建物一覧 198

図 版 目 次

巻頭

林遺跡遠景（南より）

第Ⅵ章第1節

写真1 176

林遺跡の種実

写真2 178

林遺跡出土木材の顕微鏡写真

写真3 184

植物珪酸体（プラント・オパール）の顕微鏡写真

第Ⅵ章第2節

写真1 191

写真2 192

写真3 193

写真図版

図版1 199

林遺跡A区全景

A区全景（北から）

A1区 SA1

A1区 SB1

A1区 SB2

図版2 200

A1区 SB3・4

A 1区 SB 5	
A 1区 SC 12	
A 1区 SC 2	
A 1区 SC 3	
図版 3	201
林遺跡B区全景	
B 1区・B 2区・B 3区	
B 4区	
B 5区 SE 2・3	
B 6区・B 7区	
図版 4	202
B 3区 SA 1	
B 3区 SA 2	
B 3区 SA 3	
B 3区 SE 1	
図版 5	203
B 5区 SF 1 (検出状況)	
同上 (完掘状況)	
B 5区 SE 2・3 (検出状況)	
同上 (完掘状況)	
図版 6	204
B 6区 SD 1 (検出状況)	
B 6区廃棄五輪塔 (検出状況)	
B 7区 SD 2 (検出状況)	
同上 (完掘状況)	
図版 7	205
林遺跡C区全景	
C 1区 (奥)・C 2区 (手前)	
図版 8	206
C 1区・C 2区 掘立柱建物群	
C 2区 SB 13・SB 14	
図版 9	207
C 4区 SC 1	
C 3区 SD 1	
C 4区 SC 2	
C 4区 SC 4	
図版 10	208
C 4区 SC 3	
C 2区 SC 5	
C 2区 SZ 1 (貝殻集積断面)	
同上 (検出状況)	
図版 11	209
林遺跡 C区・D区全景	
D区全景	
図版 12	210
D 1区	
D 2区・D 3区	
図版 13	211
D 1区 SA 1	
D 1区 SA 2	
D 1区 SA 3	
D 2区 SC 1	
図版 14	212
作業風景 1	
作業風景 2	
現地説明会	
D区水没状況 (南より)	
土層 (C 2区)	
C-S I 1 (南西より)	
C-S I 2 (東より)	
C-S I 2掘り込み (南より)	
図版 15	213
C-S I 6 (南より)	
C-S I 7 (南より)	
C-S I 8 (東より)	
C-S I 9 (南より)	
C-S I 10 (北東より)	
C-S I 11 (北東より)	
C-S I 12 (北より)	
C-S I 13 (北より)	
図版 16	214
C-S I 14 (北より)	

C-S I 17 (南より)	C・D区 旧石器第II文化層石器16
C-S I 18 (南西より)	C・D区 旧石器第II文化層石器17
C-S I 19 (東より)	C・D区 旧石器第II文化層石器18
C-S I 21 (北より)	C・D区 旧石器第II文化層石器19
D-S I 1 (南より)	図版22 220
D-S I 2 (南より)	C・D区 旧石器第II文化層石器20
D-S I 4 (南より)	C・D区 旧石器第II文化層石器21
図版17 215	C・D区 旧石器第II文化層石器22
C-S C 7埋土堆積状況(西より)	C・D区 旧石器第II文化層石器23
C-S C 7完掘(西より)	C・D区 旧石器第II文化層石器24
D1区 遺物出土状況(北東より)	C・D区 旧石器第II文化層石器25
D1区 自然流路(南より)	図版23 221
剥片尖頭器(西より)	C・D区 旧石器第II文化層石器26
スクレイパー(北より)	D区 旧石器第III文化層石器
石核(南より)	C区 縄文時代早期土器
図版18 216	C区 縄文時代晚期土器1
C・D区 旧石器時代石器	C区 縄文時代晚期土器2
C・D区 旧石器第I文化層石器	C・D区 縄文時代石器1
C・D区 旧石器第II文化層石器1	C・D区 縄文時代石器2
図版19 217	図版24 222
C・D区 旧石器第II文化層石器2	A1区 出土遺物
C・D区 旧石器第II文化層石器3	A1区 S C 1 出土湖州鏡
C・D区 旧石器第II文化層石器4	同上鏡面
C・D区 旧石器第II文化層石器5	A1区 S C 2 出土八稜鏡
C・D区 旧石器第II文化層石器6	同上鏡面
C・D区 旧石器第II文化層石器7	A1区 出土鏡X線画像
図版20 218	B2~5区 出土遺物
C・D区 旧石器第II文化層石器8	B5区 S E 2・3 出土遺物
C・D区 旧石器第II文化層石器9	B6・B7区 出土遺物
C・D区 旧石器第II文化層石器10	図版25 223
C・D区 旧石器第II文化層石器11	B7区 S D 2 出土墓石
C・D区 旧石器第II文化層石器12	B7区 出土墓石(1)
C・D区 旧石器第II文化層石器13	B7区 出土墓石(2)
図版21 219	B7区 出土墓石(3)
C・D区 旧石器第II文化層石器14	B7区 出土板碑
C・D区 旧石器第II文化層石器15	B区 出土板碑・五輪塔群

本文目次

序 文

例 言

第I章 はじめに

第1節 調査に至る経緯	(松林)...	1
第2節 調査の組織	(日高)...	1
第3節 遺跡の位置と環境	(日高)...	3
1. 地理的環境		3
2. 歴史的環境		4

第II章 調査の方法と概要

第1節 調査の方法	(日高)...	8
第2節 調査の概要	(日高)...	9
第3節 遺跡の層序	(日高)...	13

第III章 A区の調査

第1節 旧石器～縄文時代の遺構	(日高)...	16
1. 礫 群		16
第2節 弥生時代以降の遺構と遺物	(東)...	18
1. 遺 構		18
2. 遺構外出土の遺物		23

第IV章 B区の調査

第1節 B区検出の遺構	(東)...	23
1. B1区・B2区		23
2. B3区		23
3. B4区・B5区		26
4. B6区		34
5. B7区		34
第2節 B区出土の遺物	(東)...	45

第V章 C区の調査

第1節 旧石器時代	(日高)...	52
1. 第I文化層		52
2. 第II文化層		54
3. 第III文化層		131
第2節 縄文時代の遺物	(日高)...	131
1. 縄文土器		131
2. 縄文石器		135

図版26 224

- C 4区SC 1 出土鉄鍋
- SC 1 出土短刀・錢束
- SC 1 出土短刀X線画像
- SC 1 出土鏡
- 同上鏡面
- SC 1 出土鏡X線画像
- B 4区SC 4 出土錢

図版27 225

- C 1区 出土遺物
- C 2区 出土遺物
- C 2区SC 6 出土大甕
- C 2区 出土大甕・三筋壺
- C 3区 出土遺物
- C 4区 出土遺物
- D 1区 SA 1出土遺物(1)
- D 1区 SA 1出土遺物(2)

図版28 226

- D 1区SA 2 出土遺物(1)
- D 1区SA 2 出土遺物(2)
- D 1区SA 2 出土遺物(3)
- D 1区SA 3 出土遺物
- D 1区SA 4・SA 5 出土遺物
- D 2区SC 1 出土大甕
- D 1区・D 2区 出土遺物
- 表採資料
- B区・C区・D区出土石器(弥生時代以降)

第 I 章 はじめに

第 1 節 調査に至る経緯

宮崎県は、高速道路等のインフラ整備が遅れている地域で、とりわけ延岡市は「高速道路のインターチェンジから最も遠い10万都市」である。高速道路整備にかかる地域住民の期待が年々高まりをみせていた平成7年度末、建設省九州地方建設局延岡工事事務所（現国土交通省九州地方整備局延岡河川国道工事事務所、以下同じ）が平成8年度から着手する新規事業として、延岡道路及び北方延岡道路の建設計画が明らかとなった。延岡道路は、東臼杵郡北川町大字長井（現延岡市北川町）を起点に、既に自動車専用道路として供用されている延岡南道路に接続する、延長20.6kmの高規格自動車専用道路である。また、北方延岡道路は、延岡市北方町蔵田を起点に延岡市天下町の延岡ジャンクションで延岡道路に接続する延長23.5kmの高規格自動車専用道路である。

宮崎県教育庁文化課（現文化財課）は、この事業計画を受けて、計画路線内に所在する埋蔵文化財の取扱いについて、平成7年度末より延岡工事事務所と協議を開始した。平成8年10月の協議において、延岡道路の平成9年度事業箇所として、延岡南道路に隣接する延岡市伊形町～石田町に着手する方針が示されたが、この地区には、延岡南道路の建設に際して昭和61～63年度に発掘調査を実施した林遺跡（1～3次調査）に隣接する部分を含んでいたことから、計画どおりに工事が行われた場合、遺跡が影響を受けることは確実と判断された。県文化課は、周辺には五輪塔が散見される部分もあることなどから、計画変更を含めた埋蔵文化財保護の方策について延岡工事事務所と協議を行ったが、工事計画の変更等による現状保存は困難であるとの結論に至り、記録保存のための発掘調査を実施することとなった。

発掘調査は、延岡工事事務所の委託を受け、平成9～12年度に及ぶ約4か年にわたり、宮崎県教育委員会が主体となって実施した。

第 2 節 調査の組織

林遺跡第4次調査の調査組織は次のとおりである。

調査主体 宮崎県教育委員会

平成9年度 発掘調査

宮崎県埋蔵文化財センター

所 長	藤本 健一
副 参 事	木幡 文夫
副所長兼調査第二係長	岩永 哲夫
庶務係長	三石 泰博
調査第二係主任主事	東 憲章
同 調 査 員	米久田真二
同 調 査 員	黒木 欣綱

文化課 事業調整担当 主任主事

飯田 博之

平成10年度 発掘調査

宮崎県埋蔵文化財センター

所 長	田中 守
庶務係長	児玉 和昭
調査第二係長	青山 尚友
同 主 査	鈴木 健二
同 主任主事	東 憲章
同 調 査 員	黒木 欣綱

文化課 事業調整担当 主査 柳田 宏一

平成11年度 発掘調査

宮崎県埋蔵文化財センター

所 長	田中 守
副 所 長	江口 京子
庶 務 係 長	児玉 和昭
調査第二係長	青山 尚友
同 主 事	日高 広人
同 調 査 員	松永 幸寿

文化課 事業調整担当 主査 長津 宗重

平成12年度 発掘調査、遺物整理

宮崎県埋蔵文化財センター

所 長	矢野 剛
副所長兼総務課長	菊池 茂仁
副所長兼調査第二課長	岩永 哲夫
総務課総務係長	亀井 維子
調査第二課調査第四係長	永友 良典
同 主任主事	日高 広人
同 調 査 員	橋川 敬子

文化課 事業調整担当 主任主事 松林 豊樹

平成13年度 遺物整理

宮崎県埋蔵文化財センター

所 長	矢野 剛
副所長兼総務課長	菊池 茂仁
副所長兼調査第二課長	岩永 哲夫
総務課総務係長	亀井 維子
調査第二課調査第四係長	永友 良典
同 主任主事	日高 広人

文化課埋蔵文化財係西都原対策班
主 査 東 憲章

文化課 事業調整担当 主任主事 竹井真知子

平成14年度 遺物整理

宮崎県埋蔵文化財センター

所 長	米良 弘康
副所長兼総務課長	大藪 和博
副所長兼調査第二課長	岩永 哲夫
総務課総務係長	野邊 文博
調査第二課調査第四係長	永友 良典
同 主任主事	日高 広人

文化課埋蔵文化財係西都原対策班
主 査 東 憲章

文化課 事業調整担当 主任主事 松林 豊樹

平成15年度 遺物整理

宮崎県埋蔵文化財センター

所 長	米良 弘康
副所長兼総務課長	大藪 和博
副所長兼調査第二課長	岩永 哲夫
総務課主幹兼総務係長	石川 恵史
調査第二課調査第四係長	近藤 協
同 主任主事	日高 広人

文化課考古博物館建設担当
主 査 東 憲章

文化課 事業調整担当 主任主事 松林 豊樹

平成16年度 遺物整理・報告書作成

宮崎県埋蔵文化財センター

所 長	宮園 淳一
副所長兼総務課長	大藪 和博
副所長兼調査第二課長	岩永 哲夫
総務課主幹兼総務係長	石川 恵史
調査第二課調査第四係長	近藤 協
同 主任主事	日高 広人

県立西都原考古博物館
学芸普及班 主 査 東 憲章

文化課 事業調整担当 主任主事 松林 豊樹

平成19年度 報告書作成

宮崎県埋蔵文化財センター

所 長	清野 勉
副 所 長	加藤 悟朗
総務課長	宮越 尊
総務課主幹総務担当リーダー	高山 正信
調査第二課主幹調査第四担当リーダー	近藤 協

県立西都原考古博物館

学芸普及担当 主 査	東 憲章
------------	------

文化財課

埋蔵文化財担当 主 査	日高 広人
事業調整担当 主 査	飯田 博之

査指導及び調査協力（敬称略）

橘 昌信（別府大学）、西中川 駿（鹿児島大学農学部）、竹中 正巳（当時：鹿児島大学歯学部、現在：鹿児島女子短期大学）、藤丸 詔八郎（北九州市立博物館）、宮田 栄二（鹿児島県立埋蔵文化財センター）、小野 信彦（当時：北方町教育委員会、現在：延岡市教育委員会）、山田 聡（延岡市教育委員会）、国土交通省九州整備局延岡河川国道事務所、延岡市教育委員会

第3節 遺跡の位置と環境

1. 地理的環境

林遺跡は宮崎県の北東部に位置する延岡市伊形町に所在する。延岡市は東側を日向灘に接し、北側には榎木峠（1,245m）を有する日豊山地をはじめ、行膝山（822.9m）や可愛岳（727.7m）等から成る環状岩脈や霧子山（461m）や鏡山（645m）、岳山（614m）を有する霧子山山地が続き、霧子山山地の南側から西側にかけて形成されている北郷山地、南側には烏帽子岳（362.1m）より派生する烏帽子岳山地、日向～門川山地といった四万十累層群からなる山地に三方を囲まれている。

市内南西部から北東部にかけて、北郷山地を横断するように九州山地の向坂山を水源とする五ヶ瀬川が蛇行しながら貫流しており、市内で細見川と合流後、市内中央付近で大瀬川と分岐し、行膝川や祝子川、北川等の支流と合流しながら、日向灘へと注いでいる。それぞれの流域には沖積低地が広がり、特に市中央部から東側にかけて沖積地や三角州が発達し、平野を形成している。また五ヶ瀬川左岸には、起伏の比較的緩やか山麓地（丘陵地）が広がり、狭小な阿蘇溶結凝灰岩台地や河岸段丘が点在する。

これらに対し、市内南東部では、日向～門川山地が海岸近くまで張り出し、同山地を水源とする沖田川や支流の石田川、井替川といった小規模な河川が河口付近で合流する。また流域周辺に認められる沖積低地は、発達が乏しく、幅狭な小平野を形成している。伊形町は、この地域に含まれ、石田川、井替川に挟まれた丘陵及び低地（浜堤や後背湿地）から成り、天正年間頃まで大潮時には海水が山裾まで押し寄せていたという伝承が残っており、町名の「伊形」は「干潟」の転化したものと考えられている。

本遺跡は石田川右岸の日向～門川山地から東に派生した丘陵の東側緩斜面およびその下位に広がる低

地、低地を挟んで東側に展開する独立した低位丘陵の南西側緩斜面の3箇所に立地する。

2. 歴史的環境

延岡市で確認されている遺跡の大半は地理的な要因もあり、五ヶ瀬川流域やその支流を中心に確認されている。以下、時代別に概観していきたい(第1図)。

旧石器時代では、近年の調査例が増加し、畑山遺跡や赤木遺跡(第7次調査)、吉野遺跡(第7次調査)、山田遺跡等、始良Tn火山灰層(以下、AT)下位で石器群の確認例がある。

またAT上位の石器群としては切出形のナイフ形石器や剥片尖頭器を中心とする一群と細石器を中心とする一群の2つの文化層が確認されている赤木遺跡(第1次調査)やAT降灰後の中でも比較的古い様相をもつ石器群が確認されている片田遺跡をはじめ、黒土田遺跡や地藏ヶ森遺跡、吉野遺跡、吉野第2遺跡、山田遺跡等が挙げられる。

縄文時代では早期の遺跡が数多く確認されており、そのうち今井野遺跡(第1次調査)では押型文土器に伴って集石遺構1基が確認されている。また地藏ヶ森遺跡では押型文土器と塞ノ神式土器の時期の集石遺構8基が確認されている。また近年の調査で、集石遺構とともに炉穴群や平地住居が検出された吉野第2遺跡、集石遺構や炉穴群、陥し穴状遺構、円形配石遺構などが確認された山田遺跡など、集落構成が理解できる事例が増えてきている。また県内の縄文時代の貝塚確認例が8例と僅少な中、早期では大貫貝塚、晩期の沖田貝塚など、延岡市では4例確認されている。

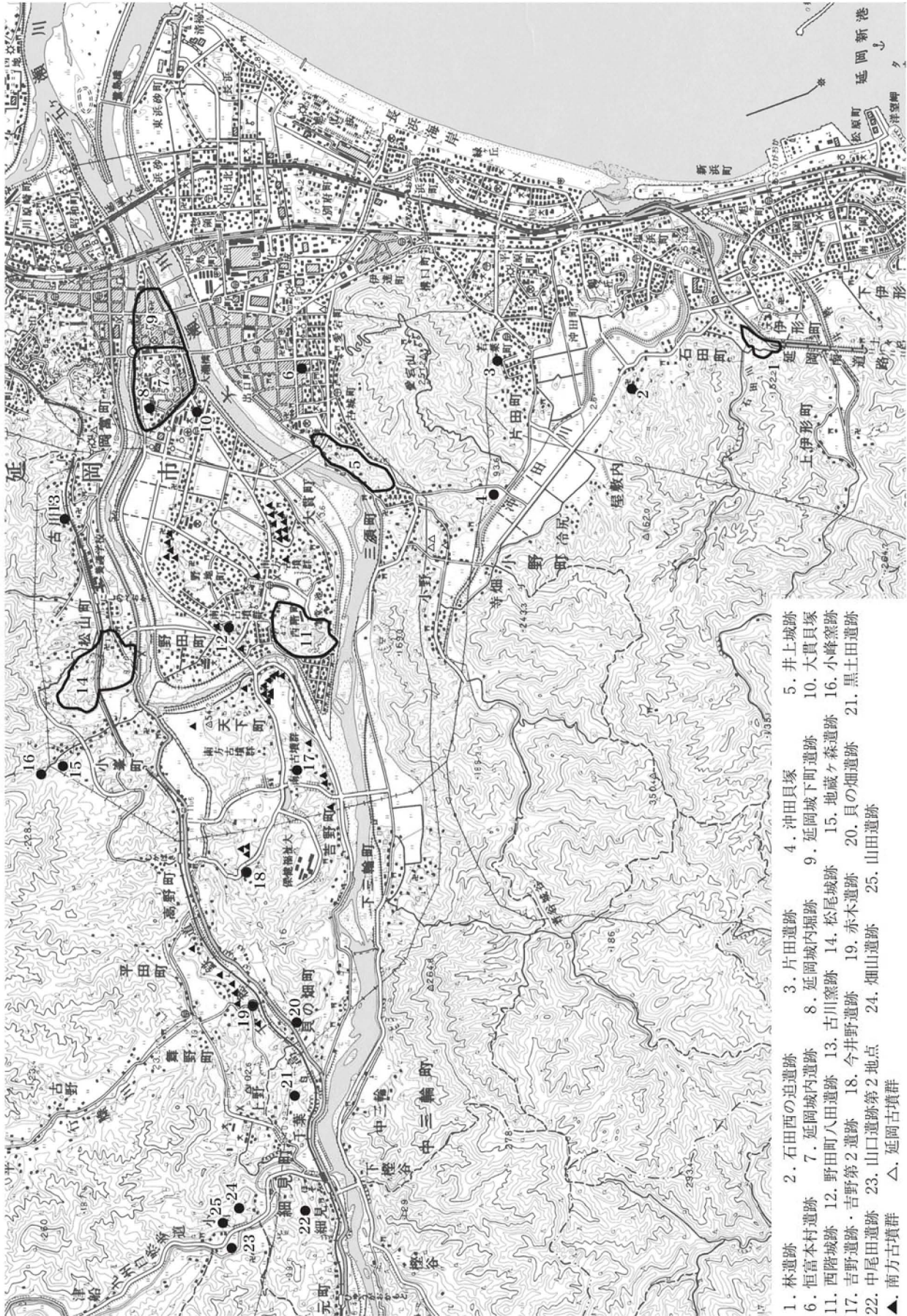
弥生時代～古墳時代のうち、弥生時代前期から中期の様相については不明瞭だが、後期になると遺跡数が拡大する。貝の畑遺跡や野田町八田遺跡で後期の竪穴住居跡が確認されている。水田跡は延岡城内堀跡や差木野遺跡¹⁾で確認されている。そのうち延岡城内堀跡では水田の一部やそれに伴う土留め用の矢板、県北初の出土となる木製農具が出土している。

また瀬戸内地方との交流を示す資料として、三須町出土の二段矢羽透かしを有する高坏が有名であり、恒富本村遺跡や差木野遺跡等でも瀬戸内系土器が出土している。

弥生後期後半から古墳時代後期になると中尾原遺跡をはじめ、畑山遺跡、地藏ヶ森遺跡、山口遺跡第2地点等、集落の確認例が増加する。そのうち、中尾原遺跡では64軒の竪穴住居跡や掘立柱建物跡、土坑等、大規模集落が確認されている。また畑山遺跡では竪穴住居跡6軒のうち1軒から小鍛冶跡と考えられる遺構も確認されている。また山口遺跡第2地点は細見川左岸の微高地上に古墳時代中期～後期の住居が約30軒確認されており、同流域の丘陵上に展開する中尾原遺跡や畑山遺跡との関連性が注目される。

また市内では南方古墳群をはじめ延岡古墳群、檜山古墳群等など数多くの古墳が確認され、国指定もしくは県指定史跡になっている。当遺跡周辺では石田西の迫古墳群があり、昭和53年の調査では凝灰岩製の組み合わせ石棺が確認されており、石棺内では人骨や刀、刀子、貝輪が出土している。

古代平安期には宇佐宮領の荘園になり、今山八幡旧記に「伊福形」という地名が登場するようになる。やがて中世にはいと、県荘を伊東氏、岡富荘を土持氏、大貫・伊富形が島津氏のそれぞれが治めるようになり、やがて三氏による対立・勢力抗争へと発展していく。こうした流れのなかで井上城や西階城、松尾城等といった山城が次々と築城されることになる。また当該期の他の遺跡としては、十数軒の掘立柱建物跡や土坑が確認されている畑山遺跡や古川窯跡等が挙げられる。



- 1. 林遺跡
- 2. 石田西の迫遺跡
- 3. 片田遺跡
- 4. 沖田貝塚
- 5. 井上城跡
- 6. 恒富本村遺跡
- 7. 延岡城内遺跡
- 8. 延岡城内堀跡
- 9. 延岡城下町遺跡
- 10. 大貫貝塚
- 11. 西階城跡
- 12. 野田町八田遺跡
- 13. 古川窯跡
- 14. 松尾城跡
- 15. 地藏ヶ森遺跡
- 16. 小峰窯跡
- 17. 吉野遺跡・吉野第2遺跡
- 18. 今井野遺跡
- 19. 赤木遺跡
- 20. 貝の畑遺跡
- 21. 黒土田遺跡
- 22. 中尾田遺跡
- 23. 山口遺跡第2地点
- 24. 畑山遺跡
- 25. 山田遺跡
- ▲ 南方古墳群
- △ 延岡古墳群

第1図 遺跡位置図 (S=1/5,000)

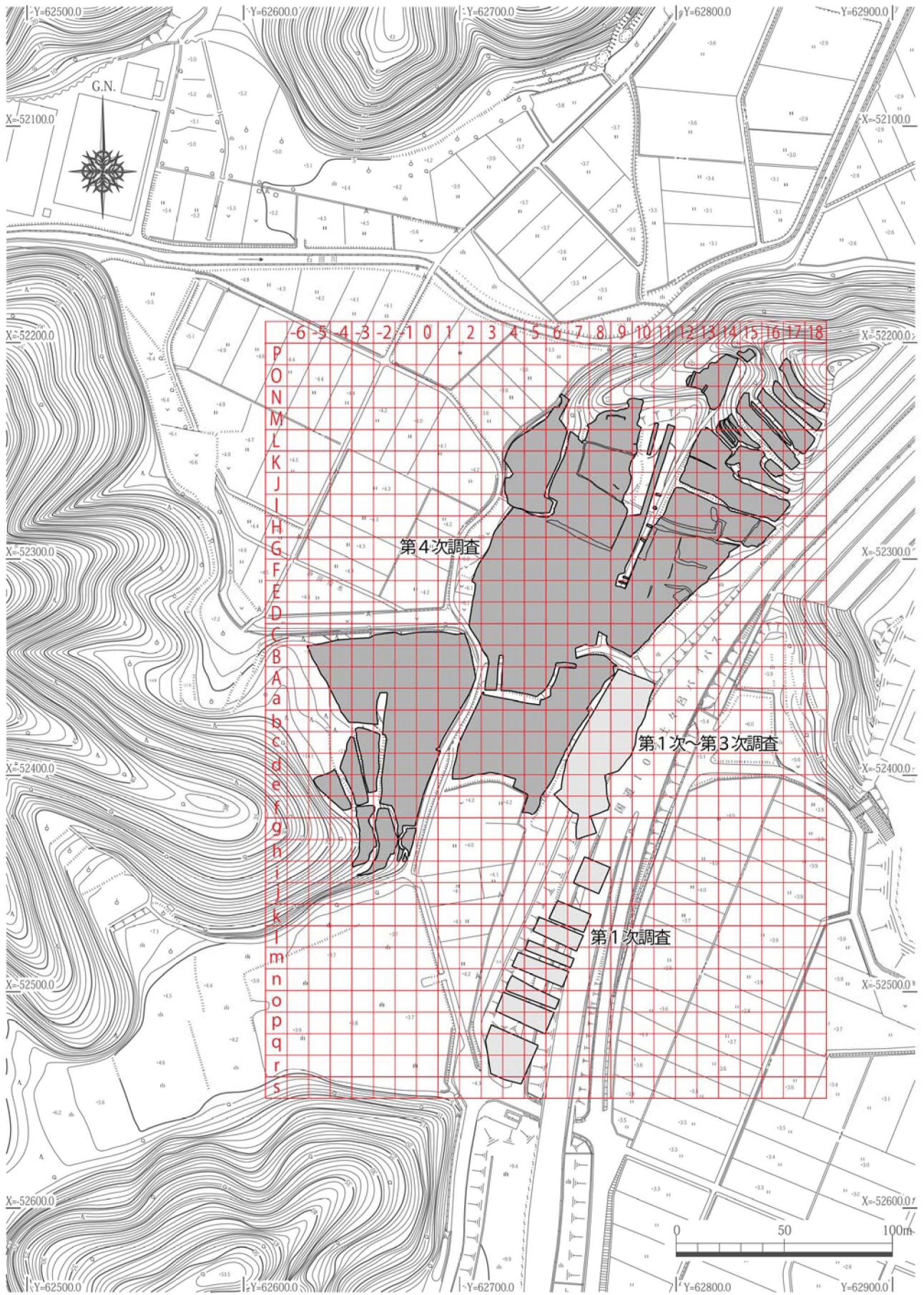
近世に入ると高橋氏が松尾城から中州内の丘陵地に縣城（のちの延岡城）を築城し、周辺の整備に着手する。やがて高橋氏から有馬氏、三浦氏、牧野氏を経て、内藤氏の藩政に至り、安定期を迎えることになる。当該期の遺跡は数多く残されており、延岡城（延岡城内遺跡）や城下町（延岡城下町遺跡）、小峰窯跡や古川窯跡の窯跡等が確認されている。

【註】

1) プラントオパール分析結果より、後期の水田跡の存在が確認されている。

【参考文献】

- 兵藤健次・日高輝文 1989『東白杵・延岡地域 土地分類基本調査 延岡・島浦』宮崎県
- 延岡市教育委員会 1978『野田八田遺跡』
- 延岡市教育委員会 1981『南方古墳群第19号・石田組合せ石棺』延岡市文化財調査報告書第1集
- 延岡市教育委員会 1987『赤木遺跡・多々羅遺跡』延岡市文化財調査報告書Ⅲ
- 延岡市教育委員会 1990『今井野遺跡』延岡市文化財調査報告書第4集
- 延岡市教育委員会 1990『片田遺跡（概報）』延岡市文化財調査報告書第5集
- 延岡市教育委員会 1991『上南方地区遺跡 中尾原遺跡 山口遺跡』延岡市文化財調査報告書第6集
- 延岡市教育委員会 1992『上南方地区遺跡 中尾原遺跡 畑山遺跡』延岡市文化財調査報告書第8集
- 延岡市教育委員会 1992『差木野遺跡』延岡市文化財調査報告書第9集
- 延岡市教育委員会 1995『黒土田遺跡・赤木第2地点・上無田遺跡・平野遺跡・上麦野遺跡・浄土寺山古墳』平成6年市内遺跡発掘調査事業に伴う埋蔵文化財調査報告書 延岡市文化財調査報告書第24集
- 延岡市教育委員会 2001『吉野遺跡（第4次）・吉野遺跡（第6次）・延岡古墳群第16号墳、多々羅第1遺跡・新宮遺跡・吉野遺跡（第7次）』平成12年市内遺跡発掘調査に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 延岡市文化財調査報告書第24集
- 延岡市教育委員会 2001『延岡市の文化財』
- 延岡市教育委員会 2002『上無田遺跡（第3次）・赤木遺跡（第7次）』平成13年市内遺跡発掘調査に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 延岡市文化財調査報告書第25集
- 延岡市教育委員会 2002『延岡城内遺跡Ⅰ』延岡市文化財調査報告書第26集
- 延岡市 2003『延岡市史』市制70周年記念10史
- 宮崎県 1989『宮崎県史』資料編 考古1
- 宮崎県 1993『宮崎県史』資料編 考古2
- 宮崎県 1997『宮崎県史』通史編 原始・古代1
- 宮崎県教育委員会 1987『林遺跡』『宮崎県文化財調査報告書第30集』
- 宮崎県教育委員会 1988『地蔵ヶ森遺跡』『宮崎県文化財調査報告書第31集』
- 宮崎県教育委員会 1990『林遺跡』一般国道10号土々呂バイパス建設関係発掘調査報告書
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2007『山田遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第146集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2007『吉野第2遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第155集



第2図 遺跡周辺地形図 (S = 1 / 2,500)

第Ⅱ章 調査の方法と概要

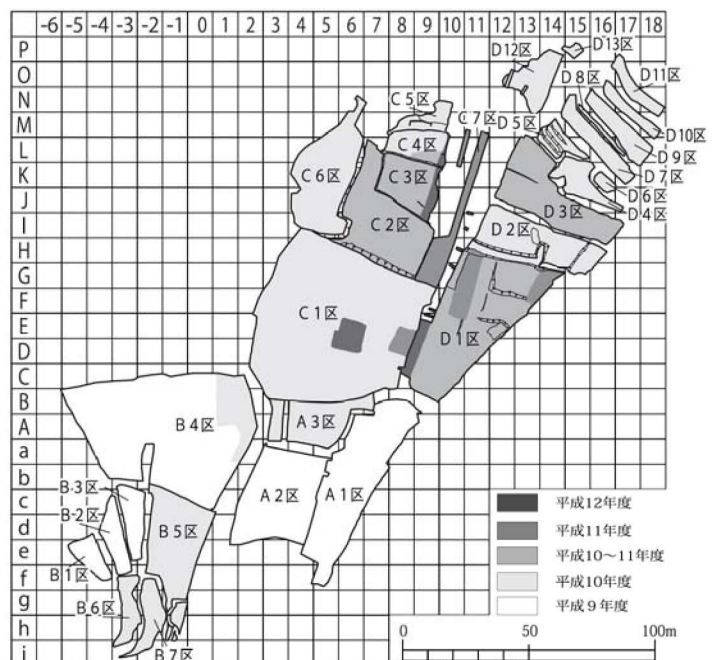
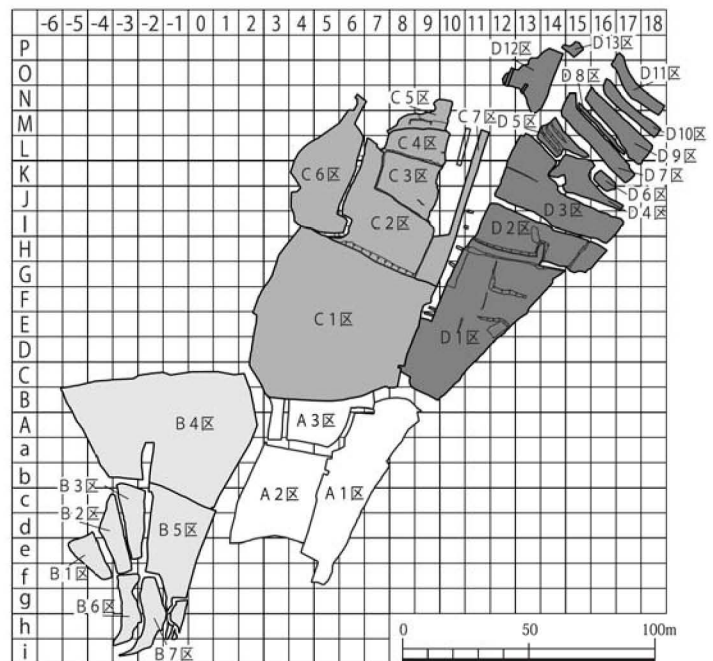
第1節 調査の方法

北側に形成されている丘陵（以下、独立丘陵）は南北に走る延岡南道路（土々呂バイパス）によって東西に分断されているのをはじめ、その東側は延岡市立伊形小学校建設や宅地造成等により改変が進んでいる。さらに同丘陵西側の緩斜面中央を農道が南北に走り、その北側が挟れたようになっている。地元の人のお話では、土取りが行われ、家屋の土壁等に利用されていたとのことである。現況では独立丘陵南側緩斜面及び西側丘陵東側緩斜面は主に畑地として、独立丘陵の北側の低地及び両丘陵に挟まれた低地は主に水田としてそれぞれ利用されていた（第2図）。

調査は、工事計画及び用地買収の関係により、独立丘陵裾部をA1区、その西側低地をA2区、A2区北側をA3区とし、西側丘陵東側緩斜面をB1～7区、独立丘陵の農道から西側をC1～7区、農道の一部とその東側をD1～13区を便宜的に分けながら調査を行った。

調査は重機による表土剥ぎを行った後、国土座標（日本測地系）に準じた10m×10mグリッドを単位とし、調査区ごとに設定し、基本となる各グリッド杭の設置は業者に委託し、必要に応じて、測量に必要な杭の設置は当センターが行った。その後、整理段階でグリッドを統一し、X=-52,360m、Y=62,680mを基準に、南北方向にアルファベット（北にA、B、C…、南にa、b、c…）、東西方向に整数（西に0、1、2…、東に-1、-2、-3…）を付し、グリッドを「A・1グリッド」などと呼称することにした（第3図）。

調査については、丘陵部については表土を除去するとすぐに古墳～中近世の遺構が検出できることから、全面調査を行い、下層（旧石器包含層）については、トレンチによる包含層の有無と広がりを確認し、その結果に基づき、



第3図 調査区及び年度別調査範囲（S=1/3,000）

土層観察用のベルトを残した状態で、グリッド（10m×10m）ごとに掘り下げ、もしくはグリッドをさらに4分割して、千鳥掘りを行うことを基本にし、遺構・遺物が確認された時点で周辺に拡張する方法をとった。

また検出された遺構については、半裁・埋土状況を確認後、完掘を行った。遺構実測は基本的には、礫群は縮尺10分の1、土坑・竪穴住居跡等は縮尺20分の1、柱穴等は縮尺50分の1で図化を行った。

また包含層（旧石器）出土遺物については、個々に番号を付け、平板測量（縮尺50分の1）を行い、取り上げを行った。

第2節 調査の概要

林遺跡第4次調査は、工事計画および調査対象区内の用地買収の進捗により、平成9年度は平成9年6月30日～平成10年1月30日（9,800m²）の7か月間、平成10年度は平成10年5月6日～平成11年3月25日（14,400m²）の約9.6か月間、平成11年4月8日～平成11年8月24日（3,500m²）約4.5か月間、平成12年6月8日～平成12年7月31日（720m²）の約1.8か月間、計4度にわたって実施された。

平成9年度は、第2・3次調査地に隣接するA1区及びA2区（調査対象面積約6,000m²）を6月30日～12月27日の予定で実施した。6月30日よりA1・2区の重機による表土剥ぎに着手した。A1区は畑として利用されていたが、畑耕作土を除去すると縄文早期から中近世までの各時期の遺構・遺物が混在する状態で検出された。出土遺物の取り上げと遺構精査を並行して行ったが、調査時期が夏期であったことと、保水性の低い土層であったことから乾燥が著しく、水撒き・シート掛けを行い、遺構の保護に努めながら調査にあたった。調査の結果、旧石器時代～縄文時代早期の集石遺構4基や古墳時代と思われる竪穴住居1軒、平安時代末頃の土壙墓2基、古代～中世と思われる掘立柱建物跡5軒等を確認した。遺構面の調査が終了した後、10月3か所にトレンチを設定し、掘り下げを行ったが遺構・遺物は確認されていない。8月からは並行して、A2区の調査を開始した。まず、排水及び土層確認用のトレンチを設定し、掘り下げ作業を行った。湧水のため、水中ポンプを設置し、随時、汲み上げを行いながら作業を行った。土層確認の結果、埋没水田が確認され、層ごとに掘り下げ、精査、遺構検出に努めた。9月後半からは、調査の効率化のため、ベルトコンベアー、キャリアダンプを導入して作業にあたり、10月には掘り下げ作業と並行して土層断面および遺構の図化作業を行った。調査の結果、3面の水田面とそれに伴う畦畔や溝状遺構等を確認したが、畦の位置と方向が現在のものと一致し、出土遺物も近現代のものであったため、近現代の水田と判断した。そのためA2区の南側については、調査対象から除外した。

10月23日に国土交通省と調査の進捗状況と用地買収の進展等について協議を行った。そのうち用地買収状況から西側丘陵部分（B区）については、大半が買収を完了したのに伴い、約3,000m²を継続して行うことになった。

10月31日より、B区にトレンチを設定し土層確認を行い、11月4日から重機によりB1区～B4区の表土剥ぎを行った。その後、各調査区で掘り下げ・精査・遺構検出作業を行ったが、そのうちB1区やB2区ではピットや土坑等を確認した。B1・2区は比較的遺構密度が低かったのに対し、B3区は密度が高く、古墳時代～中世と思われる竪穴状遺構3基、中近世の溝状遺構1条検出した。そのうち、溝状遺構は幅1m長さ11mを測り、遺構内に3～4段の石列が伴っていた。

B4区では用水路埋設の攪乱や木根等が多く、検出された遺構の密度は低かった。また1月9日には、西側を重機で拡張したが、攪乱が著しく、精査を行ったが遺構等は確認されなかった。遺構は中世～近世の掘立柱建物跡2棟、溝状遺構2条等を検出した。そのうち、溝状遺構は掘立柱建物跡が集中する緩斜面に東側から上がる構造であり、2条並んで検出された。片方には床面に敷石が認められ、他方には門状遺構と推定される柱穴が伴っており、屋敷地への入口と考えられた。1月30日までに平成9年度の調査を終了したが、溝状遺構の一部は南側の調査範囲外に延びていたため、次年度に再調査を行うこととし、安全対策のため埋め戻しを行った。

平成10年度は、4月9日に国土交通省と用地買収状況および調査予定等について協議を行った後、5月6日より調査を開始した。前年度埋め戻した通路状遺構の復旧を行った後、重機でB4区北東部およびB5区の表土剥ぎを行った。表土剥ぎ後、B4区の精査を行ったが、遺構・遺物等は確認されず、B5区に作業を移した。通路状遺構の続き部分では、埋土中に多数の礫と底面付近で敷石に転用された石塔（五輪塔）を検出した。また、5月21日には大型の石を円形に配置した石組井戸を1基検出した。石組井戸の深さは3mを超し、作業は困難を極めた。井戸を構築する石の大部分は石塔を転用したものであり、断面見通しの実測を進めながら上段から順に解体した。取り上げには、丸太槽に取り付けたチェーンブロックを利用した。その他、遺構としては、掘立柱建物跡1軒、埋葬土坑1基、溝状遺構1条、柱穴群等が確認されている。

B6・7区は、国土交通省が立木の伐採を行った後、6月3日より表土剥ぎに着手したが、五輪塔が部分的に表出しているため、人力で作業にあたった。検出された石塔群の多くは原位置を留めず、斜面に廃棄されたものと判断した。他には竪穴住居1軒、近世墓2基、土坑1基、柱穴等を検出した。近世墓については、遺構を取り囲む柱穴と多数の瓦片が伴っており、瓦葺きの上屋を伴っていたことが想定された。

B区の調査は7月24日に終了したが、安全対策のため、通路状遺構や井戸等については埋め戻しを行った。

B区の調査と並行して、7月6日よりC1区の表土剥ぎを行った。大半がIV層上部まで削平を受けており、多数の柱穴とともに旧石器時代の礫群も検出された。8月18日からは、北側のC2～5区、10月21日・22日にはC6区、丘陵斜面のD12・13区の表土剥ぎを行った。

精査の結果、C1～4区では中近世の掘立柱建物跡13棟、土壙墓1基、牛馬埋葬土坑5基、祭祀土坑1基、貝殻廃棄土坑2基等が検出された。検出された掘立柱建物には、3間×5間の総柱で4面に底を持つものや、2間×7間の大型建物も含まれていた。祭祀土坑からは鑄造鉄鍋が伏せた状態で出土し、その下からは木炭敷の上に鉄短刀1、銅鏡1枚、銭2束が出土した。土壙墓からは頭骨および下顎、腕・足骨や和釘が検出された。特にC2区は遺構密度が高く、調査の進捗を考慮し、11月26日に写真測量を行い、平面図化を行った。

12月からは、C1区でIV層（旧石器包含層）の掘り下げを行う。3月3日には作業を終了し、4日からはC2区の掘り下げ作業を行った。

旧石器時代の遺構は、C1～2区で礫群18基、遺物ではナイフ形石器や剥片尖頭器、角錐状石器、スクレイパー等、約600点が出土した。

10月27日からは、重機でD1～2区の表土剥ぎを行い、C区と並行して調査を行った。D1区で古墳

時代の竪穴住居跡3軒、中近世の掘立柱建物跡3棟、D2区で中世～近世の掘立柱建物跡5棟、溝状遺構1条、馬埋葬土坑1基が確認されている。そのうち、馬埋葬土坑については大型の陶器甕を破碎し土坑内に敷きつめた上に馬を埋葬していた。10月30日には鹿児島大学獣医学科西中川駿教授を特別調査員として招聘し、分析をお願いした。

12月3日には国土交通省と用地買収状況と調査の進捗状況、現地公開等について協議を行い、買収済未調査地（D3区～11区）については伐採後、調査を実施することとした。また現地説明会については国土交通省の理解を得て12月23日に実施し、約200人の見学者が集まった。

1月8日からD3区の調査を開始した。遺構埋土が硬質であり、掘り下げは困難を極めた。調査の結果、掘立柱建物跡7棟、溝状遺構や土坑等を確認した。

調査着手当時、産業廃棄物が山積され調査から除外していたA3区は、2月上旬に表土剥ぎを実施した。C1区から広がる遺構の検出や遺物包含層の残存が想定されたが、既にかんがりの削平を受けており、遺構・遺物等は検出されなかった。

3月25日には平成10年度の調査を終了した。

平成11年度は、調査員を一新し、前年度にC2区で確認された旧石器時代の礫群や近世の廃棄土坑の実測、及びC3区・D1区の旧石器包含層の掘り下げ、D3区の馬埋葬土坑の実測、柱穴群の未図化分の実測、新たに買収された箇所調査、B区で出土した石塔の実測を行う予定で4月8日より調査を再開した。

まず、C3区の包含層（IV層）の掘り下げ作業を行いながら、並行して前年度末に検出されたC2区の礫群の実測作業を行った。また、プレハブ内では前年度、出土した五輪塔のうち、保存状況の良好なものについて実測作業を行った。

C3区では後世の遺構等の影響をかなり受けており、遺物の包含状況は芳しいとは言えなかったが、少量ながら剥片尖頭器やスクレイパー等出土した。IV層掘り下げ後、トレンチ（約2m幅）を南北方向に7本設定し、IX層上面まで掘り下げを行った。その際、ブラックバンド層とされていた層中より始良Tn火山灰層が確認でき、遺物も同火山灰上位の遺物が出土していることから、さらに分層（V・VII層）し、V層までは全面的に掘り下げを行い、V層で遺物が確認できた箇所については、VIII層まで掘り下げを行った。そのうち中央に設定したトレンチ内でV層またはVII層起源の埋土をもつ土坑（SC1）を検出した。またC4区南東側部分にもIV層が残存する部分が認められ、掘り下げを行い、IV層～VII層で剥片等が出土している。

C2区ではIV層まで掘り下げ作業が終了していたが、V層面で遺物が散見されることから、礫群の実測終了後、トレンチ（約2m幅）を2m置きに設定し、V層～VII層まで掘り下げを行い、遺物が出土したトレンチについては周囲に拡張する方法で行った。その結果、遺構はJ・6グリッドで土坑（SC2）1基を確認したが、V層またはVII層中では確認が困難であり、IX層が現れてきた段階で結果的に確認できたという状況であった。また遺物はV層で散漫な分布が認められたがVII層については、上層から落ち込んだ遺物が数点認められた程度で、他は確認されなかった。同区の調査後半には並行して近世の廃棄土坑の実測・写真撮影を行ったが、その際、土坑に切られる形で馬埋葬土坑（SC5）を新たに確認した。

4月21日からはD1の調査を再開した。精査の結果、新たに古墳時代の竪穴住居跡（SA4）を確認

した。また北側の一部と南側でⅢ層（そのうち南側の一部でⅡ層も残存。）が残存していることから、その箇所掘り下げから行った。石鏃や尖頭器、姫島産黒曜石製の剥片等の縄文時代早期の遺物に混ざってナイフ形石器や角錐状石器等が出土した。掘り下げ終了後、Ⅳ層上面で調査区中央～南端にかけて自然流路を検出した。自然流路は南北に走り、北西側の未買収地に延びることが確認されたため、検出した部分については完掘・図化を行い、終了後、Ⅳ・Ⅴ層の掘り下げ作業を行い、礫群4基と石器群が検出された。また一部についてはⅦ層掘り下げを行ったが、石器が数点の出土に留まった。

5月18日からはD1区の調査と並行して、D3区の柱穴群と馬埋葬土壌（SC2）の実測を行った。湧水のため、柱穴内に水が溜まり、くみ出し作業を随時行いながら作業を行った。

6月6日には国土交通省と用地買収状況および調査予定等について協議を行った。そのうち用地買収については、C1区中央東側およびD1区北東側の未買収地の買収が完了し、D1区北東側、C・D区に挟まれた部分（C7区）の2箇所についても6月末には完了する報告を受けた。また残りの部分については夏以降に買収がずれ込むため、今年度の調査から除外した。これらに伴い6月16・17日からはC1区中央東側およびD1区北東側の表土剥ぎを行った。そのうち、C1区中央東側は旧石器時代のスクレイパーや剥片に伴って礫群3基が確認された。またD1区北東側では旧石器時代の自然流路1条、古墳時代の竪穴住居跡（SA5）1軒、中近世の柱穴群が検出された。7月19日には買収が完了したD1区北東側、C7区の2箇所の表土剥ぎを行ったが、Ⅸ層まで削平を受けているため、遺構・遺物が確認されず、調査を終了した。

7月後半からは集中豪雨等により、度々D1区南側が浸水する被害を受け、作業がその都度中断した。8月13日には調査が終了し、8月23・24日に重機による埋め戻しを行った。また石塔については国土交通省および延岡市教育委員会と保存について協議を重ねたが、結論は次年度に持ち越すことになり、石塔の一部の計測と写真撮影を残し、工事に支障のない場所に移設した。

なお、7月8・9日には、別府大学の橋昌信教授が特別調査員として来跡し、指導を受けた。

未買収地（C1区中央部、C3・4区東端部、D1区西端）の買収がようやく完了し、平成12年度は6月8日より調査を再開した。すでにD区では掘削工事が始まり、大型車が頻繁に排土運搬のために行き来することから、安全面を考慮し、交通整備員を付けて作業にあたった。またC1区については作物が植えられたままになっていたことから、確認が取れるまでの間、残り2箇所の調査を優先して行うことにした。C3・4区東端部からは、旧石器時代の石器や中近世の柱穴等を確認し、またD1区西端では、近世の道路状遺構を検出した。道路状遺構は北側に延びる可能性があったため、調査区の拡張を検討したが、すでに北側には工事用道路が建設されていたため、安全性の問題から道路南側については、2箇所にトレンチを設定し、範囲をのみ確認・記録を行い、埋め戻した。また道路北側についても4箇所にトレンチを設定し、掘り下げを実施したが、遺構は確認されず、終了した。

C1区中央部の作物撤去が終わり、6月23日からはD1区西端の調査と並行して、同地区の調査を開始し、旧石器時代では礫群1基とスクレイパーや剥片等、中近世では柱穴や土坑等を確認した。

7月上旬からは石塔の計測・写真撮影を行った。なお、出土した石塔群については、国土交通省・延岡市教育委員会と保存について協議を重ね、当センターで一部を保管するほか、延岡市教育委員会が五輪塔として組み合わせ可能なもののうち、5個体分を移設保管することになった。それ以外については、工事区内に埋設保存の措置が採られ、7月31日に全ての調査を終了した。

第3節 遺跡の層序

今回の調査範囲は、丘陵部（A1・A3・B・C・D区）から低地部（A2区）に及んでいる。丘陵部と低地部とは堆積状況が異なることから、それぞれに分けて説明していきたい。

1. 丘陵部（A1・A3・B・C・D区）の層序

丘陵部では、傾斜による土層堆積の不整合や流出、後世の耕地化による削平や攪乱により、一部を除きⅡ・Ⅲ層が欠失しており、表土（耕作土）下にⅣ層が確認された。

特に、C・D区では大半がⅣ層上部まで削平されており、場所によっては削平が著しく、さらに下層のⅩ層や岩盤が露出する部分も見られた。Ⅳ層やⅤ層は比較的安定している部分が多く認められるに対し、下層に進むにつれて、堆積が不安定な部分が認められる。またⅧ層以下については土層確認のために数カ所を深掘したが一様ではない。基本的に岩盤起因の細礫層と粘質土との交互層で、岩盤へと至るが、礫層（小砂利や拳大～人頭大程度の砂岩礫）が露出する箇所も認められた。なお、古環境研究所の植物珪酸体分析結果によると、Ⅱ層およびⅢ層の堆積当時にかけては、周辺でシイ属、クスノキ科、イスノキ属などの照葉樹林が成立・拡大し、林床植生などとしてササ類が生育していたと考えられ、ススキ属やチガヤ属などが生育する草原的なところも見られたと推定されるのに対し、Ⅳ層およびⅤ層かけては、クマザサ属（おもにミヤコザサ節）などのササ類を主体としたイネ科植生であったと考えられ、比較的寒冷な気候条件で積雪の少ない比較的乾燥した環境であったと推定される。またⅤ層およびⅩ層の堆積当時は、ススキ属やチガヤ属、キビ族、クマザサ属（おもにミヤコザサ節）、ネザサ節などが生育するイネ科植生であったと考えられ、周辺にはイネ科Bタイプの給源植物（ヌマガヤ？）などが生育する湿地的なところも見られたと推定されている。

I層 表土

Ⅱ層 黄橙色土層 アカホヤ火山灰層との混土でややしまりが無い。D1区南端部で残存するのみである。

Ⅲ層 暗褐色土層 やや硬質でしまりがある。主に縄文時代早期の遺物を包含する。D1区南側で残存するのみである。

Ⅳ層 褐色土層 旧石器の包含層で、主にC1～3区及びD1区の層上面が古墳時代や中・近世の遺構検出面である。二層に分層でき、a層はやや軟質で粘性があり、赤色や白色の黄色粒を含む。乾燥するとサラサラになる。場所によっては、細礫を含む部分や下位につれて粘性が強くなる部分も認められる。b層はa層より色調が暗く、Ⅴ層ブロック（φ1cm前後、場所によっては3～5cmのものも認められる。）を多く含有する。C1区中央付近～南側にかけてやD1区の南側で認められる。

Ⅴ層 黒褐色土～暗褐色土層 硬質で締まりがあり、クラックが発達している。白色粒（φ0.5～1mm前後）や火山灰ガラス等を多量に含む。またⅧ層と比べ、削った感触が粗く感じられた。旧石器の包含層である。

Ⅵ層 始良Tn火山灰層 C3区東端で一部層を成す以外は、ブロック状に堆積する箇所の方が多い。D1区では、殆ど確認できていない。

Ⅶ層 黒色土層 硬質でしまりがあり、クラックが発達している。Ⅴ層と比べ、色調がやや暗い。いわゆるブラックバンド層で二層に分層でき、a層は白色粒（φ0.5～1mm前後）を少量含み、黄色軽石（φ1mm前後）を僅かに含む所も認められる。b層は白色粒があまり認められず、赤色や明褐色等

の岩片を少量含む。C 1 区南半部やD 1 区の南側では確認されていない。

Ⅷ層 褐灰色細礫層 白色や黄色等の細礫 (ϕ 1 ~ 5 mm前後) で構成され、硬質である。

Ⅸ層 にぶい橙色土~にぶい褐色土層 粘性があり、白色や黄色等の細礫を含む。なおC 1 区のもののは色調がやや明るく含有量も他のものと比べ、量が多く、さらに含有量により二層に分層できる(細礫の含有量: $A > B$)。このため、別層の可能性もあるが、ここでは同層に含めた。

X層 明黄褐色土層 硬質で締まりがある。白色や黄色等の細礫を多量に含有する。なおA 1 区では含有量により、二層(細礫の含有量: $a > b$)に分層できる。

X I層 明褐色土層 水気を帯び、軟質で粘性が強い。乾燥すると硬質になる。白色や黄色等の細礫を僅かに含有する部分も認められる。C 1 区では堆積が薄くなる。

X II層 にぶい赤褐色土層 やや軟質で粘性がある。僅かに細礫 (ϕ 1 ~ 2 mm前後) や小砂利 (ϕ 2 ~ 5 mm前後) を含む。

X III層 礫層 ϕ 2 cm~拳大程の円礫で構成される。C 1 区南端のトレンチ内およびD 1 区西側で確認されている。

2. 低地部 (A 2 区) の層序

低地部は、水田として利用されており、耕作及び水の影響により丘陵部とは異なる土層の状況を示していた。本来的には丘陵部から供給されたシルト岩の碎片と水生粘土層が攪拌されたものと思われる。1層は現水田耕作土及び床土である。2層以下でも水田耕作が営まれたものと思われる。

1層-1 表土 やや軟質。 ϕ 1 ~ 5 mmの明褐色シルト岩粒を含む。膜状及び雲状斑鉄を含む。シルト質。

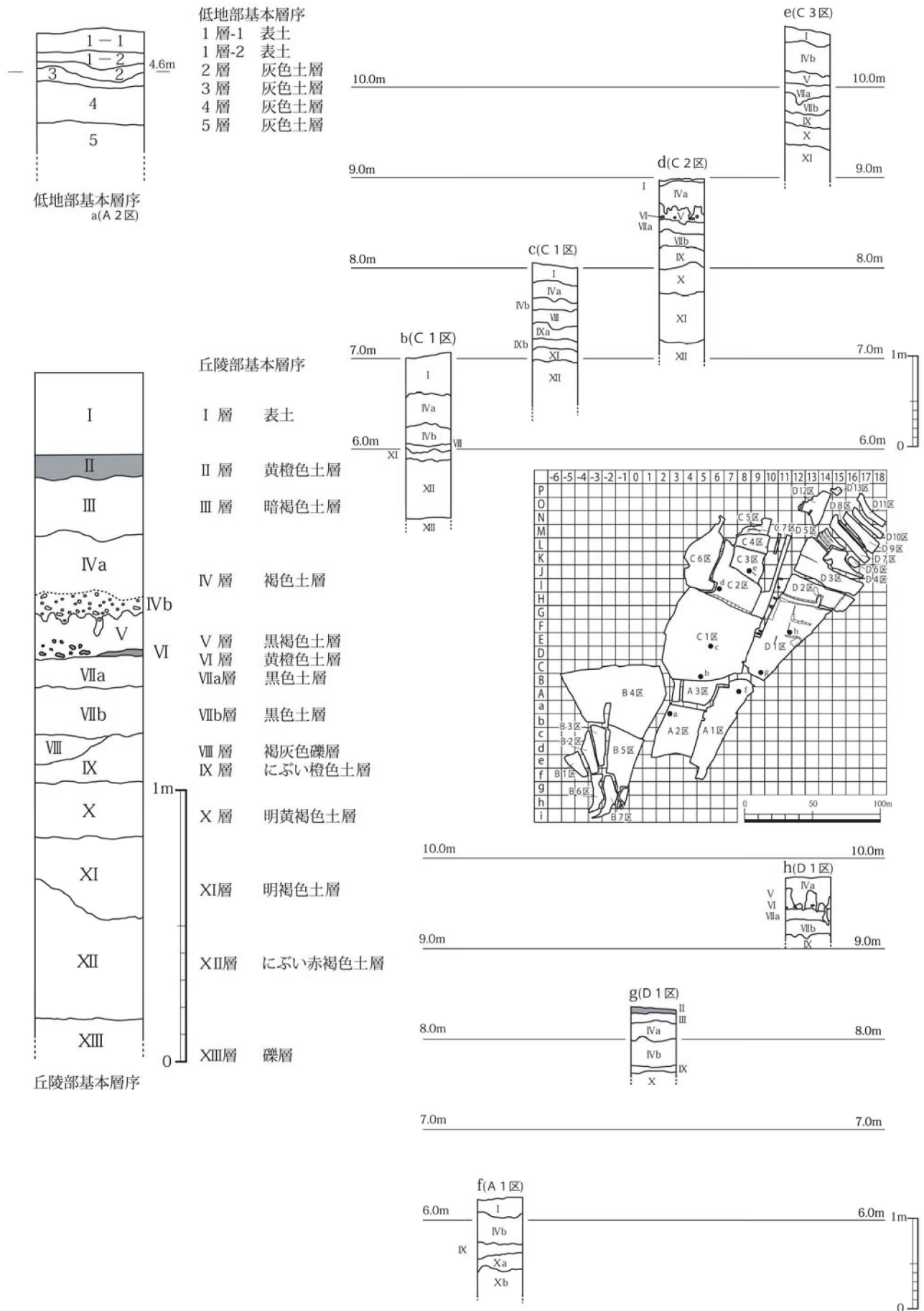
1層-2 表土 やや軟質。 ϕ 1 ~ 5 mmの明褐色シルト岩粒を含む。雲状斑鉄を含む。シルト質。

2層 灰色土層 硬質。 ϕ 1 mm~1 cmのマンガン粒が集中する。ポロポロと崩れ、もろい。

3層 灰色土層 やや軟質。 ϕ 3 mm前後のマンガン粒を少量含み、 ϕ 1 mm前後の赤色・黄色シルト岩粒を含む。2層のマンガン粒より色が薄い。砂質に近いシルト層。

4層 灰色土層 やや軟質。 ϕ 2 ~ 3 mmのマンガン粒及び3 mm前後の礫粒を少量含む。やや粘質でしまりが無い。きめはさほど細かくない。

5層 灰色土層 やや軟質で粘性あり。 ϕ 3 ~ 5 mmのマンガン粒少量及び3 mm前後の礫粒を含む。湧水層である。



第4図 基本層序 (S = 1 / 20) 及び各地区の層序 (S = 1 / 60)

第Ⅲ章 A区の調査

A区は、C・D区側から続く丘陵裾部の、畑として利用されていた微高地部と、水田として利用されていた低地部からなる。微高地部（A1区）で礫群、竪穴状遺構、掘立柱建物、土坑、ピットを検出した。また、低地部（A2区）では、現水田下に数層の水田跡を確認したが、畦の位置と方向が現在のものと一致し、耕作土中に含まれた陶磁器小片も近現代のものであった。

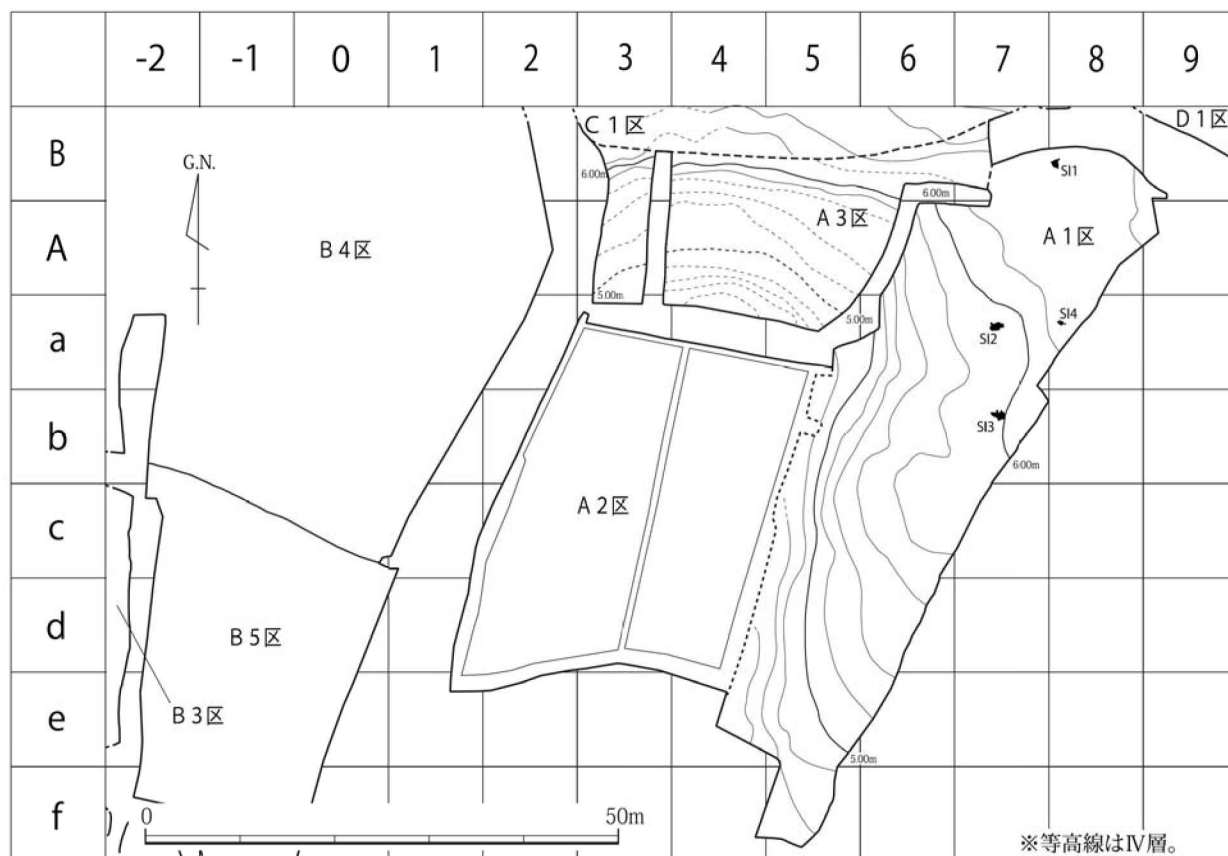
第1節 旧石器～縄文時代の遺構

1. 礫群（S I、第5図・第6図、第1表）

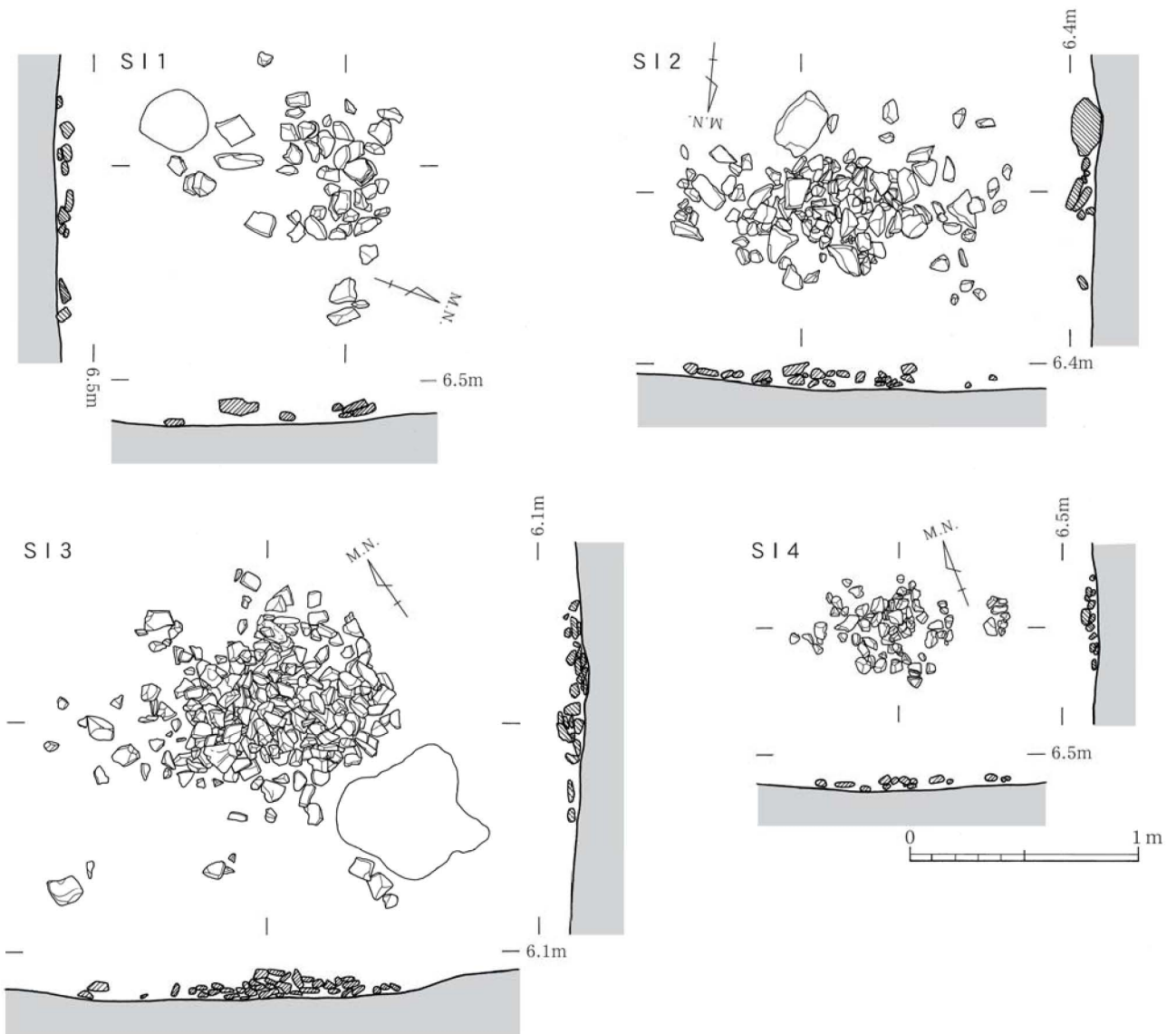
礫群はA1区において、IV層中で4基確認されている。遺構内や周辺には遺物等が確認されていないが、検出層や他の地区検出のものと比較し、旧石器時代の所産と考えられる。しかし断面に若干の凹みが認められることから、掘り込みがあった可能性も否定できず、ここでは旧石器～縄文時代早期の時代幅で捉えたい。

分布はA1区の北側に分布し、そのうち3基（S I 2～4）にまとまりが認められる。礫の密集度はS I 2～4が比較的密であるのに対し、S I 1はやや散漫である。

構成礫は大半が砂岩製の破碎礫で構成されており、S I 2・3の2基については100点以上で構成されている。また礫群の規模は、S I 4のみ1m未満なのに対し、それ以外は1mを超える。なおいずれの礫群にも炭化物等は確認されていない。



第5図 A1区 礫群分布図（S = 1 / 800）



第6図 A1区礫群実測図 (S=1/30)

遺構番号	層位	調査区	グリッド	出土遺物	礫の範囲(m) 最大長×最大幅	掘り込み規模(m) 最大長×最大幅×深さ	礫層 個数	礫の 密度	備 考
SI1	IV	A1	B・8	—	1.2×1.02	—	46	散	礫(約5~20cm)の大半が砂岩で構成。完形に近いものが3点、他は破砕礫。礫の多くが赤変している。
SI2	IV	A1	a・7	—	1.5×0.92	—	122	密	礫(約5~20cm)は砂岩製の破砕礫が多い(完形礫は僅か)。一部、変化が著しい。
SI3	IV	A1	b・7	—	1.58×1.12	—	209	密	礫の大半が砂岩製破砕礫(約5~15cm)で構成。変化が著しい。断面がやや凹む。
SI4	IV	A1	a・8	—	0.94×0.49	—	71	密	砂岩製の破砕礫(約3~10cm)で構成。礫の多くがあまり赤変していない。

第1表 A1区礫群(SI)一覧表

第2節 弥生時代以降の遺構と遺物

1. 遺構

(1) 竪穴状遺構（S A 1、第7図・第8図）

A 1区微高地部のほぼ中央に1基検出した。3.0×2.8mの略方形プランで、検出面から床までの深さは15cmと浅い。主柱穴は4本柱で、貼床、焼土等は見られなかった。

(2) 掘立柱建物（S B 1～5、第7図）

S B 1は、A区北端に検出されたが、北西隅の柱穴が調査区外となっている。2×4間で、棟方向は東西（N-80°-W）である。梁行4.10m、桁行9.35mで、柱穴の平均的な深さは検出面より25cmである。

S B 2は、S B 1の南側に隣接して検出された。1×3間で、棟方向は南北（N-18°-E）である。梁行3.65m、桁行6.10mで、柱穴深は平均で15cmである。

S B 3は、A区のほぼ中央に、S B 4と一部が重複するように検出された。2×3間で、棟方向は東西（N-61°-W）である。梁行3.30m、桁行6.10mで、柱穴深は平均で25cmである。

S B 4は、2×3間で、棟方向は東西（N-68°-W）である。梁行3.55m、桁行5.40mで、柱穴深は平均で25cmである。

S B 5は、2×3間で、棟方向は南北（N-19°-E）である。梁行3.10m、桁行5.20mで、柱穴深は平均で25cmである。

S B 1とS B 2の棟方位はほぼ直交しており、同時期もしくは比較的近い時期に存在したものと考えられる。また、S B 2とS B 5の棟方位も一致している。

(3) 土坑（土壙墓）（S C 1～12、第7図・第8図）

12基の土坑を検出したが、多くは遺物の出土が見られず、時期や機能は特定できない。

S C 1は、隅丸長方形で、東側が既に削平され、西側も検出面より僅かに10cm程度の深さが残るのみであった。鏡1面が出土した。12は湖州六花鏡で、2片に割れ一部が欠損する。径は9.9cmで、厚さ1～2mmと全体に薄い。周縁は扁平気味の蒲鉾形、鏡面はよく研磨され光沢を持つが、背面は鑄上がりの悪さと緑青による腐食で不明瞭である。鈕の頂上を欠損し、その右側に二行の陽鑄銘が見られる。銘は腐食と手擦れによる摩滅が著しいが、縦3.43cm、横1.76cmの大きさで、「湖州真石念 二叔家照子」と判読される。

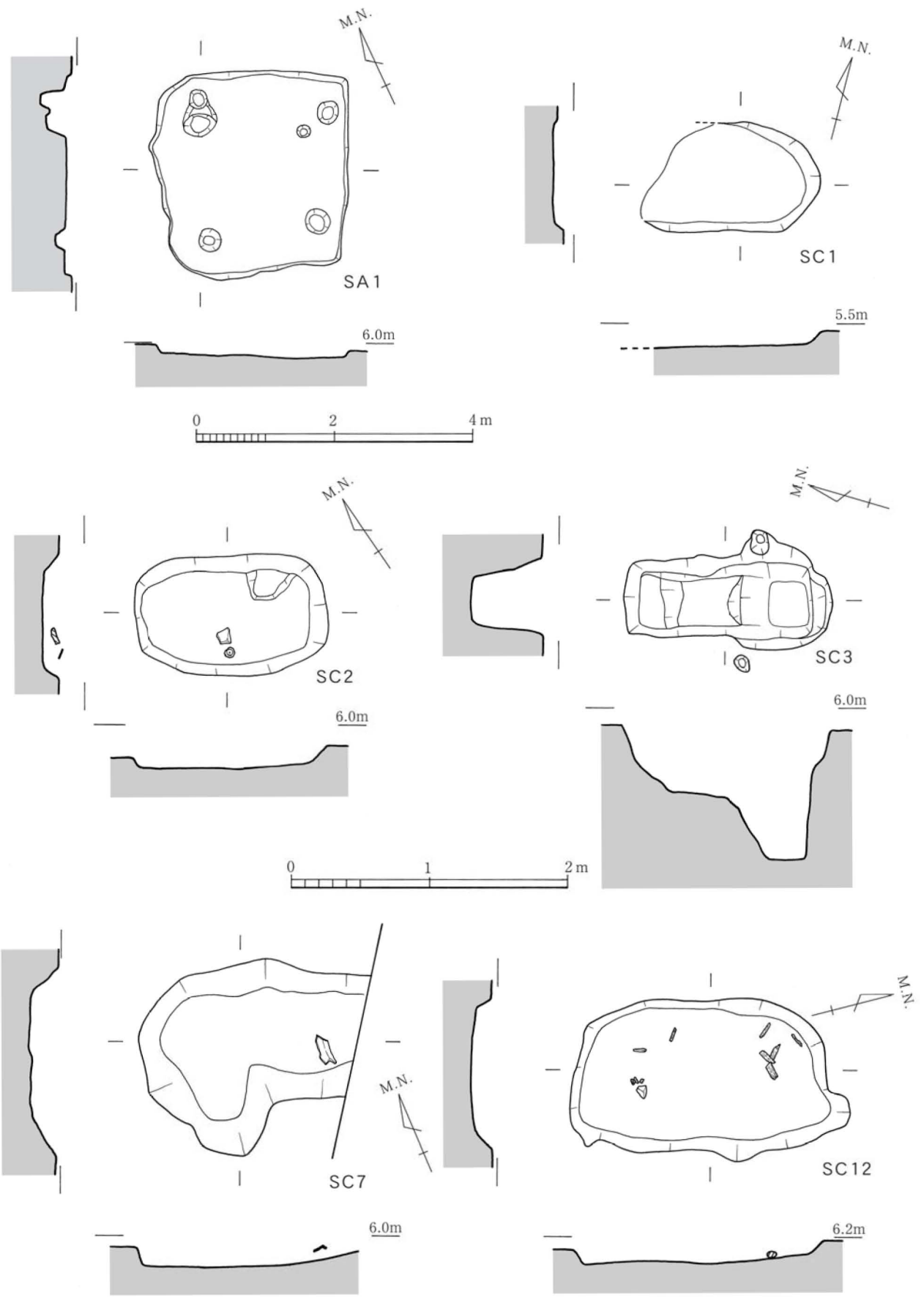
この陽鑄銘は、北九州市足立山頂出土の9面の古鏡の中に、同銘のものが見られる。足立山頂鏡は、湖州鏡6面と平安時代の和鏡3面を組み合わせ埋納したもので、そのうちの1面の湖州鏡に記された針書銘より、承安四年（1174年）に妙見信仰の意趣により奉納されたことが明らかとなっている。

S C 2は、1.40×0.88mの隅丸長方形で、検出面からの深さは15cmと浅く、土坑上半は削平されたものと思われる。南壁寄りの位置から拳大の石と鏡1面が出土した。13は八稜の草葉胡蝶鏡で、対面する稜頂間の径で7.36cmを測る。周縁は僅かに隆起し、鏡面には光沢が残る。背面は1条の陽圏線の内側に、鈕を挟んで対置するように2頭の胡蝶と草葉が陽刻されている。

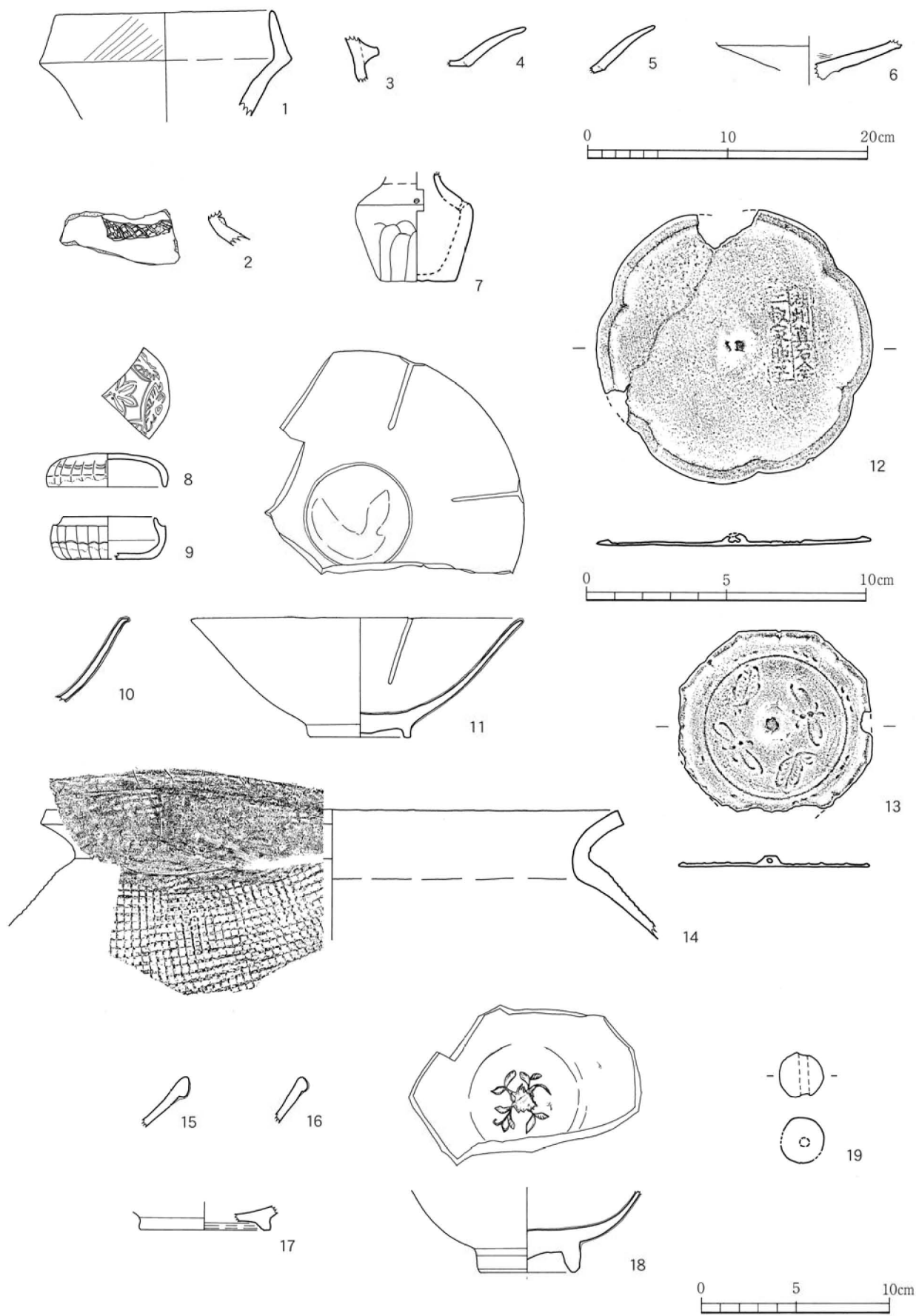
S C 3は、1.50×0.80mの長方形で、両長辺の外側に小ピットが見られる。床面は北側から階段状に深くなり、検出面からの深さは最深部で0.96mを測る。埋土は黒褐色の混土層で、遺物等は見られなかつ



第7図 A1区 遺構分布図 (S=1/250)



第8図 A1区検出遺構実測図 (SA1→1/80, SC1~12→1/40)



第9図 A区出土遺物実測図 (1~7→1/4, 12・13→1/2, 他は1/3)

た。土坑の形状等から、便所としての機能が推測されたため、最深部の埋土をサンプリングし分析を行ったが、寄生虫卵等は検出されず、機能の特定には至らなかった。

SC7は、A区東端に検出され、一部は調査区外となっている。不正な長方形で、検出面からの深さは20cmで、須恵器甕の口縁～頸部の破片が出土した。14は胴部に格子目タタキが施され、短く外反する口縁部を持つ。

SC12は、1.86×1.18mの隅丸長方形で、検出面からの深さは15cmである。獣骨の四肢骨片が検出されたが、遺存状態は非常に悪く、小片に砕けた状況であった。獣種の特定は行えなかったが、C区やD区で近世のウシやウマの埋葬土坑が数基検出されており、土坑の規模や形態の類似性から、SC12も同様のものと考えられる。

2. 遺構外出土の遺物（第9図、第2表）

A区の表土や包含層からは、弥生土器や土師器、青磁、白磁、土錘が出土している。

弥生土器や土師器は、小片が多く、全体に風化気味で器面調整等も不明瞭であることから、時期の判別が困難である。1の二重口縁壺は、やや内傾する拡張部に工具による斜め方向の刻みを施す。2は壺頸部で、工具による斜格子状の刻みを持つ貼付粘土帯が見られる。3は壺銅部で貼付突帯が見られる。4～6は高坏で、後円部は緩やかに外反する。1～6は弥生後期後半に位置付けられる。

7は小型壺で、張りの強い肩部に3カ所の穿孔を持つ。底部から胴上部にかけてケズリ痕が明瞭である。古代末頃の所産と思われる。

8～11は、重機による表土剥ぎの際にSC1の周辺から出土しており、本来土壙墓に伴っていたものと思われる。8・9は、景德鎮産の陰青文白磁合子である。10・11は端反りの白磁碗である。

15・16は玉縁口縁の白磁碗である。17は緑釉陶器で、碗底部である。高台内は露胎である。18は青磁碗で、見込みに印花がみられる。19は土錘で、外形はほぼ球形である。

第IV章 B区の調査

B区は、低地水田部を挟みA・C・D区の南西側に位置し、西から東に向けて派生する舌状の丘陵斜面及び裾部からなる。斜面は数段のテラス状に整地されており、畑地として利用されていた。便宜的に、表土剥ぎと調査着手の順に、テラス面毎にB1～B7区に区分した。

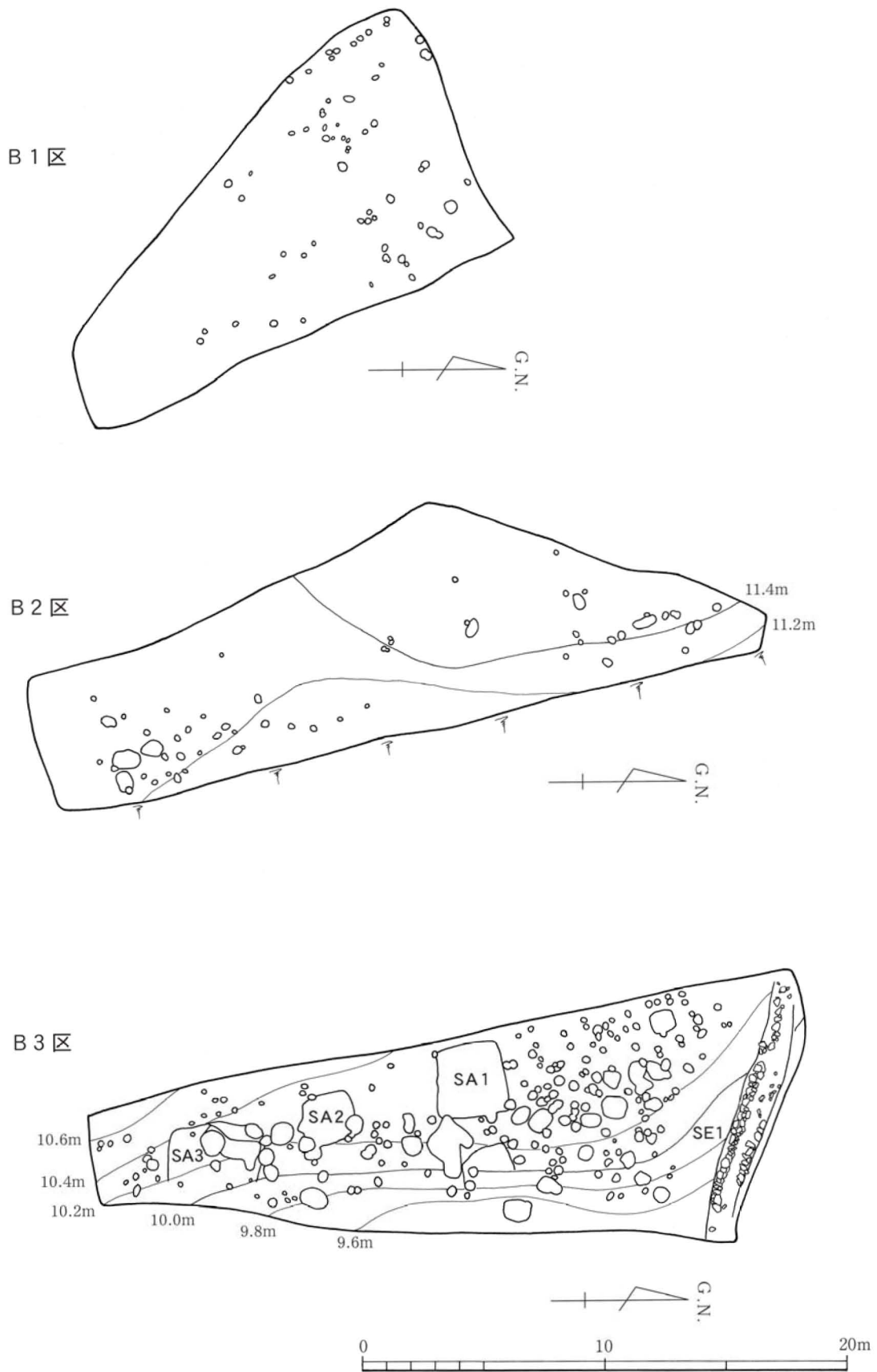
第1節 B区検出の遺構

1. B1区・B2区（第10図）

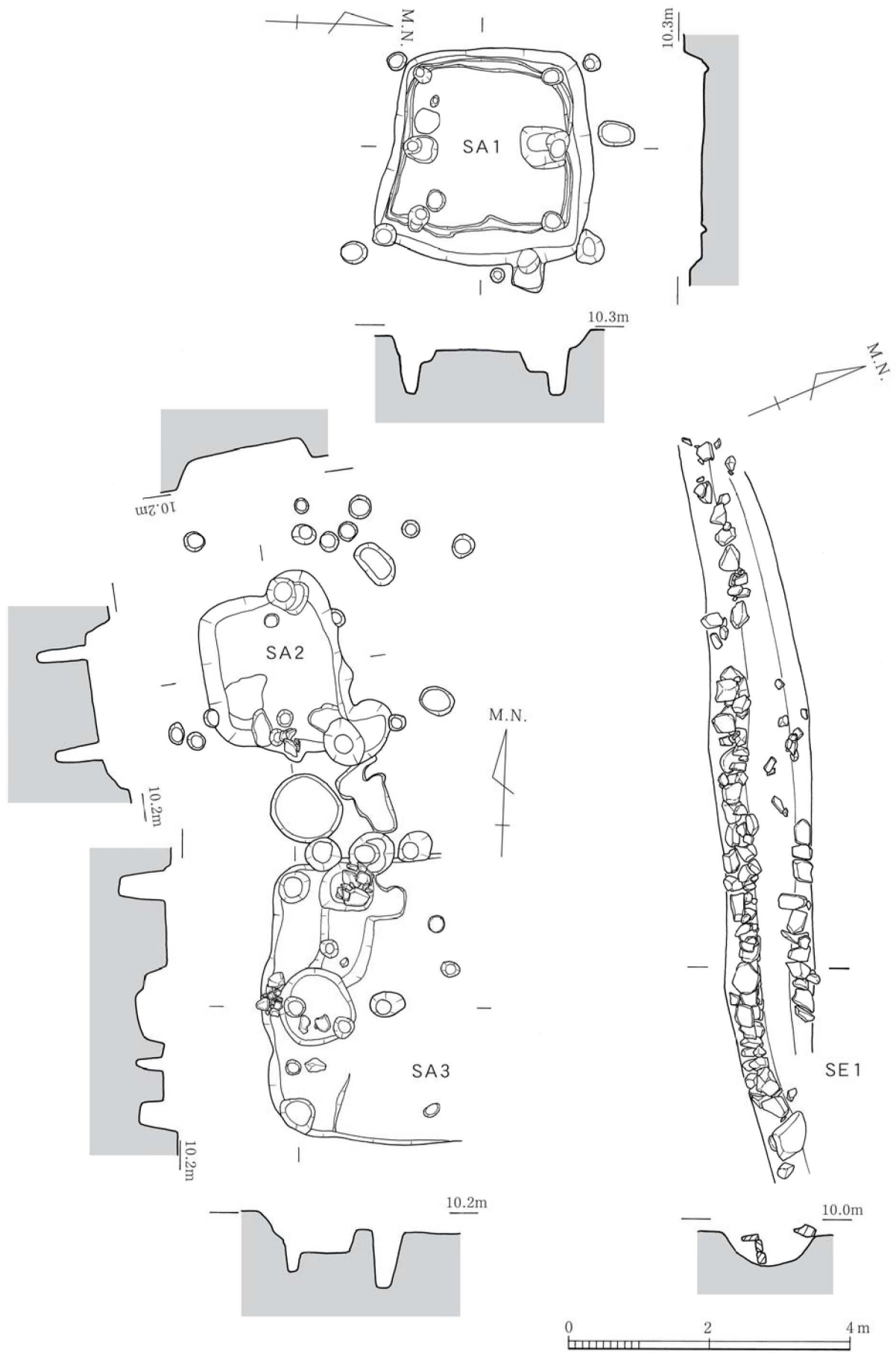
B1区とB2区では、数十基のピットを検出したが、掘立柱建物など明確な遺構として認定されるものは見られなかった。

2. B3区（第10図）

B3区では、竪穴状遺構、溝状遺構、土坑を検出した。他に、多数のピットを検出したが、現地で明確な掘立柱建物としての認定はできなかった。



第10図 B1区, B2区, B3区 遺構分布図 (1/250)



第11図 B3区 SA1~3, SE1 実測図 (1/80)

(1) 竪穴状遺構 (S A 1～3、第10図・第11図)

S A 1は、B 3区中央に検出した。3.10×2.90mの略方形プランで、検出面からの深さは30cmを測る。壁沿いの床面に浅い溝状掘り込みを持つ。上屋構造を支持する主たる柱穴は、南北の両壁際中央に位置する2基と考えられるが、各コーナー部の竪穴の内外に1基ずつ計8基のピットが見られ、これらも上屋構造の支持もしくは壁面構造を支持する機能を有していたと考えられる。遺構埋土は、黒褐色土や褐色土のランダムな混土層で、遺構の廃絶に伴い人為的に埋め戻されたものと考えられる。遺物は出土しておらず明確な時期や機能は不明であるが、県内各地の中世遺跡で見られる半地下式の竪穴状建物と同種のものと考えられる。

S A 2は、B 3区南半に検出した。2.30×2.00mの小型の略方形プランで、検出面からの深さは35cmを測る。南北の壁際中央に位置する2基のピットで上屋を支持したのと考えられる。遺物は出土していない。

S A 3は、B 3区南端に検出した。本来は一辺約4mの方形プランと推定されるが、調査区は東に向かって強く傾斜していることから、遺構の東半部は検出されなかった。後世の整地の影響と考えられる。西側壁の両端(コーナー部)に各1基の柱穴が見られるため、本来は4本柱の構造と推定されるが、検出された床面のほぼ中央(本来は遺構の西半)に径40cm、深さ80cmのしっかりとした柱穴が検出されており、これも上屋構造の支持に関係する可能性がある。その場合、更に東側にもう1基の柱穴が存在した可能性が考えられるが、調査面が傾斜していることなどにより検出されなかった。遺構埋土中から土師器片(甕、壺)が出土しているが、数基の土坑が重複し攪乱を受けた状態となっており、S A 3の時期を示すものかは判断できない。

(2) 溝状遺構 (S E 1、第10図・第11図)

S E 1は、B 3区北端に検出した。幅1.40mで、長さ10.50mを測る。最深部で検出面から40cmで、両壁に沿って20～40cm大の石が並べられている。溝底のレベルは、B 3区のテラス面と同じく西から東に向け傾斜している。遺物は出土していない。

3. B 4区・B 5区 (第12図)

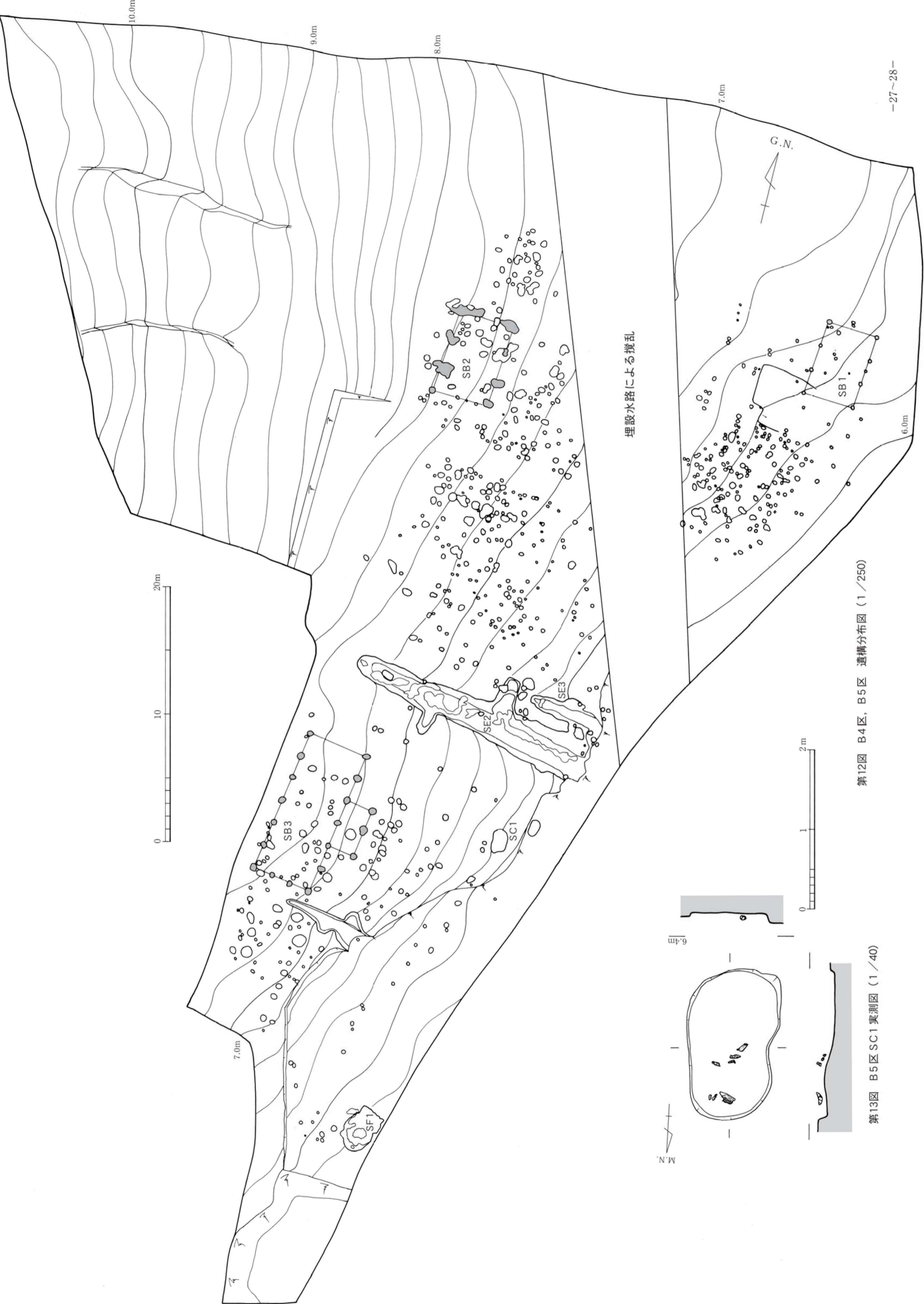
B 4区・B 5区は丘陵裾部に位置し、畑地としては区分されていたが、本来の地形的には一体であり、検出された遺構の分布状況にも大きな差異は見られなかった。掘立柱建物、土坑、溝状遺構、井戸等が検出された。

(1) 掘立柱建物 (S B 1～3、第12図)

S B 1は、B 4区北東隅に検出された。1×3間で、棟方向は南北(N-6°-E)である。梁行3.95m、桁行5.90mで、柱穴深は平均で30cmである。

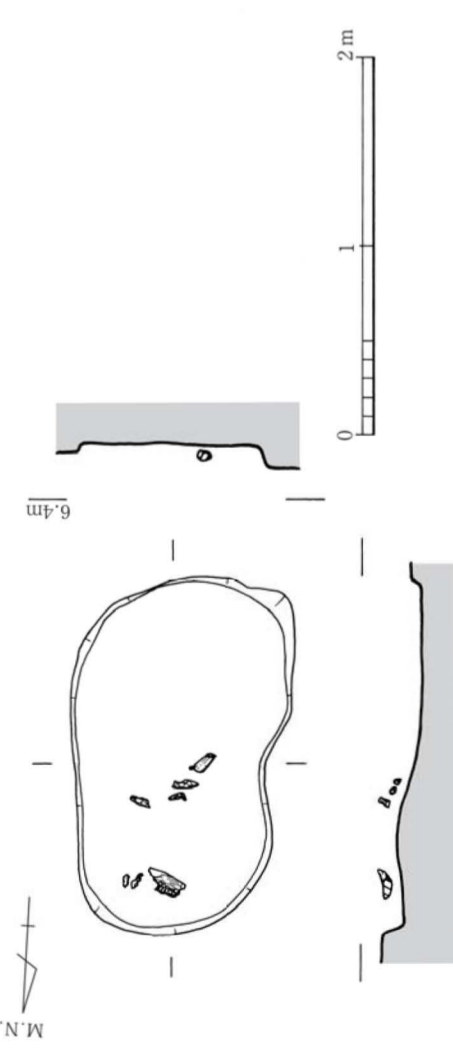
S B 2は、B 4区中央に検出された。2×3間で、棟方向は南北(N-4°-E)である。梁行4.40m、桁行6.75mで、柱穴深は平均で35cmである。

S B 3は、B 5区西寄りに検出された。3×6間で、棟方向は南北(N-9°-E)である。梁行4.80m、桁行11.60mで、東面中央に幅2間、長さ1間の貼出しが見られる。建物への入口部と考えられる。



埋設水路による攪乱

第12図 B4区, B5区 遺構分布図 (1/250)



第13図 B5区 SC1 実測図 (1/40)

柱穴深は平均で30cmである。

現地で認定できた掘立柱建物3棟以外に、多数のピットを検出している。その分布状況には、いくつかのまとまりが見られる。現地での掘立柱建物の認定作業は、直線的な柱配列や柱間間隔、埋土の土質差などを考慮して行ったが、既述の3棟以外に建物の認定はできなかった。

(2) 土坑 (SC1、第12図・第13図)

SC1は、1.90×1.16mの楕円形で、検出面からの深さは15cmである。獣骨片が出土した。下顎と前肢骨の一部であるが、風化が著しく獣種の同定はできなかった。土坑の規模から、ウシあるいはウマ1頭が埋葬されたものと考えられる。

(3) 溝状遺構 (SE2・3、第12図・第14図)

B4区とB5区の境界部分に、長短2条の溝状遺構が並んで検出された。

SE2は、長さ19.70m、幅2.00～3.30mで、床面レベルは西から東に傾斜している。遺構は、東西に直線的に延びているが、西端から約7mの位置で南側へ、約12mの位置で北側へ、ほぼ直角に分岐し、登り傾斜で2mほど延びている。溝内には、多数の石が見られた。拳大～掌大のものはランダムに流入したような状況であったが、溝の北壁に沿うように、五輪塔の地輪や水輪の転用石が一行に並べられていた。

出土遺物としては、須恵器、青磁、白磁、陶器がある。溝の底面からやや浮いた位置から出土している。いずれも破片で、周辺から流れ込んだものと考えられる。

SE3は、SE2の北側に並行して検出された。長さ6.00m、幅1.30mで、西から東に向け傾斜している。20～30cm大のやや大振りの石が、溝内の一部にまとまって見られた。

これらの溝状遺構は、埋土の下部に粒径の比較的揃った粗砂の堆積が見られたことから、排水用の水路として流水があったことが考えられたが、床面が堅く締まっていたことから、通路としての利用も想定された。

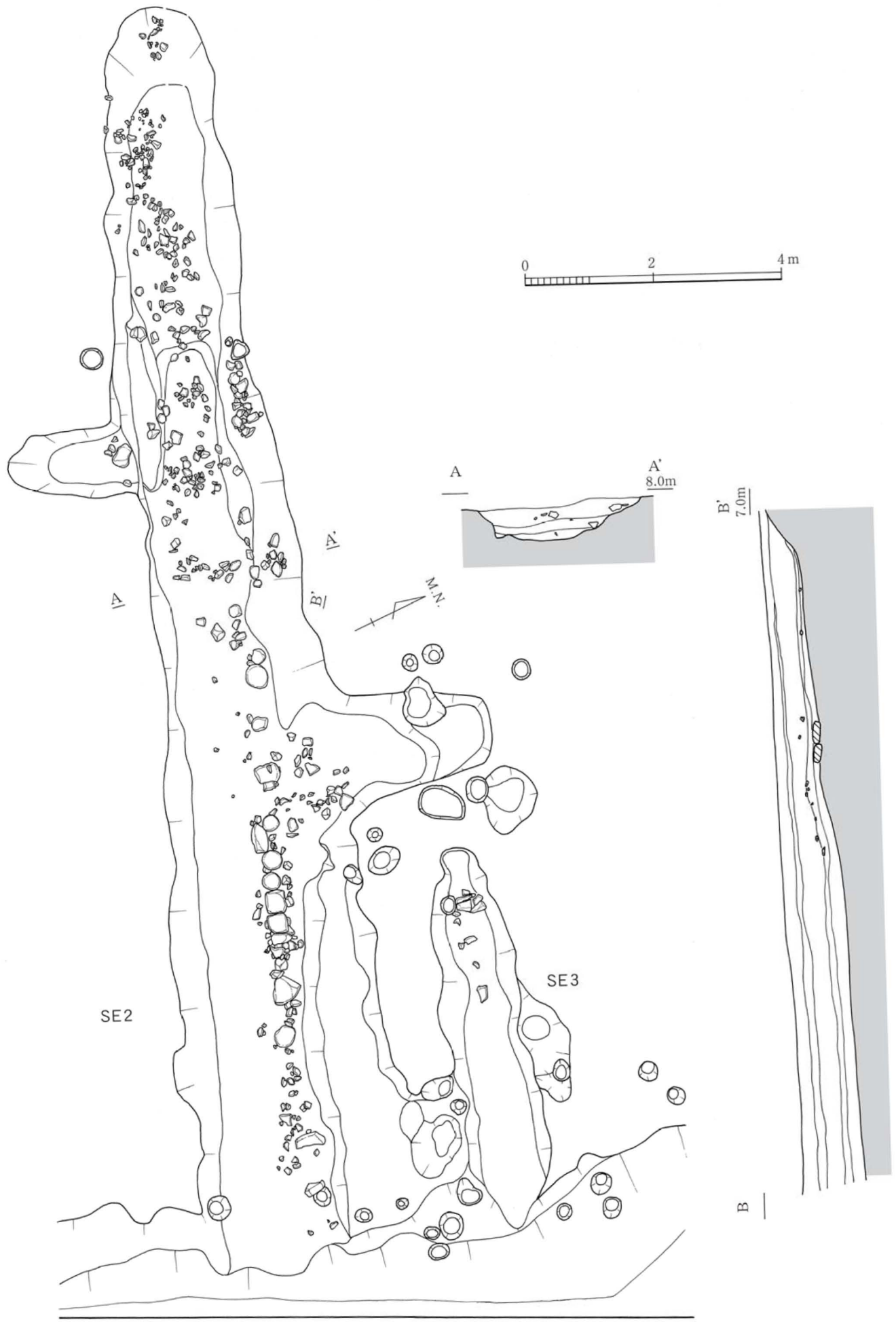
このような溝状の通路は、都城市上大五郎遺跡の館への入口部や、都城市前畑遺跡の微高地上の集落への通路跡などに近似している。両遺跡の通路遺構には、溝状の掘り込みを挟むように対になったピットが見られる部分があり、門のような結界を示す施設が想定されている。

SE2、SE3においても、対になったピットが5カ所で確認され、同様の機能を想定することも可能である。

(4) 井戸状遺構 (SF1、第12図・第15図)

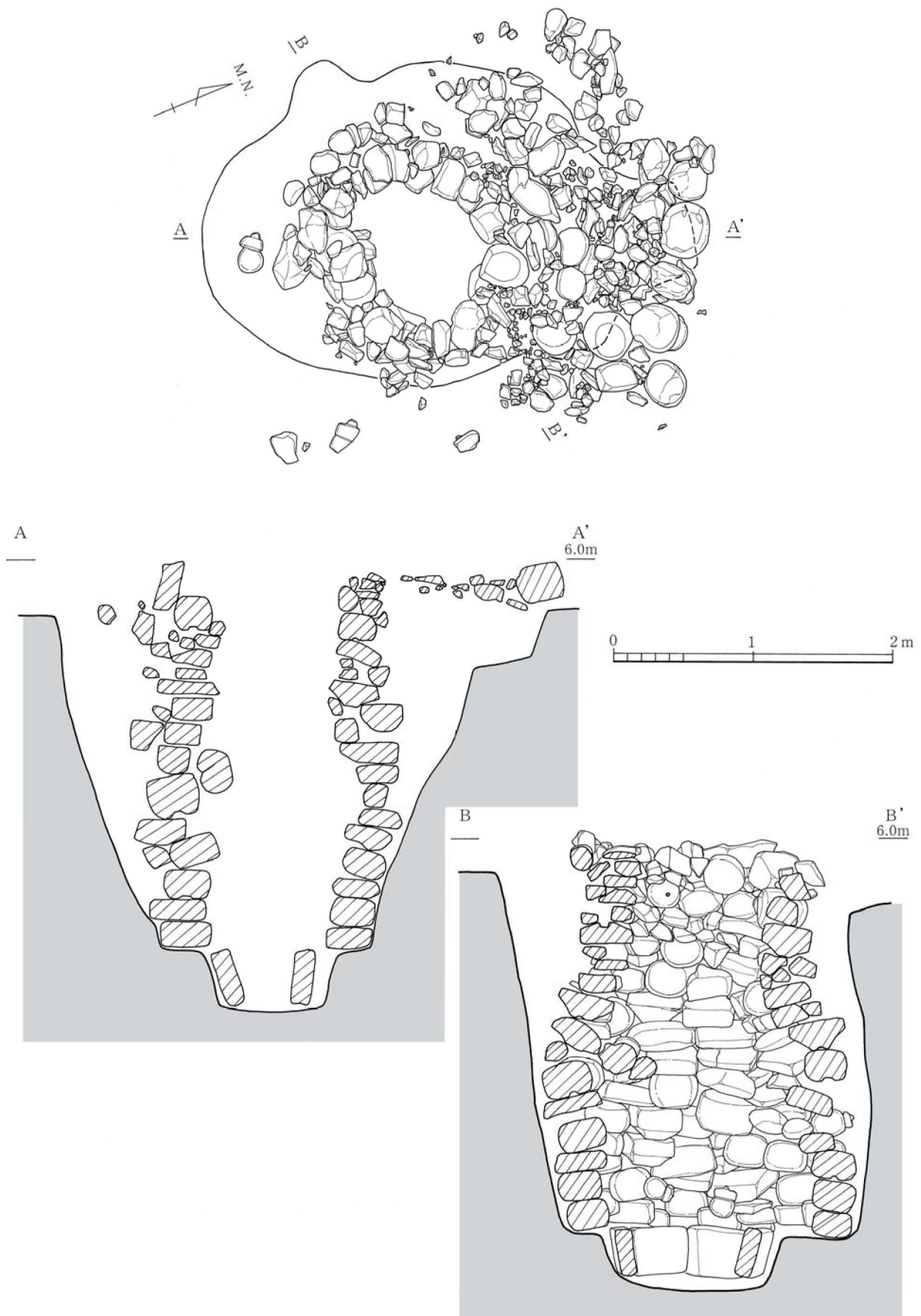
B5区南端に検出した。平面的には3.50×2.30mの楕円形の掘り方を持ち、その内側に内径1mの円形に石を組み上げている。深さは3.20mを測る。また、円形石組に接して1.80×1.10mの長方形に石を敷き並べている。

検出時は、円形石組の内部も土が充満した状態であったが、調査において掘削深が2.5mを超えるとかなりの水が浸み出してきた。調査では、安全性を考慮し、石組みの平面図を作成した後、石組み内部の掘削を1m程度行い、2方向での断面図及び見透し図を作成しながら石を取り除き、更に掘削を進める

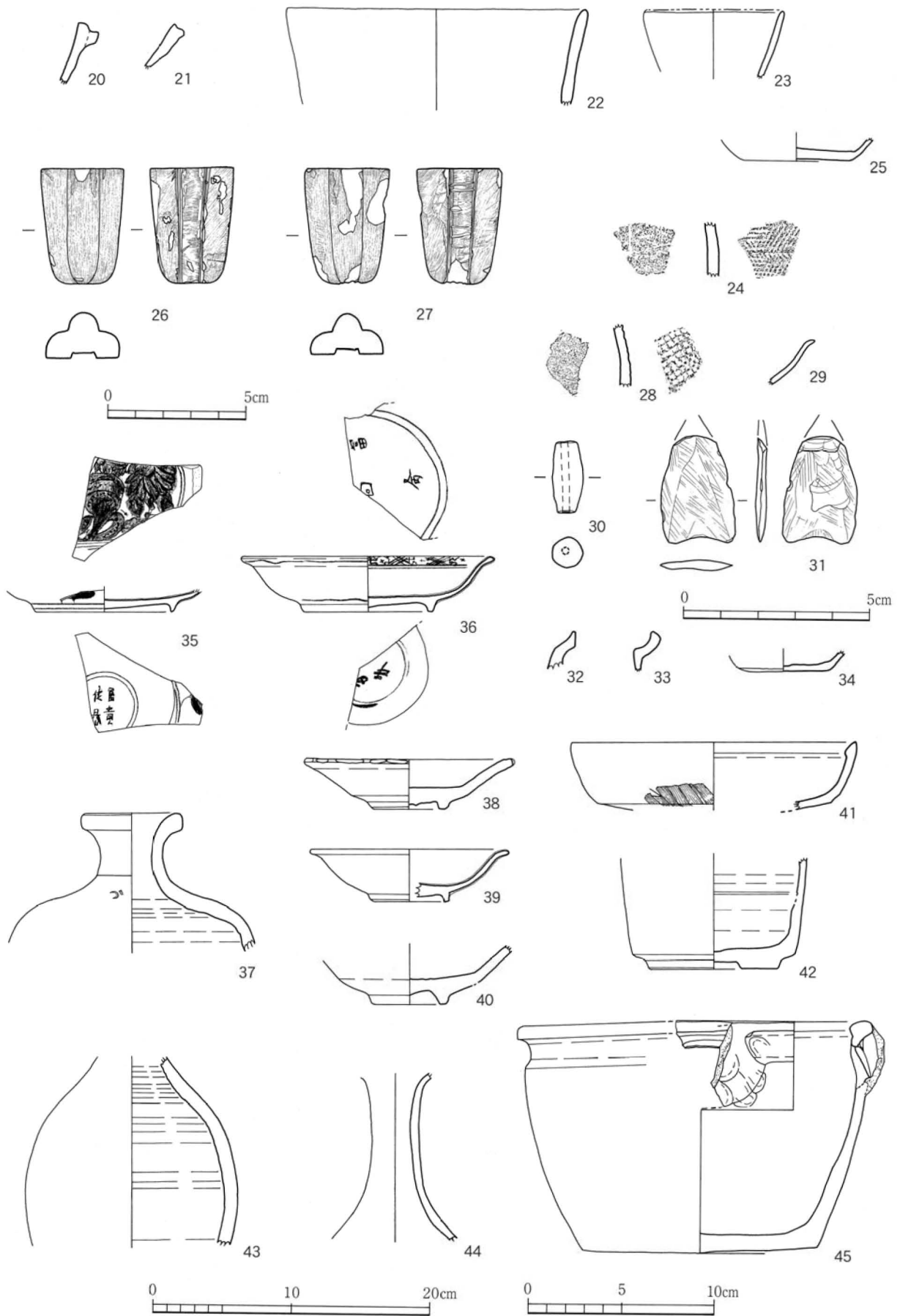


B/

第14図 B5区 SE2, SE3 実測図 (1/80)

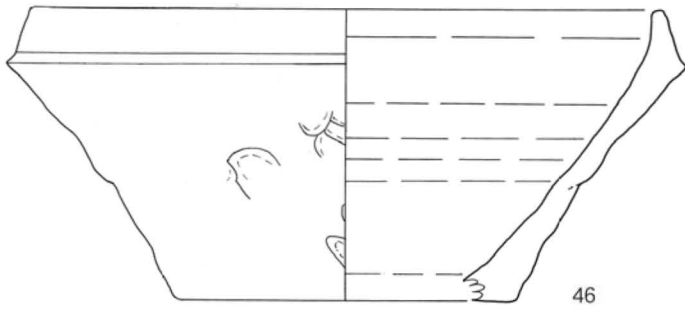


第15図 B5区 石組井戸SF1 実測図 (1/40)

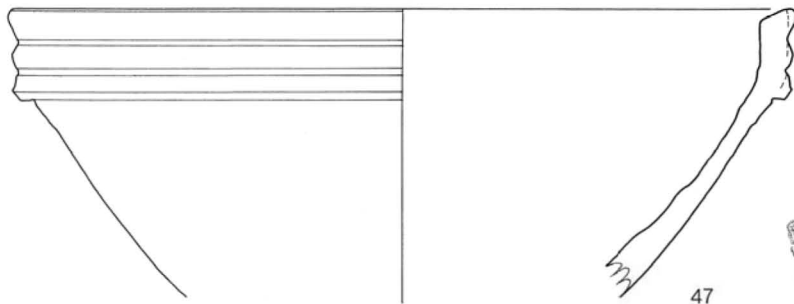


第16図 B区 (B2~B5区) 出土遺物実測図

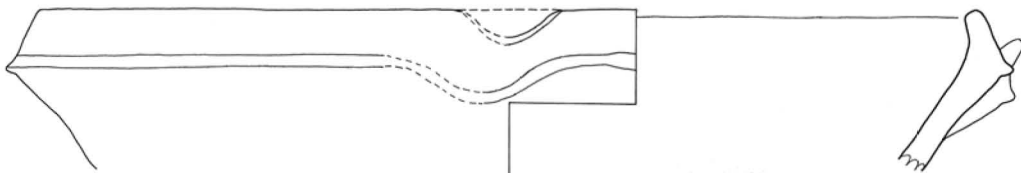
(20~25・28・32~34・41→1/4, 26・27→1/2, 31→2/3, 他は1/3)



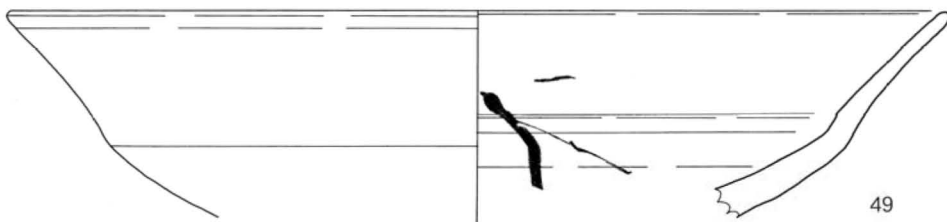
46



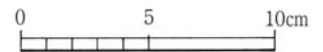
47



48



49



第17図 B区 (B5区) 出土遺物実測図 (全て1/3)

という手順で作業を進めた。

この石組み井戸の最大の特徴は、使用している石材である。8割以上の石は、五輪塔の転用であり、地輪・水輪・火輪・空風輪の全ての石材が大きな再整形加工することなくそのままに使用されている。

石組の構築法を見ると、段掘り状に中央を掘り窪めた堅穴の中央に、板状石（五輪塔の地輪を転用）6枚を縦位に立て並べて略円形を作り、その後、一回り大きな円を描くように地輪、水輪、火輪を平積み状態で積み上げ、その隙間には空風輪や割れた石の破片等を詰めてバランスを保っている。

4. B6区（第18図）

B6区は、調査範囲の最南端に位置する。丘陵斜面を等高線に沿って整形し、細長いテラスを造り出している。堅穴状遺構、土坑、五輪塔の基壇部を検出した。また、北側や東側の斜面部に廃棄された多くの五輪塔や板碑が出土した。

（1）堅穴状遺構（SA4、第18図）

B6区北端で検出した。本来、一辺が3m強の方形プランであったと考えられるが、その大部分が既に削平され、1/3程度を確認したに過ぎない。堅穴構造も削平のためほとんど残存していないが、壁際に巡らされた溝状の掘り込みを確認したことによって遺構と認定した。3基のピットを検出したが、本来は4基あるいは6基が存在したのと考えられる。

（2）土坑（SC3・4、第18図）

2基の土坑が切り合った状態で検出された。

SC2は1.66×0.80mの略長方形で、検出面からの深さは40cmである。床から浮いた状態で、10～20cm大の角礫と二枚貝の貝殻が出土した。

SC3は1.40×0.90mの略長方形で、SC2により一部が切られている。床から浮いた状態で、10～20cm大の角礫が出土した。

（3）五輪塔基壇（SD1、第18図）

B6区の北東端に検出した。2基の地輪を並べて据え、その周囲に10～25cm大の角礫を1.90×1.10mの長方形に敷き詰めている。2基の地輪は、それぞれ50cm四方、40cm四方と大きさに差が見られる。

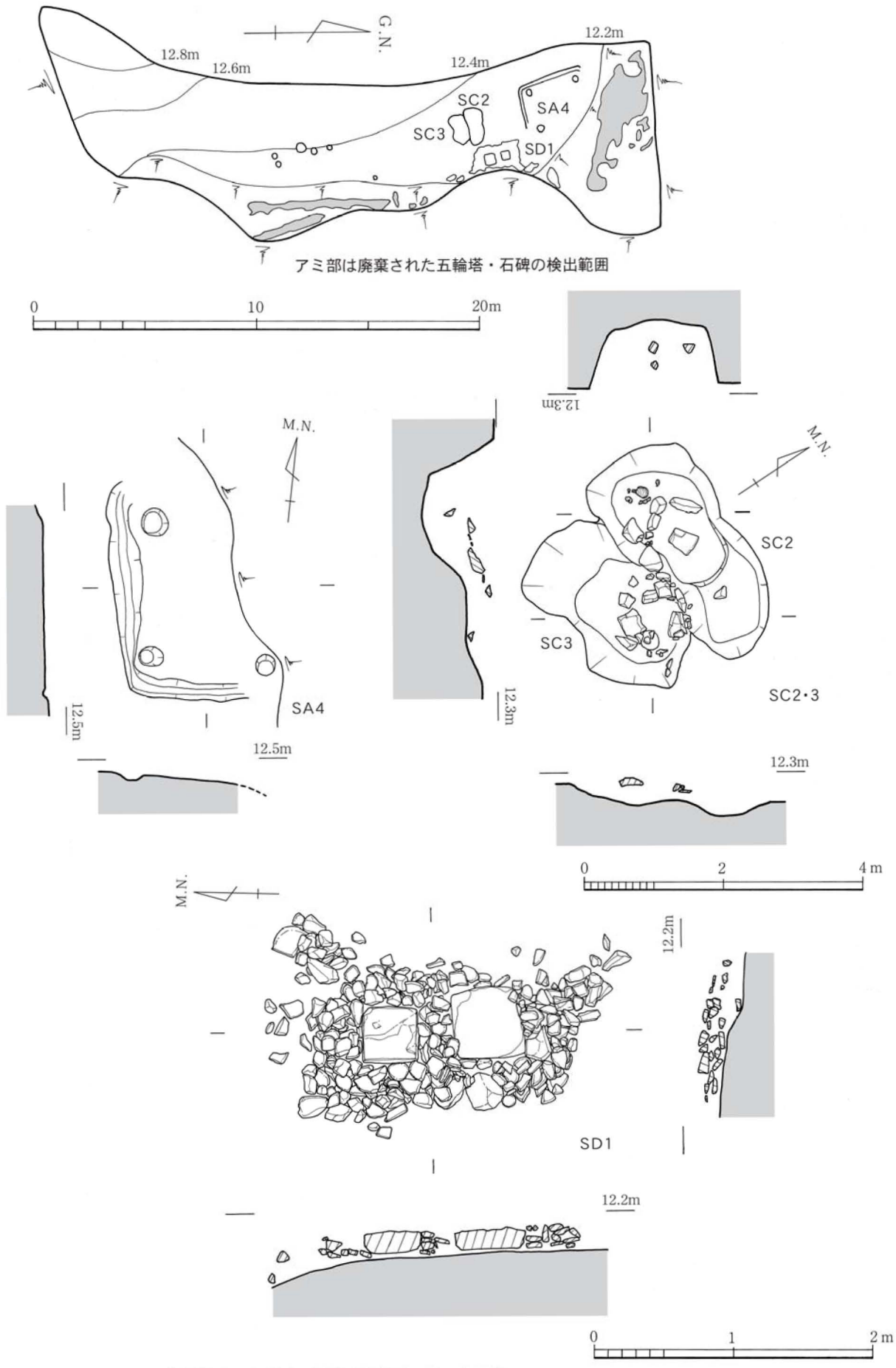
5. B7区（第19図）

B7区は、B6区の一段下方に位置する。2基で1対の近世墓と若干のピットを検出した。

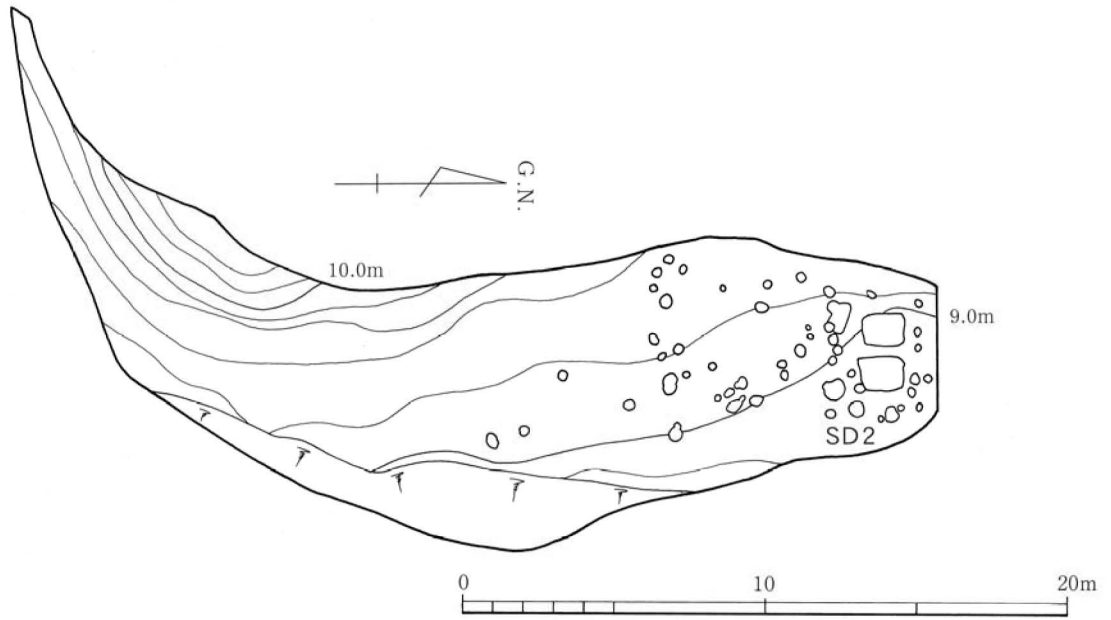
（1）近世墓（SD2、第19図・第21図・第22図）

B7区北端部に、2基並んだ状態の土坑を検出した。そのうちの1基は、1.40×1.10mの長方形で、深さ60cmである。床面から浮いた状態で、自然石を利用した墓石（第22図64）が立位で出土した。墓石表面には「良元」の文字が刻まれていた。

もう1基の土坑は、1.40×1.15mの長方形で、深さ75cmである。床面から古銭1枚が出土した。



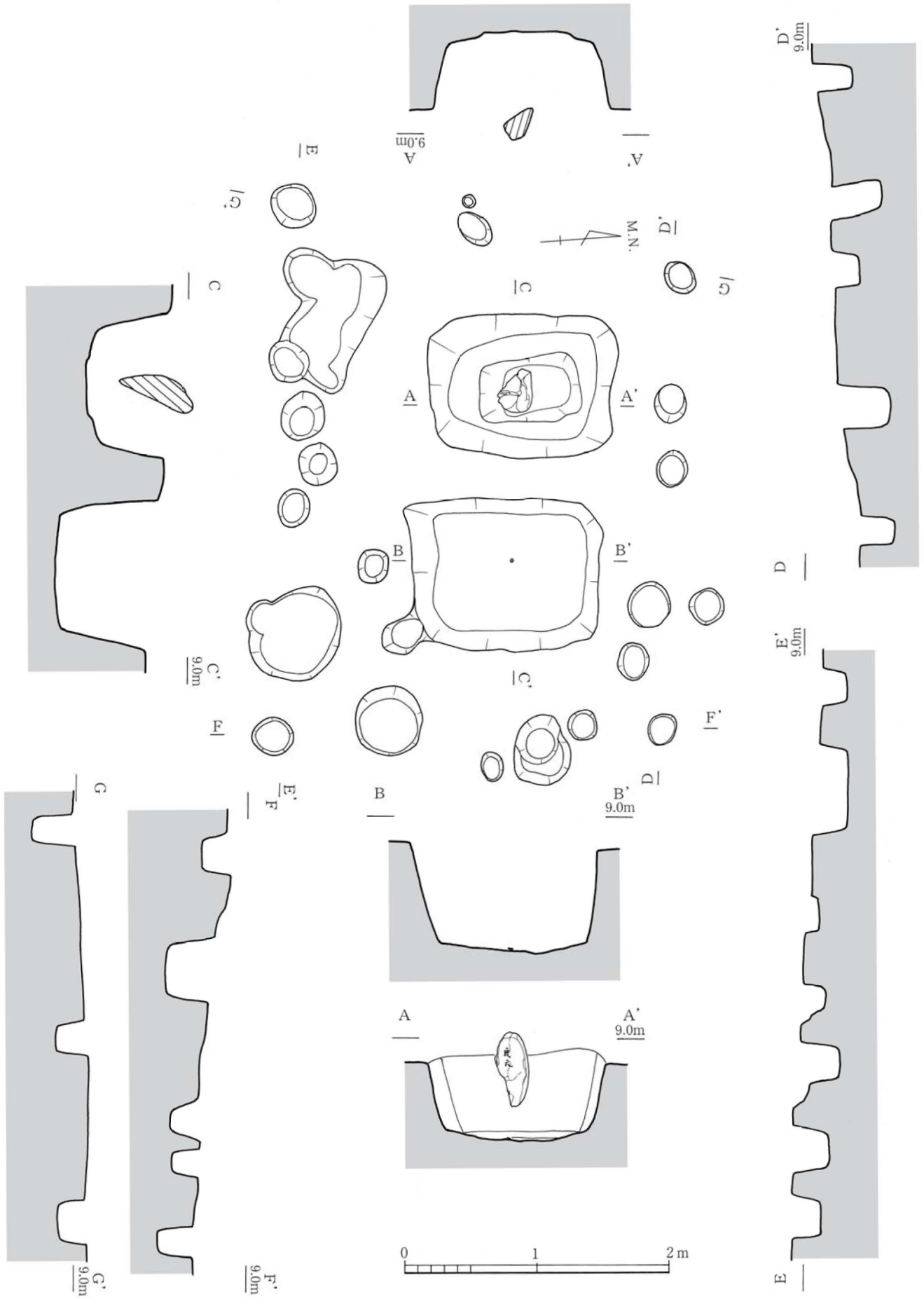
第18図 B6区 遺構分布図 (1/250),
 検出遺構実測図 (SA4, SC2→1/80, SD1→1/40)



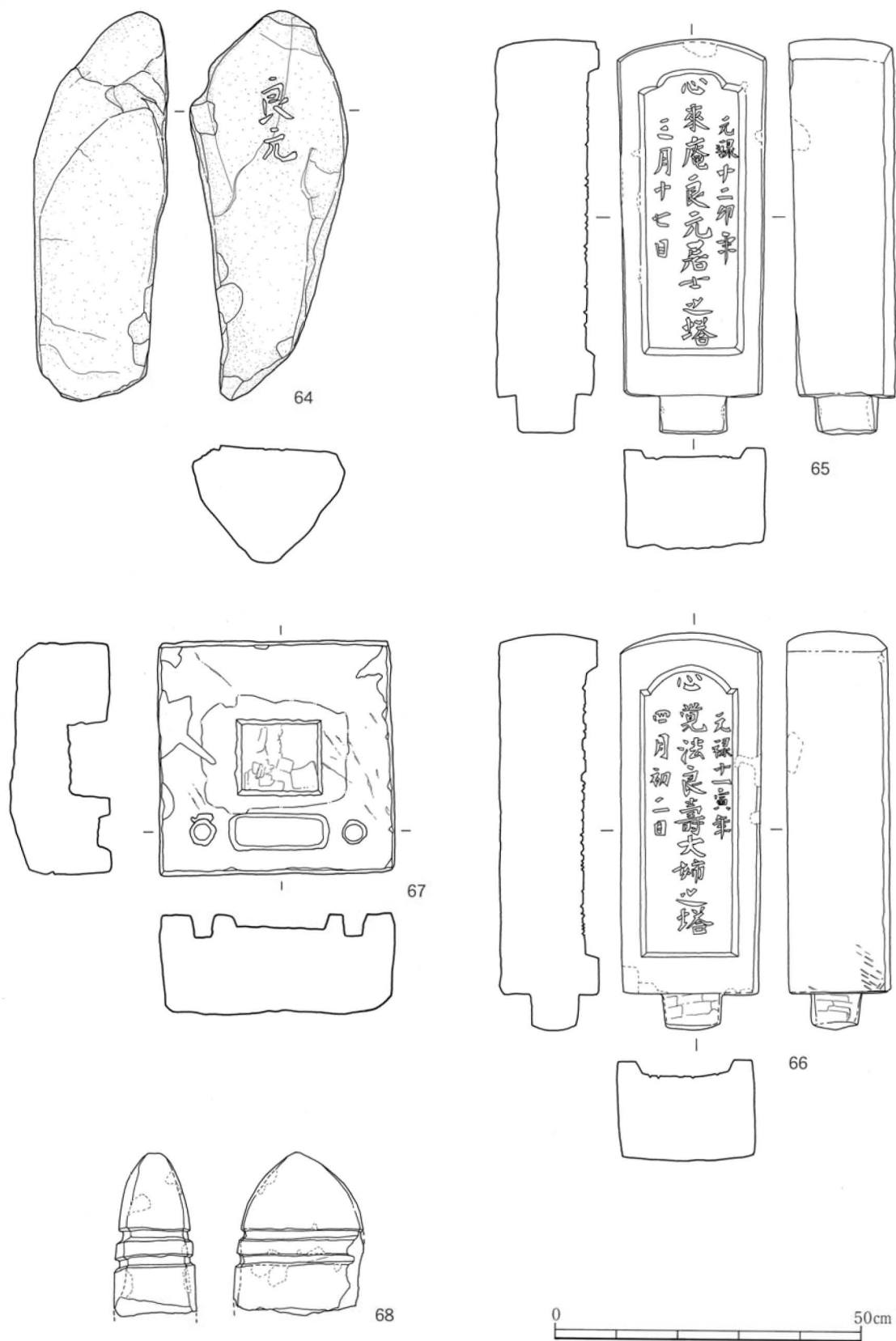
第19図 B7区 遺構分布図 (1/250)



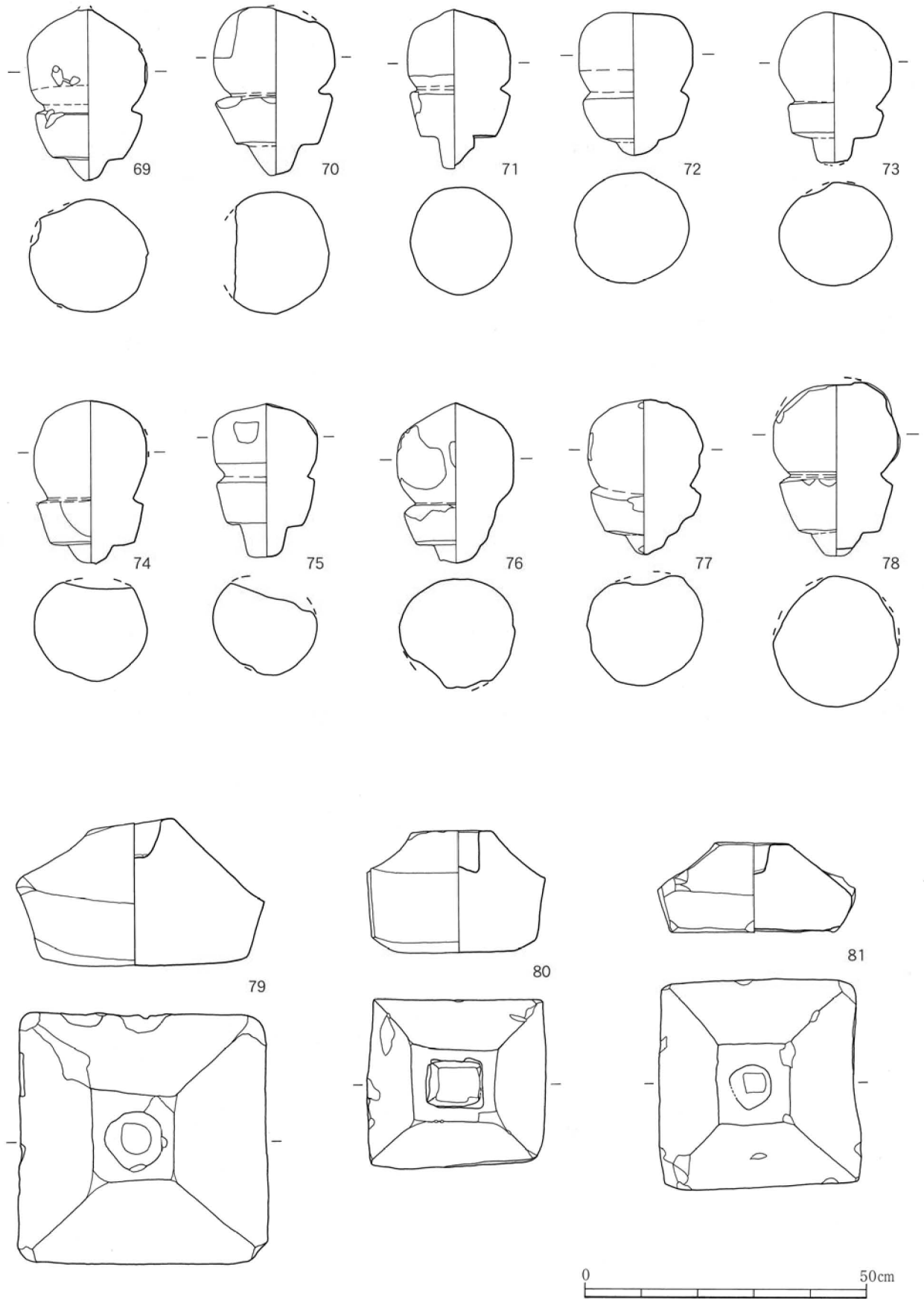
第20図 B区 (B6区・B7区) 出土遺物実測図 (全て1/3)



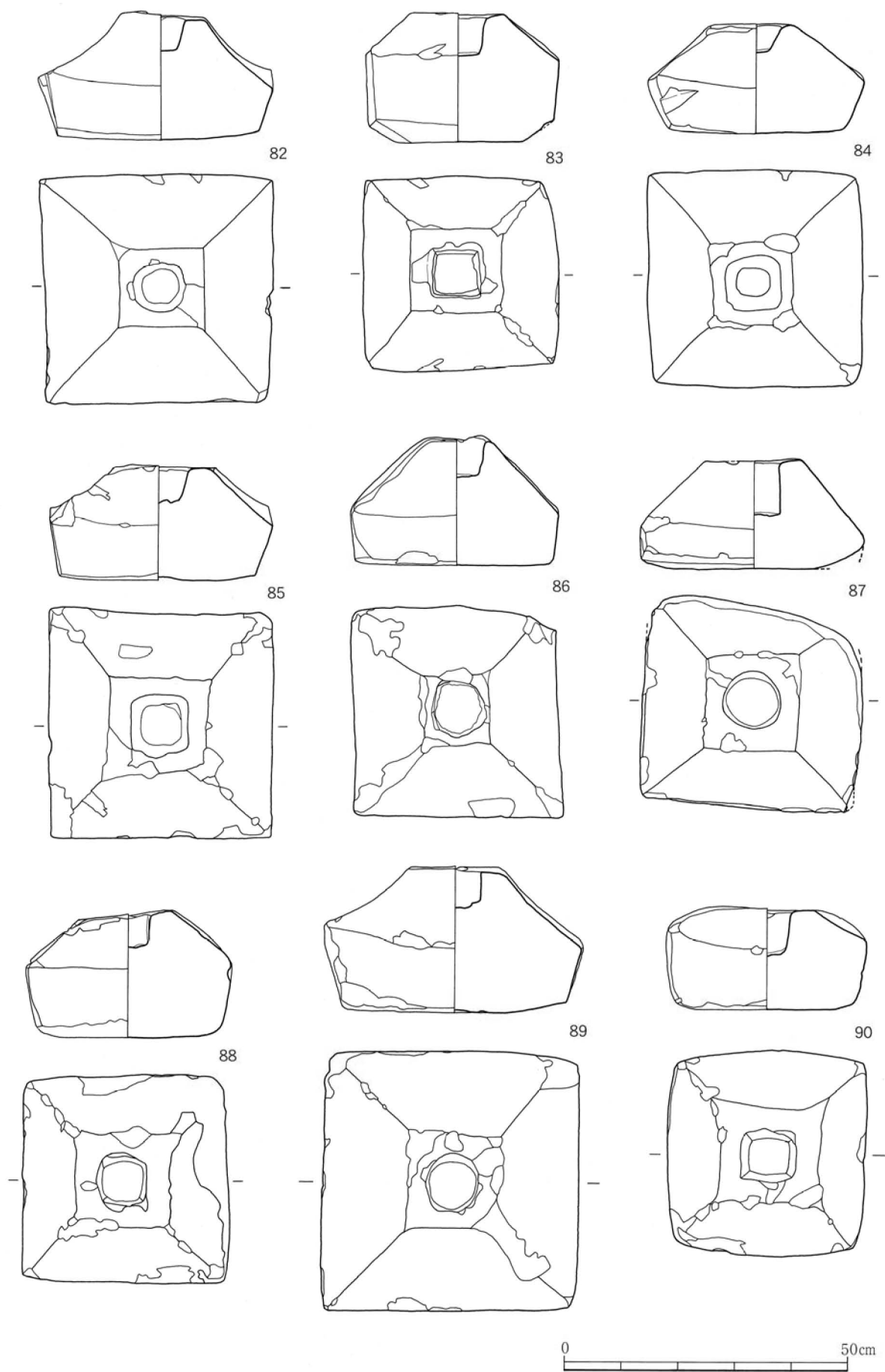
第21図 B7区 SD2実測図 (1/40)



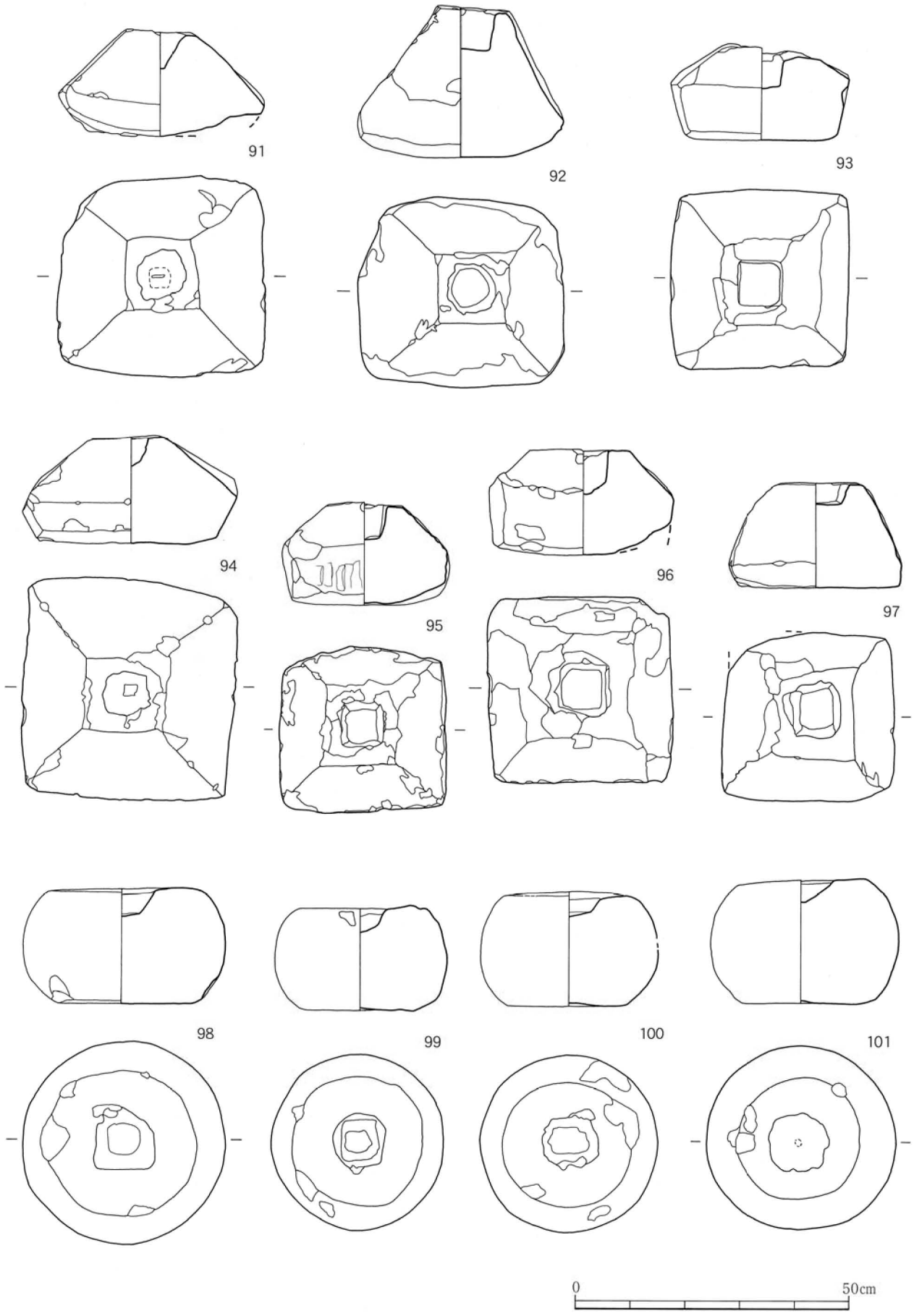
第22图 B区 出土墓石·板碑实测图 (1/10)



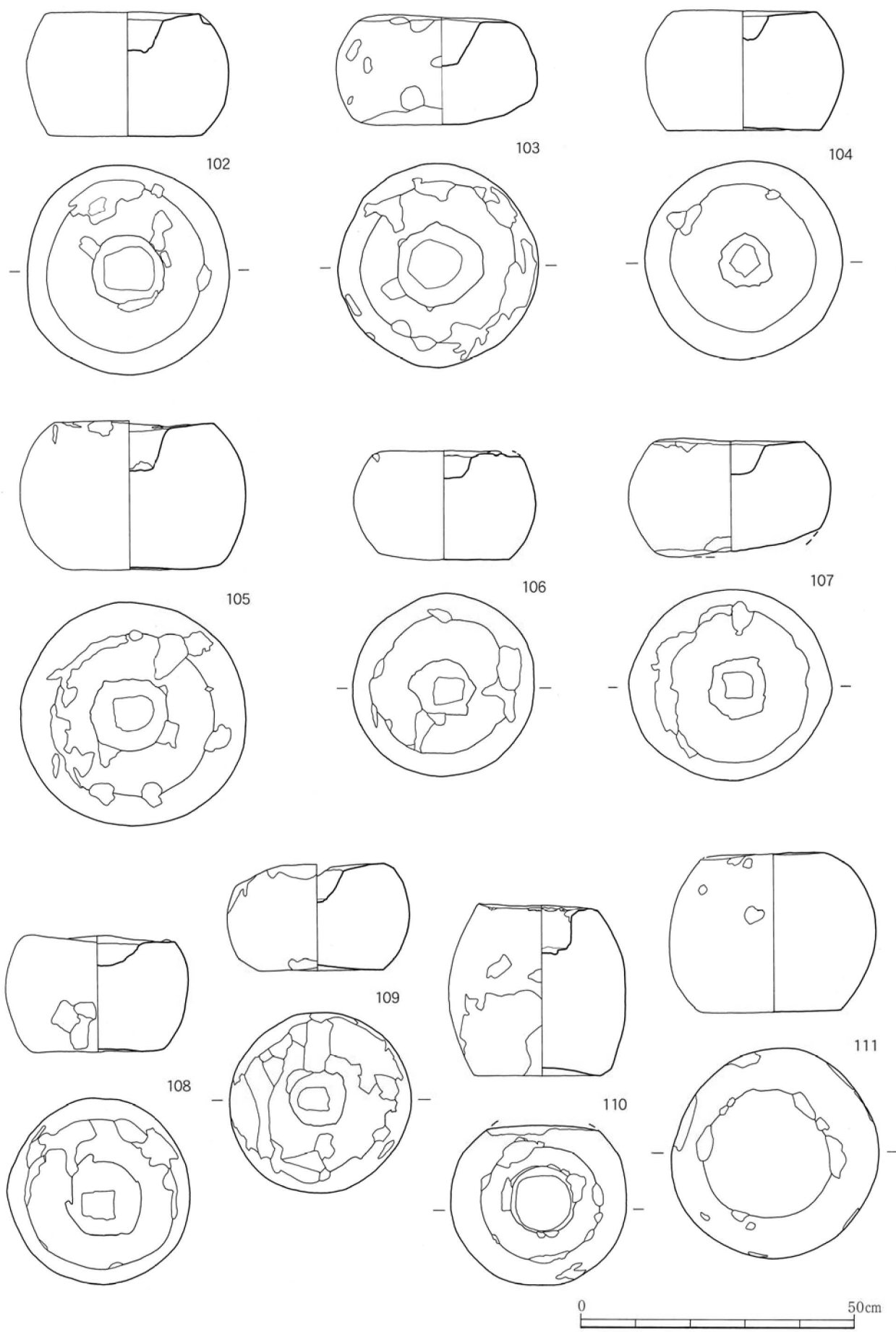
第23图 B区 出土五輪塔実測図 (空風輪・火輪 1/10)



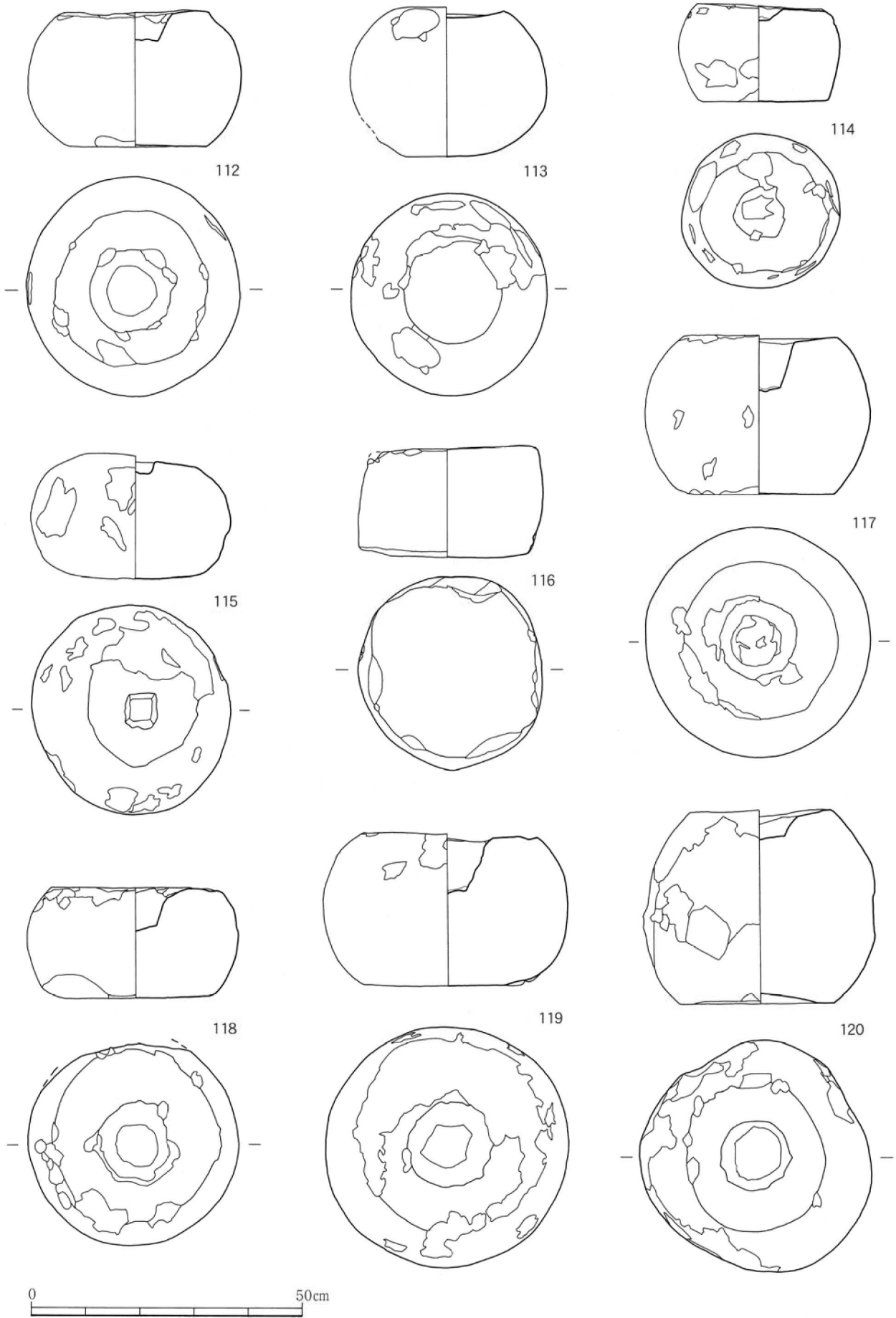
第24図 B区 出土五輪塔実測図（火輪 1/10）



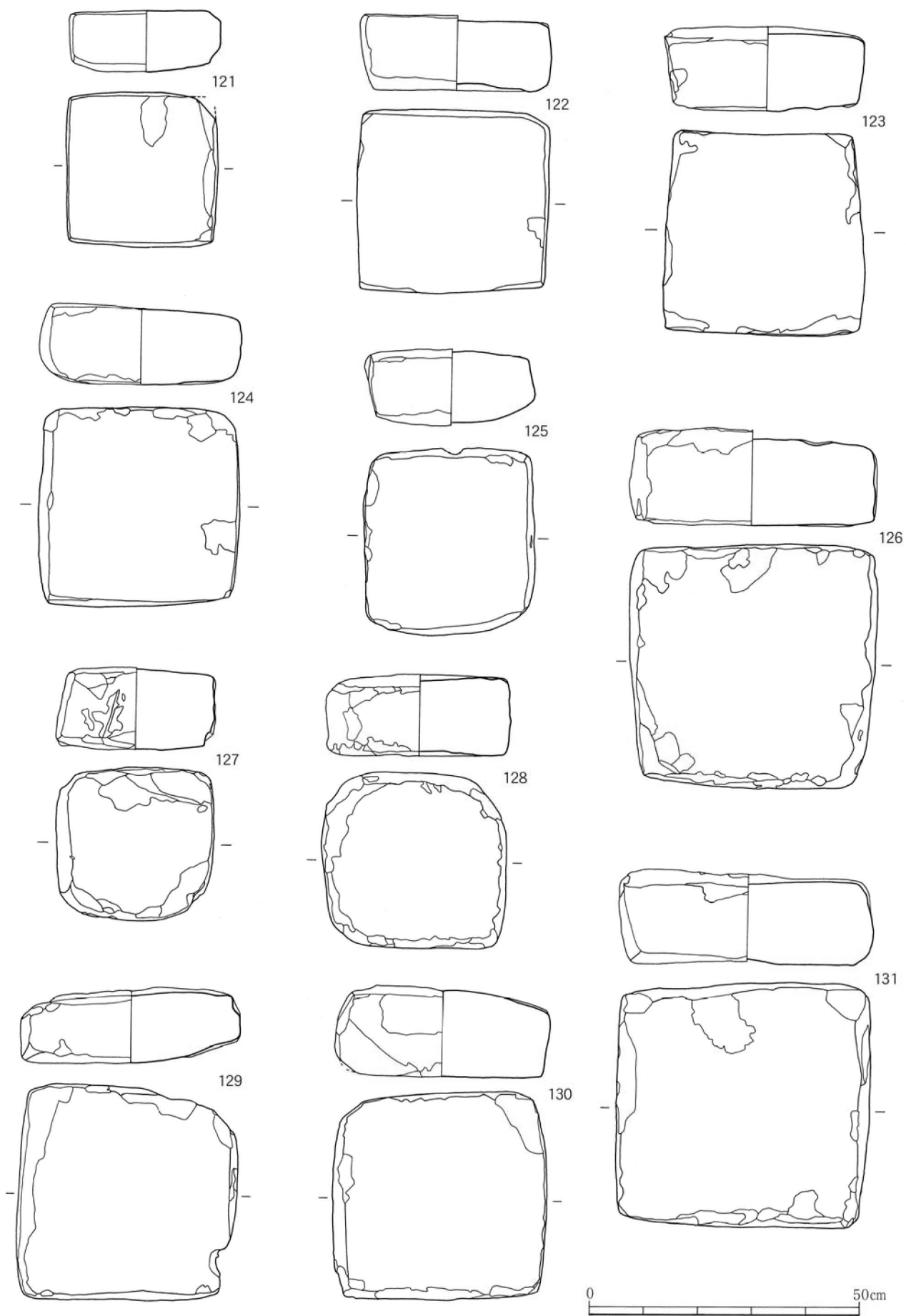
第25图 B区 出土五輪塔実測図 (火輪・水輪 1/10)



第26图 B区 出土五輪塔実測図（水輪 1/10）



第27图 B区 出土五輪塔実測図 (水輪 1/10)



第28図 B区 出土五輪塔実測図 (地輪 1/10)

2基の土坑を取り囲むように、長方形に並ぶ状態で20基のピットが検出された。これらは2基の墓を覆っていた上屋を支持する柱穴と考えられる。

これら2基の土坑から1、2m北側の位置に、切石造りの墓石2基（第22図65～67）が倒れた状態で出土していた。これらは、表土を除去する以前から、約半分が土に埋まった状態で地表面に露出していたものである。これらの墓石に刻まれた銘は、「元禄十二卯年 心来庵良元居子之塔 三月十七日」「元禄十一寅年 心覚法良壽大姉之塔 四月初二日」である。

土坑内から出土した自然石の墓石に刻まれた「良元」の文字と一致しており、この墓石は、土坑上に設置されていたものと考えられる。夫婦の墓であろうか。

第2節 B区出土の遺物（第16図・第17図・第20図・第23図～第28図）

20・21はB2区から出土した。土師質の鉢で、20は口縁部下に貼付突帯を持つ。

22～27はB3区から出土した。22は甕、23は小型壺の口縁である。24は壺胴部で外器面に平行タタキが見られる。25はSC2出土の白磁皿である。26・27は滑石製品で、2点で一对となる。平滑な面を張り合わせることによって、ほぞ穴状となる中央部に何らかの扁平な棒状のものを固定したと思われるが、用途は不明である。

28～31はB4区から出土した。28は土師器壺で、外面にタタキを持つ。29は端反りの白磁碗である。31は緑泥片岩製の磨製石鏃である。

32～36はB5区から出土した。32は土師器壺（複合口縁）、33は土師質土器の鉢である。34は土師質土器の坏で、ヘラ切り底である。35・36は景德鎮産の染付皿である。

35の高台内側と36の見込み部に「富貴長命」の文字が見られる。

37～49は、B5区SE2から出土した。いずれの遺物も溝に流れ込んだ状況で、床面からやや浮いた状況で出土している。37は須恵器壺で、肩部にヘラ状と円管状の工具による刻印が見られる。38は陶器の菊花皿で、見込み及び高台内を除いた体部～口縁にかけて乳白色の釉を施す。39は端反りの白磁皿で、高台の一部に胎土目積みの痕跡が残る。40は青磁碗で、見込みに胎土目積みの痕跡が明瞭に残る。41は土師質の鉢で、外器面にススの付着が顕著なことから直火にかけて使用したものと推定される。42は蛇の目高台の白磁碗である。43・44は全体に黒褐色の鉄釉を施した陶器瓶である。45は無釉の陶器甕で、口縁部下の一ヶ所に注口が見られる。46～48は播鉢である。口縁帯の形状は異なるものの、いずれも無釉でにぶい赤褐色を呈す。内面には、12条（46・48）と、7条（47）の櫛目が、間隔をもって施されている。49は大皿である。内面に鉄釉による線画が施される。

50～58はB6区から出土した。土師質土器（坏）、陶器（碗、甕、灯明具）、白磁（皿）、輸入青磁（碗）、染付（脚付小碗）が見られた。

59～63はB7区から出土した。59・60は土師質土器の小皿で、糸切り底である。59は口縁部にタール状の黒い附着物が見られ、灯明皿と思われる。61は輸入青磁碗、62・63は染付の碗と瓶である。

第23図～第28図は、B区で出土した五輪塔群である。その多くはB5区検出の石組井戸状遺構（SF1）に転用されたものであるが、B6区やB7区の斜面にも廃棄された五輪塔や板碑が見られ、本来は丘陵斜面を削平した小テラス（B6区、B7区）に建立されていたものと考えられる。本来のセット関係を復元できるものはなく、部位毎に分けて実測図と計測表を作成した。

遺物番号	種別	器種部位	出土区	出土地点	法量 (cm)			手法・調整・文様ほか		色調		胎土の特徴	備考
					口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面		
1	弥生	壺 二重口縁	A		(15.4)			工具による斜方向の刻み ナデ 風化気味	ナデ 風化気味	明黄褐	明黄褐	5mm以下の灰白・褐色・褐灰の粒 3mm以下の黒色の粒 2mm以下の半透明・柱状黒色光沢粒	
2	弥生	壺 頸部	A					貼付突帯に斜方向の刻み目 ナデ	ナデ 風化気味	にぶい黄橙	灰黄	5mm以下の灰色の粒 3mm以下の褐色・黒色・黄褐色の粒	
3	弥生	壺	A					貼付突帯 横ナデ	風化気味	橙	浅黄橙	1.5mm以下の灰白色の粒	
4	弥生	高坏 坏部(口縁)	A					斜方向ハケ目の後ナデ 横方向工具痕	横方向ハケ目の後ナデ	橙	橙	2.5mm以下の灰褐・褐色の粒 1mm以下の灰白・黒色光沢・半透明光沢粒	
5	弥生	高坏 坏部(口縁)	A					縦・斜方向ハケ目後ナデ ナデ 風化気味	横方向ハケ目の後ナデ	橙	橙	2mm以下の灰褐の粒 1mm以下の黒色・半透明光沢粒	
6	弥生	高坏 坏底部	A					不定方向ハケ目の後ナデ 指頭痕	不定方向ハケ目の後ナデ ミガキ	橙	橙	3mm以下の灰白の粒 2mm以下の灰褐色の粒 1mm以下の半透明光沢粒	
7	弥生	小型壺 頸部～底部	A					穿孔(3ヶ所) 縦方向 削り ナデ	横ナデ ナデ	橙	橙	3mm以下の灰白の粒 2mm以下の灰褐色の粒 1mm以下の半透明光沢粒 微細な無色透明光沢粒	
8	白磁	合子 蓋	A	SD 1	6.3			天部に花卉文 施釉	回転ナデ	明緑灰	灰白		景德鎮
9	白磁	合子 身	A	SD 1	4.9	4.85		受け部露胎 施釉 底部露胎	施釉	明緑灰	明緑灰		景德鎮
10	白磁	碗 口縁～体部	A	SD 1				端反り 施釉	施釉 見込み圏線(暗文)	灰白	灰白		
11	白磁	椀花碗 口縁～底部	A	SD 1	(17.6)	5.4	6.3	端反り 施釉 高台内露胎	施釉 見込み圏線(暗文)	灰白	灰白		
14	須恵器	甕 口縁～肩部	A	SC7				ナデ 格子目タタキ	ナデ 指頭痕	暗灰	暗灰	微細～5mm大の灰白色の粒 1.5mm以下の明黄褐色の粒 微細な無色透明の光沢粒	
15	白磁	碗 口縁～体部	A					玉縁口縁 施釉	施釉	灰白	灰白		
16	白磁	碗 口縁～体部	A					玉縁口縁 施釉	施釉	灰白	灰白		
17	緑釉陶器	碗 底部	A		(4.2)			施釉 高台内露胎	回転ナデ	にぶい黄	灰黄 にぶい橙		
18	青磁	碗 体部～底部	A			5.1		施釉 貫入 高台内露胎 体部に暗文	施釉 貫入 見込みに圏線印花	オリーブ灰	灰白		
19	土師質	土鉢	A		長2.45	幅2.35	重13.4g						
20	土師器	鉢 口縁～体部	B2					突帯 ナデ	ハケ目 風化気味	灰白	灰白	1cm位の茶褐色の砂粒 2mm以下の黒褐色の砂粒	
21	土師器	鉢 口縁	B2					横ナデ ナデ 風化気味	剥離 横ナデ	浅黄橙	浅黄橙	1mm以下の灰白色の砂粒	
22	土師器	甕 口縁	B3	SA3	(21.4)			横ナデの後ナデ スス付着 風化気味	剥離 ナデ 風化気味	明赤褐	橙	1～8mmの茶褐色・灰褐色の砂粒 3mmの黒褐色の砂粒	
23	土師器	壺 口縁	B3	SA3	10.0			ナデ 風化気味	剥離 ナデ 風化気味	にぶい黄橙	にぶい橙	7mm以下の赤褐色・黄褐色の粒 3mm以下の黒褐色・乳白色の粒	
24	土師器	壺 胴部	B3					タタキ	ナデ	赤橙	にぶい黄橙	1～2mmの灰白色・灰褐色の砂粒 1mm位の無色透明の光沢粒	
25	白磁	皿 底部	B3	SC2		5.83		施釉	施釉 見込み圏線	灰白	灰白		
28	土師器	壺 胴部	B4					タタキ	横ナデ	灰褐	にぶい赤褐	4mm以下の灰白色・灰褐色の砂粒 2mm以下の茶褐色の砂粒	
29	白磁	碗 口縁～体部	B4					端反り 施釉	施釉	灰白	灰白		
30	土師質	土鉢	B4		長3.9	幅1.7	重10.4g						
32	土師器	壺 口縁	B5					横ナデ	横ナデ 横ハケ目	淡橙	灰白	3mm以下の灰白の粒 1mm以下の褐灰の粒	
33	土師質	鉢 口縁	B5					横ナデ 指頭痕	横ナデ 横・斜方向ハケ目	灰黄褐・褐灰	灰白	3mm以下の褐灰の粒	
34	土師質	坏 底部	B5					ナデ ヘラ切り	ナデ	浅黄橙	浅黄橙	4mm以下の茶褐色・灰褐色・灰白色の砂粒・黒褐色の光沢粒	
35	染付	皿 底部	B5		(7.4)			施釉 豊付釉剥ぎ	施釉	灰白	灰白		
36	染付	皿 口縁～底部	B5		(13.7)	(7.0)	(3.0)	端反り 施釉 豊付釉剥ぎ 高台内に放射状の削り痕	施釉	明緑灰	灰白		
37	須恵器	壺 口縁～胴部	B5	SE2	5.47			回転ナデ 自然釉 肩部に刻印	回転ナデ 自然釉	灰白 にぶい褐	灰白・灰	1mm以下の褐灰・黒褐色の粒	
38	陶器	菊花皿 口縁～底部	B5	SE2	(11.4)	(4.1)	(2.75)	施釉 高台内露胎	施釉 見込み露胎	淡黄・灰白	にぶい黄橙 灰白		
39	白磁	皿 口縁～底部	B5	SE2	(10.55)	(4.3)	2.8	端反り 施釉 胎土目積み 高台内露胎	施釉	灰白	灰白		
40	青磁	碗 体部～底部	B5	SE2		4.05		施釉貫入 胎土目の痕 施釉 豊付釉剥ぎ	施釉貫入 胎土目の熔着	灰オリーブ	灰白		
41	土師質	鉢 口縁～体部	B5	SE2	(10.2)			ナデ	ナデ	にぶい黄橙	灰白	2mm以下の灰白色・灰褐色の砂粒	
42	白磁	碗 体部～底部	B5	SE2		7.1		施釉 蛇の目高台 高台内露胎	回転ナデ 斑状に釉付着	明オリーブ 灰	灰白		

第2表 A・B区 遺物観察表

遺物番号	種別	器種位	出地区	出土地点	法量 (cm)			手法・調整・文様ほか		色調		胎土の特徴	備考
					口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面		
43	陶器	瓶胴部	B5	SE2				施釉 貫入	露胎 回転ナデ	黒褐	にぶい橙		
44	陶器	瓶頸部	B5	SE2				施釉 貫入	施釉 (下部分露胎)	黒褐 にぶい黄	灰き		
45	陶器	甕 口縁～底部	B5	SE2	19.25	12.75	12.65	口縁下部に注孔孔 ナデ 工具によるハケ目状のナデ	横ナデ 斜方向の工具痕 ナデ	褐灰 にぶい黄	灰褐	7mm大の灰白の粒 1mm以下の灰白・黒褐の粒	
46	陶器	播鉢 口縁～底部	B5	SE2	(25.07)	(13.6)	(11.6)	ナデ 横ナデ 指頭痕	回転ナデの後縦12条の櫛目	黄橙・橙	にぶい黄褐 にぶい褐	5mm大の灰白・黒褐の粒 2mm以下の黒褐・褐灰・灰白の粒	備前
47	陶器	播鉢 口縁～胴部	B5	SE2	(31.27)			回転ナデ 折り返しによる口縁帯肥厚 ナデ 斜方向に連続した工具痕	回転ナデの後縦方向に7条の櫛目	にぶい橙 にぶい黄褐	橙	1mm以下の黒褐・褐灰・灰白の粒	
48	陶器	播鉢 口縁～胴部	B5	SE2				回転ナデ	回転ナデの後縦方向に12条の櫛目	にぶい赤褐	にぶい赤褐 橙	微細～4mm大の灰白・褐灰色の粒 微細～1mm大の黒色・淡黄の粒	備前
49	陶器	大皿 口縁～体部	B5	SE2	(37.3)			露胎	施釉	にぶい黄橙	にぶい黄橙		
50	土師質	坏 体部～底部	B6	SC3				横ナデ	横ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	1mm以下の灰褐色の砂粒	
51	青磁	碗 口縁～体部	B6					施釉 貫入 暗文	施釉 貫入	灰オリーブ	灰黄		
52	陶器	碗 口縁～体部	B6		(12.0)			端反り 施釉 体下部露胎	施釉	褐・黒褐	にぶい黄橙		
53	白磁	皿 口縁～底部	B6		(11.0)	(5.6)	(3.0)	端反り 施釉 畳付釉剥ぎ	施釉	灰白	灰白		
54	染付	脚台付小碗 体下部～脚部	B6			(3.8)		施釉 脚下部露胎	施釉	灰白	灰白		
55	陶器	播鉢 口縁	B6					横ナデ 自然釉 浅い沈線	横ナデ	灰赤	灰赤	3.5mm以下の灰褐色の砂粒	
56	陶器	甕 口縁	B6					折り返しによる玉縁状の口縁 横ナデ	横ナデ	にぶい褐	灰褐	2mm以下の灰白色・黒褐色・茶褐色の砂粒	
57	陶器	灯明具 口縁～底部	B6		(5.9)	3.9	(4.55)	施釉 ナデ 糸切り底	施釉	灰褐	明赤褐		
58	陶器	灯明具 脚部	B6					穿孔 施釉 釉溜まり	ナデ 釉の垂れ 横ナデの後縦・斜方向のナデ	黒	灰		
60	土師質	皿 口縁～底部	B7			3.7		スス付着 横ナデ 糸切り	スス付着 ナデ	橙	橙	4mm以下の黒褐の粒 1.5mm以下の黒色の粒 1mm以下の灰白・赤褐の粒	灯明皿
59	土師質	皿 底部	B7			(3.7)		横ナデ 糸切り	ナデ	橙	橙	1.5mmのにぶい黄橙の粒 微細な光沢粒	
61	青磁	碗 口縁～体部	B7					施釉 しのぎ運弁	施釉	灰オリーブ	灰白		
62	染付	碗 口縁～底部	B7		10.4	3.95		施釉 畳付釉剥ぎ	施釉	灰白	灰白		
63	染付	瓶 胴部～底部	B7					施釉 畳付釉剥ぎ	回転ケズリ 部分的に釉付着	灰白	灰白		

第3表 B区 遺物観察表

遺物番号	器種	調査区	出土地点	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備考
12	湖州六花鏡	A 1	SC1	—	9.90		0.42	55.6	
13	草葉胡蝶鏡	A 1	SC2	—	7.30		0.38	19.8	
26	滑石製品	B 3	SH7	滑石	4.15	3.05	1.65	29.4	27と一対。
27	滑石製品	B 3	SH7	滑石	4.15	3.05	1.50	24.1	26と一対。
31	磨製石鏃	B 4		緑泥片岩	2.90	2.00	0.30	2.7	先端部欠損

第4表 A・B区 遺物計測表

遺物 番号	法 量 (cm)								石 質	備 考
	A	a	b	c	d	e	f	g		
69	30.2+ α	17.1+ α	1.5	8.6	3.7	21.0+ α	18.6	7.4	凝灰岩	
70	30.0+ α	15.4+ α	0.4	9.2	5.2	21.5	20.6	9.3	凝灰岩	
71	28.3	14.2	0.6	8.4	5.8	19.0	17.8	7.0	凝灰岩	
72	25.4	14.2	—	8.3	3.0	20.2	18.8	7.6	凝灰岩	
73	26.8+ α	15.9	0.4	6.0	4.5+ α	20.0	15.8+ α	7.5	凝灰岩	
74	28.6+ α	17.2+ α	0.4	7.3	3.6	19.8+ α	18.8+ α	8.0	凝灰岩	
75	27.1	12.8	—	7.5	5.9	18.6	17.4	8.3	凝灰岩	
76	28.4	17.7	0.3	5.6+ α	3.3	20.6	16.0+ α	8.3+ α	凝灰岩	
77	27.5+ α	16.8+ α	—	7.7	3.4	20.4+ α	19.5	7.6	凝灰岩	
78	30.5+ α	16+ α	0.5	9.2	4.2+ α	22.3+ α	20.2	9.0	凝灰岩	
	26.5+ α	21.0	—	6.0	—	22.5	23.0	—	凝灰岩	
	26.5	13.0	1.0	8.0	4.0	19.0	19.5	8.8	凝灰岩	
	24.5	10.0	—	9.0	5.5	16.0	15.5	8.5	凝灰岩	
	24.5	10.5	—	8.8	4.5	17+ α	17.0	8.0	凝灰岩	
	27.5	16.5	—	7.5	3.0	20.5	20.0	7.8	凝灰岩	
	25.0	16.0	—	9.0	—	20.5	計測なし	—	凝灰岩	
	22.0	13.5	—	6.0	1.7+ α	17.0	14+ α	7+ α	凝灰岩	
	22.0	13+ α	—	6.5	1.5+ α	15.5+ α	14.5+ α	8.5+ α	凝灰岩	
	19.5+ α	7+ α	1+ α	7.2	4.5	17+ α	15.5+ α	7.5	凝灰岩	
	17.5+ α	11.5	—	4.5	—	14.5	14.3+ α	—	凝灰岩	
	17.7+ α	10.2+ α	—	6.5+ α	—	13.5	14+ α	—	凝灰岩	
	25.1	13.3	1.2	6.4	4.2	18.8	17.9	7.1	凝灰岩	
	28.1	16+ α	0.7+ α	6.5	4.9	21.1	19.3	8.6	凝灰岩	
	30.5	16.3	—	7.6	6.6	24.6	20.7+ α	12.4	凝灰岩	不明
	17.9+ α	11.0	0.5	4.9	1.5	19.2	19.6	5.6	凝灰岩	
	30.2	17.4	0.9	7.6	4.3	21.1	18.0	9.3	凝灰岩	
	25.1	13.3	—	9.1+ α	2.7+ α	16.8	16.4	7.8	凝灰岩	不明
	26.5	15.6	0.8	7.0	3.1	20.1	17.7	7.8	凝灰岩	
	24.1	13.5	0.6	6.9	3.1	16.8	14.9	8.6	凝灰岩	
	20.0	11.2	0.8+ α	6.1	1.9	18.3	15.1+ α	5.8	凝灰岩	不明
	20.1	12.6	0.4	19.3	0.8+ α	15.0	14.7	4.6+ α	凝灰岩	不明
	21.7+ α	12+ α	1.0	7.5	2.2	16.8	15.9	7.2	凝灰岩	不明
	25.4+ α	12.2+ α	1.1+ α	7.5+ α	4.6+ α	20.3+ α	17.7+ α	8.4+ α	凝灰岩	不明
	24.6	13.8	0.8	6.1	4.2	17.5	15.6	7.9	凝灰岩	
	27.4+ α	16.5+ α	0.8+ α	4.9+ α	5.2+ α	17.3	15.0	8.9	凝灰岩	
	23.2	12.0	0.4	6.4	4.4	15.4	16.4	7.5	凝灰岩	
	33.5	19.1	1.1	7.8	5.5	22.8	20.1	8.9	凝灰岩	
	27.4	15.3	1.0	6.9	4.2	21.8	20.1	9.2	凝灰岩	
	11.1+ α	11.1+ α	—	—	—	16.7+ α	—	—	凝灰岩	
	67+ α	67+ α	—	—	—	16.4+ α	—	—	凝灰岩	
	22+ α	10.3+ α	1.90	6.90	2.90	15.50	14.50	6.40	凝灰岩	

第5表 B区 空風輪 法量表

遺物 番号	法 量 (cm)											柄穴	石 質	備 考
	B	h	i	j	k	l	m	n	o	p	q			
79	25.5	15.1	9.6	0.8	14.4	1.6	14.6	10.0	21.0	16.8	5.5	円	凝灰岩	
80	21.3	8.4	10.8	2.1	12.4	2.6	15.4	9.8	15.6	15.4	7.1	四角	凝灰岩	
81	15.6	9.2	5.4	1.0	7.4	0.0	13.0	7.3	17.0	14.6	5.0	円	凝灰岩	
82	21.0	12.0	7.6	1.4	10.7	0.7	15.1	9.3	20.0	18.2	6.1	円	凝灰岩	
83	22.5	8.3	10.4	3.8	12.6	2.7	16.1	9.0	16.4	15.8	6.6	四角	凝灰岩	
84	19.1	10.0	8.3	0.8	8.2	0.8	14.4	9.9	19.1	15.4	4.7	楕円?	凝灰岩	
85	19.8	10.2	8.6	1.0	9.8	0.8	17.5	10.0	19.1	17.2	5.9	四角	凝灰岩	
86	21.7	12.7	8.0	1.0	8.8	0.8	12.4	9.6	18.4	18.0	6.4	円	凝灰岩	
87	19.4	13.6	1.4+ α	4.4+ α	6.0	2.0	16.7	10.1	20.0	20.0	9.2	円	凝灰岩	
88	22.3	9.0	11.8	1.4	11.2	1.0	16.6	8.8	18.2	7.7	6.4	四角	凝灰岩	
89	25.6	14.4	9.2	2.0	14.2	0.8	—	9.0	22.9	20.0	7.0	円	凝灰岩	
90	18.2	6.2	11.0	1.0	13.0	1.0	8.7	10.0	17.6	15.6	8.8	四角	凝灰岩	

第6表 B区 火輪 法量表1

遺物 番号	法 量 (cm)											柄穴	石 質	備 考
	B	h	i	j	k	l	m	n	o	p	q			
91	19.4	17.7	1.6+ α	4.0	4.4	3.0	13.4	9.0	18.5	15.7	7.0	四角	凝灰岩	
92	27.6	21.2	4.4	2.0	3.8	3.4	13.2+ α	9.7	18.7	18.0	8.2	円	凝灰岩	
93	17.0	6.2	10.0	1.2	9.0	1.0	18.2	8.0	16.6	14.0	7.6	四角	凝灰岩	
94	19.2	10.7	7.4	1.2	4.8	10.0	—	3.0	19.8	17.4	5.0	四角?	凝灰岩	
95	18.6	8.2	6.0	4.2	9.8	0.9	14.3	7.5+ α	14.5	13.4	5.9	四角	凝灰岩	
96	19.0	8.7	—	—	9.8	2.2	—	9.0	16.9	14.6	7.7	四角	凝灰岩	
97	19.1	14.8	3.5	0.5	3.0	1.2	15.1	6.1	15.7	14.6	3.9	四角	凝灰岩	
	9.9	5.0	8.5	1.5	11.8	3.0	15+ α	19.5+ α	18.5	—	4.2	—	凝灰岩	
	14.0	3.8	9.5	1.0	14.0	2.0	23+ α	8.5	14.0	13.0	3.0	四角形	凝灰岩	
	19.8	11.4	5.9	2.5	4.2+ α	—	19.5+ α	7.9	20.5	18.5	3.5	楕円形	凝灰岩	
	22.6	8.3	11.0	3.3	5.5+ α	9+ α	14.5	8.3+ α	17.5	17+ α	6.6	四角形	凝灰岩	
	26.8	17.6	8.0	1.2	10.5	0.8	17.6	12.1	18.7	17.6	6.2	円形	凝灰岩	
	22.3	11.3	9.5	1.8	13.7	1.6	20.8	11.4	22.5	23.0	9.6	円形	凝灰岩	
	17.8	12.3	3.2	2.3	4.8	1.5	12.9	7.2	14.0	13.5	4.7	円形	凝灰岩	
	21.8	7.0	10.2	4.6	12.9	3.2	16.3	8.4	15.4	15.0	6.2	四角形	凝灰岩	
	17.2	0.0	13.6	3.6	6.6	2.4	31.2	11.6	20.0	19.8	6.3	四角形	凝灰岩	
	24.7	12.6	5.3	6.8	7.6	4.8	20.6	9.8	21.5	22.5	5.8	四角形	凝灰岩	
	25.2	10.6	10.8	3.8	15.0	3.6	20.0	7.6	19.7	17.4	4.6	四角形	凝灰岩	
	23.9	10.1	10.6	3.2	9.6	1.8	16.6	10.6	19.9	16.7	4.8	円形	凝灰岩	
	19.6	12.3	3.5	3.8	4.2	3.0	20.6	10.8	19.6	18.2	6.2	円形	凝灰岩	
	21.0	8.1	7.4	5.5	9.1	1.5	12+ α	8.0	11.6?	9.8	5.0	四角形	凝灰岩	
	23.4	11.2	10.2	2.0	10.8	1.6	18.5+ α	10.4	20.3	18.0	6.1	—	凝灰岩	
	17.8	10.8	6.2	0.8	6.2	1.7	13.5	6.2	14.9	—	6.8	—	凝灰岩	2つに分割
	13.9	8.3	3.3	2.3	6.9	1.2	14.5	9.1	14.2	13.1	5.2	—	凝灰岩	
	18.4+ α	10.4+ α	4.9+ α	3.1+ α	2+ α	7+ α	14+ α	8.8+ α	19+ α	19+ α	2.3+ α	四角形	凝灰岩	全体的に摩耗
	16.7	10.5	2.2	—	—	—	16.0	8.0	17+ α	—	5.9+ α	四角形	凝灰岩	下部2/3欠
	20.4	11.8	6.2+ α	2.4+ α	7.5+ α	4.5+ α	15.4	10.1	21.5	22.0	6.4	円形	凝灰岩	
	15.3+ α	11.3+ α	3+ α	1+ α	3.2+ α	1.1+ α	14.7+ α	8.6	14.5+ α	13.8+ α	4.8+ α	—	凝灰岩	全体的に摩耗
	22.9	11.5	9.6	1.8	8.9	5.5	15.2	11.0	20.5	19.9	5.0	円形	凝灰岩	墨書
	18.5	5.0	12.0	1.5	14.0	2.1	16.2	8.8	17.6	15.0	7.4	四角形	凝灰岩	
	16.9	12.4	2.2	2.3	4.4	1.6	17.0	—	18.4+ α	18.5+ α	—	四角形	凝灰岩	地輪から転用か
	16.9	10.9	5.7	0.3	6.5	2.3	12.0	6.8	14.8	13.5	5.1	円形	凝灰岩	
	19.8	10.9	7.1	1.8	8.5	2.6	15.2	10.4	20.1	19.0	6.1	円形	凝灰岩	墨書(4ヶ所)
	18.6	9.2	6.2	3.2	8.4	2.1	13.5	7.4	16.3	15.0	4.5	円形	凝灰岩	
	13.2	5.0	6.8	1.2	4.9	2.1	15.0	8.4	8.2	12.6	4.4	四角形	凝灰岩	
	19.5+ α	17.5+ α	—	2+ α	—	—	—	9+ α	7.7+ α	—	1+ α	四角形	凝灰岩	上部欠損
	15.9	6.0	8.0	1.8	11.8	2.2	11.6	8.6	8.5	7.4	6.4	—	凝灰岩	

第7表 B区 火輪 法量表2

遺物 番号	法 量 (cm)						柄穴	石 質	備 考
	C	s	t	u	v	w			
98	21.10	5.10	27.00	10.60	369.00	24.50	四角	凝灰岩	
99	19.10	4.20	28.10	9.30	31.30	19.50	四角	凝灰岩	
100	20.80	3.80	22.90	10.20	31.30	21.30	四角	凝灰岩	
101	22.90	4.10	23.00	10.80	34.40	22.20	四角?	凝灰岩	
102	22.60	5.80	27.40	13.20	36.70	27.90	四角?	凝灰岩	
103	20.00	8.50	27.8+ α	15.50	35.70	16.2+ α	円	凝灰岩	
104	21.60	4.40	26.40	9.40	36.20	37.80	四角?	凝灰岩	
105	27.20	7.80	29.0+ α	9.10	41.50	23.20	四角?	凝灰岩	
106	19.80	5.00	21.0+ α	12.50	33.20	16.4+ α	四角	凝灰岩	
107	21.50	5.10	27.90	10.00	37.00	5.0+ α	四角	凝灰岩	
108	19.90	4.20	27.70	12.60	33.40	24.00	四角	凝灰岩	
109	19.40	6.50	23.2+ α	10.30	33.20	23.00	円?	凝灰岩	
110	30.50	8.30	22.00	5.90	33.00	23.00	円	凝灰岩	
111	28.80	—	23.20	—	38.40	26.40	—	凝灰岩	

第8表 B区 水輪 法量表1

遺物 番号	法 量 (cm)						柄穴	石 質	備 考
	C	s	t	u	v	w			
112	24.70	5.10	28.00	14.90	39.40	27.00	円	凝灰岩	
113	27.60	—	19.20	—	39.80	11.5+ α	—	凝灰岩	
114	16.50	2.30	23.2+ α	9.30	29.70	24.00	四角?	凝灰岩	
115	23.00	2.20	20.00	5.70	36.90	11.20	四角	凝灰岩	
116	20.30	—	28.6+ α	—	33.90	31.40	—	凝灰岩	
117	29.30	9.00	28.50	18.6+ α	41.60	25.80	円	凝灰岩	
118	20.80	—	31.00	14.50	—	—	円	凝灰岩	
119	25.30	9.40	34.5+ α	15.40	43.70	32.80	円?	凝灰岩	
120	34.00	3.90	26.30	11.70	39.70	27.40	円	凝灰岩	
	16.50	4.00	18.50	8.20	36.40	30.00	円	凝灰岩	
	28.70	5.70	25.30	11.00	24.20	26.40	四角	凝灰岩	
	19.50	3.50	—	7.00	31.70	23.50	四角	凝灰岩	
	20.00	5.30	24.00	8.50	33.30	20.00	円	凝灰岩	
	20.30	—	17.50	—	25.10	20.00	—	凝灰岩	
	15.40	3.80	26.50	9.60	29.40	17.40	円	凝灰岩	
	17+ α	2.80	34+ α	10.00	38.70	—	四角	凝灰岩	
	20.40	3.50	32.2+ α	10.60	35.60	31+ α	四角	凝灰岩	上面剥離多し
	20.00	7.80	18+ α	8.20	25.3+ α	17.20	円	凝灰岩	
	28.00	2.50	24.50	11.50	38.00	22.50	楕円	凝灰岩	
	17.00	2.20	27.00	10.00	30.60	25.50	四角	凝灰岩	
	20.40	2.80	26.80	9.20	25.80	33.40	四角	凝灰岩	
	18.20	4.80	27.30	8.80	34.20	24.70	四角	凝灰岩	
	20.30	3.70	22.20	8.30	30.10	19.00	四角	凝灰岩	
	7.80	2.90	28.00	11.00	31.20	25.40	円	凝灰岩	約1/3欠損 下にも穴
	31.30	—	27.60	—	39.60	25.60	—	凝灰岩	
	17.00	7.50	—	10.00	41.00	25.00	四角?	凝灰岩	
	17.70	3.90	25.00	9+ α	32.00	25.00	四角?	凝灰岩	上部欠損
	21.00	7.10	23.50	10.00	28.00	24.00	円	凝灰岩	
	20.5+ α	1.8+ α	37+ α	7.5+ α	42.00	33.50	四角	凝灰岩	
	20.50	6.50	27.00	10.50	34.50	27.50	—	凝灰岩	
	22.20	8.60	29.50	13.40	26.40	22.8+ α	円	凝灰岩	
	12.4+ α	2.70	21+ α	7.3+ α	27.3+ α	—	四角	凝灰岩	下部欠損
	14.7+ α	—	—	—	29.50	21.6+ α	—	凝灰岩	上部欠損
	17.5+ α	—	—	6.5+ α	29.4+ α	20+ α	四角?	凝灰岩	上部欠損
	18.4+ α	—	12+ α	—	27.5+ α	15+ α	—	凝灰岩	約1/2欠損
	21.0	—	28.2	—	34.2	28.9	?	凝灰岩	
	21.3	3.5	16.6	11.9	34.7	27.1	—	凝灰岩	
	36.0	4.2	25.6	13.1	42.4+ α	28.7	?	凝灰岩	
	37.5	9.9	—	11.7	28.0	19.2	円	凝灰岩	
	17.2	4.3	26.6	11.2	32.4	25.5	円	凝灰岩	
	21.8	3.6	26+ α	9.0	39.5+ α	30.2	四角	凝灰岩	風化。剥落が多い
	21.4	2.9	26.0	9.5	33.9	25.8	四角	凝灰岩	
	12.1+ α	3.5	21.2	7.6	26.6	16+ α	円?	凝灰岩	下部欠損? 摩耗
	15.7	2.8	26.9	10.2	32.1	24.0	円	凝灰岩	
	26.2	—	19.8	—	32.3	26.8	四角?	凝灰岩	
	20.9	5.0	27.8	10.0	34.7	15.8	円	凝灰岩	
	20.9	3.1	25.8	7.2	35.8	29.4	四角	凝灰岩	
	20.2	1.1	22.2	8.0	31.1	25.3	楕円	凝灰岩	
	13.2+ α	3.1	26.2+ α	18.7+ α	20.5+ α	25.6+ α	四角	凝灰岩	摩耗
	6.8	3.0	19+ α	10.5+ α	26.8+ α	16.8+ α	四角	凝灰岩	2分割
	17.0	9.5	23.5	8.9	29.5	20.7	四角	凝灰岩	

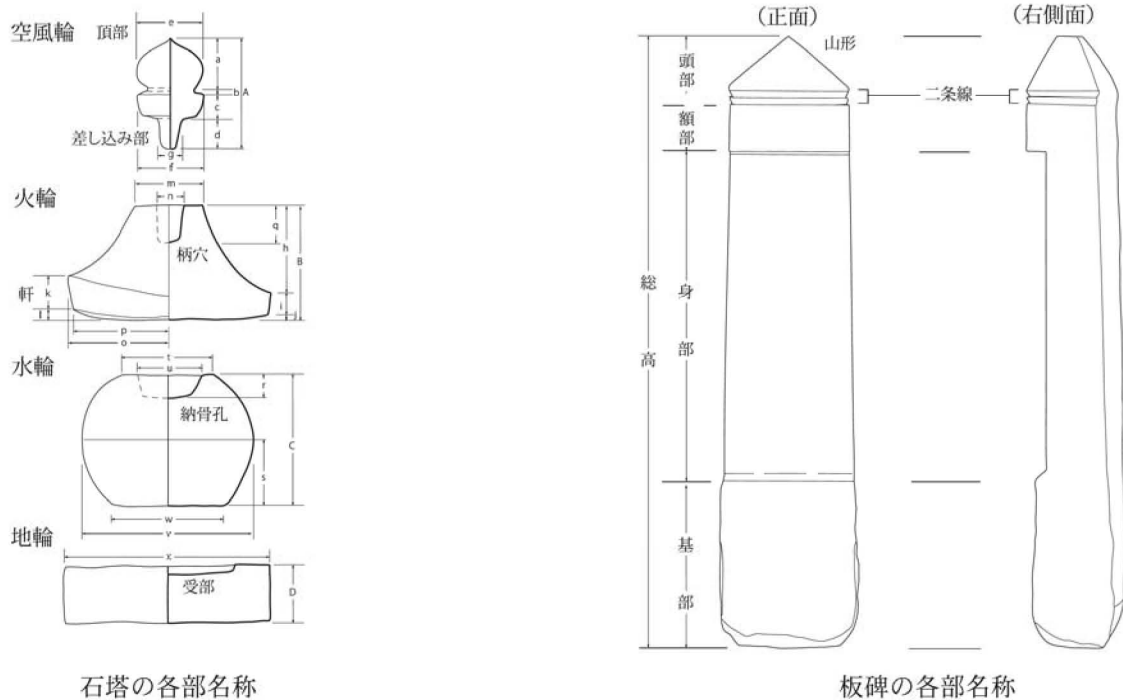
第9表 B区水輪 法量表2

遺物番号	法 量		石 質	備 考	遺物番号	法 量		石 質	備 考
	D	x				D	x		
121	11.3	27.9	凝灰岩						
122	14.8	35.5	凝灰岩			10.3	33.8	凝灰岩	
123	15.3	37.1	凝灰岩			13.5	30.0	凝灰岩	
124	14.1	37.2	凝灰岩			16.2	35.5	凝灰岩	3分割
125	12.9	32.0	凝灰岩			13.1	47.1	凝灰岩	
126	15.8	45.9	凝灰岩			9.9	38.7	凝灰岩	
127	14.8	29.4	凝灰岩			13.9	37.7	凝灰岩	
128	14.3	34.1	凝灰岩			12.7	32.6	凝灰岩	
129	12.6	40.7	凝灰岩			17.6	52.7	凝灰岩	
130	15.8	39.7	凝灰岩			15.1	40.8	凝灰岩	
131	15.0	46.9	凝灰岩			11.6	31.4	凝灰岩	
	15.1	38.9	凝灰岩			12.3	27.4	凝灰岩	
	13.9	46.0	凝灰岩			12.8	41.0	凝灰岩	
	8.2	29.8	凝灰岩			12.6	37.5	凝灰岩	火輪に転用（加工途中）

第10表 B区 地輪 法量表

遺物番号	器 種	法 量			石 質	備 考
		幅	奥行き	高さ		
64	墓石本体	25.6	21.6	63.5	砂 岩	近世墓（自然石）、正面に「良元」の刻字
65	墓石本体	24.4	17.3	64.2	凝灰岩	近世墓、正面に「元禄十二卯年 心來庵良元居士之塔 三月十七日」の刻字
66	墓石本体	23.0	16.6	64.8	凝灰岩	近世墓、正面に「元禄十一寅年 心覚法良壽大師之塔 四月初二日」の刻字
67	台座	38.6	38.5	16.7	凝灰岩	近世墓
	台座	39.9	39.0	18.1	凝灰岩	近世墓
68	板碑	21.1	13.3	25.9	凝灰岩	頭部から額部にかけて残存。

第11表 B区 墓石・板碑 法量表



第29図 五輪塔法量凡例

第V章 C区の調査

C区は、林遺跡の北半、市立伊形小学校が立地する独立丘陵の南西向き斜面と裾部に位置する。丘陵斜面は、数段のテラス状に整形され、畑地として利用されていた。調査の進行にあわせ裾部から順にC1区、C2区とし、C7区までを調査した。

C1区～C4区にかけて、旧石器時代から縄文時代の遺構・遺物、中世～近世の遺構と遺物が検出されたが、C5区～C7区については、特に明確な遺構は検出されなかった。

なお、旧石器時代及び縄文時代については、接合資料や同一母岩等がD1区にも広がることから、第1節及び第2節については、C・D区まとめて報告したい。

第1節 旧石器時代

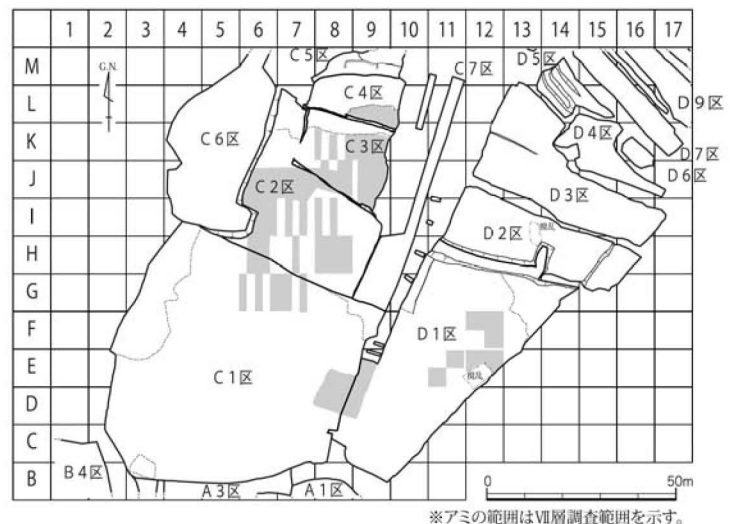
今回の調査ではC1～4区の一部とD1区で包含層の掘り下げを行い、旧石器時代の遺構と遺物が確認されている。主にⅣ層～Ⅴ層上面で石器群を確認し、調査期間の都合上、一部の掘り下げに留まったが、Ⅶ層中からも出土している。ただし、前述のとおり、表土下がすぐにⅣ層になることや後世の遺構が掘り込まれている等の要因により、遺物の包含状況は芳しいとは言えず、特にC2区の中央～東側、3区の中央部については後世の遺構密度の高く、かなりの影響があったものと考えられる。またⅣ層中からは、縄文時代早期や晩期の遺物が僅かながら出土している。当時の記録等が無いため、詳細は不明であるが、混入の可能性が高い。さらにD1区では他の地区よりも傾斜がきついためか、縄文時代早期の包含層であるⅢ層中からも、同時代中の遺物と混在するように出土している。

同時代は大きく3期（下位より第Ⅰ文化層から第Ⅲ文化層）に分けられる。以下、文化層別に説明していきたい。

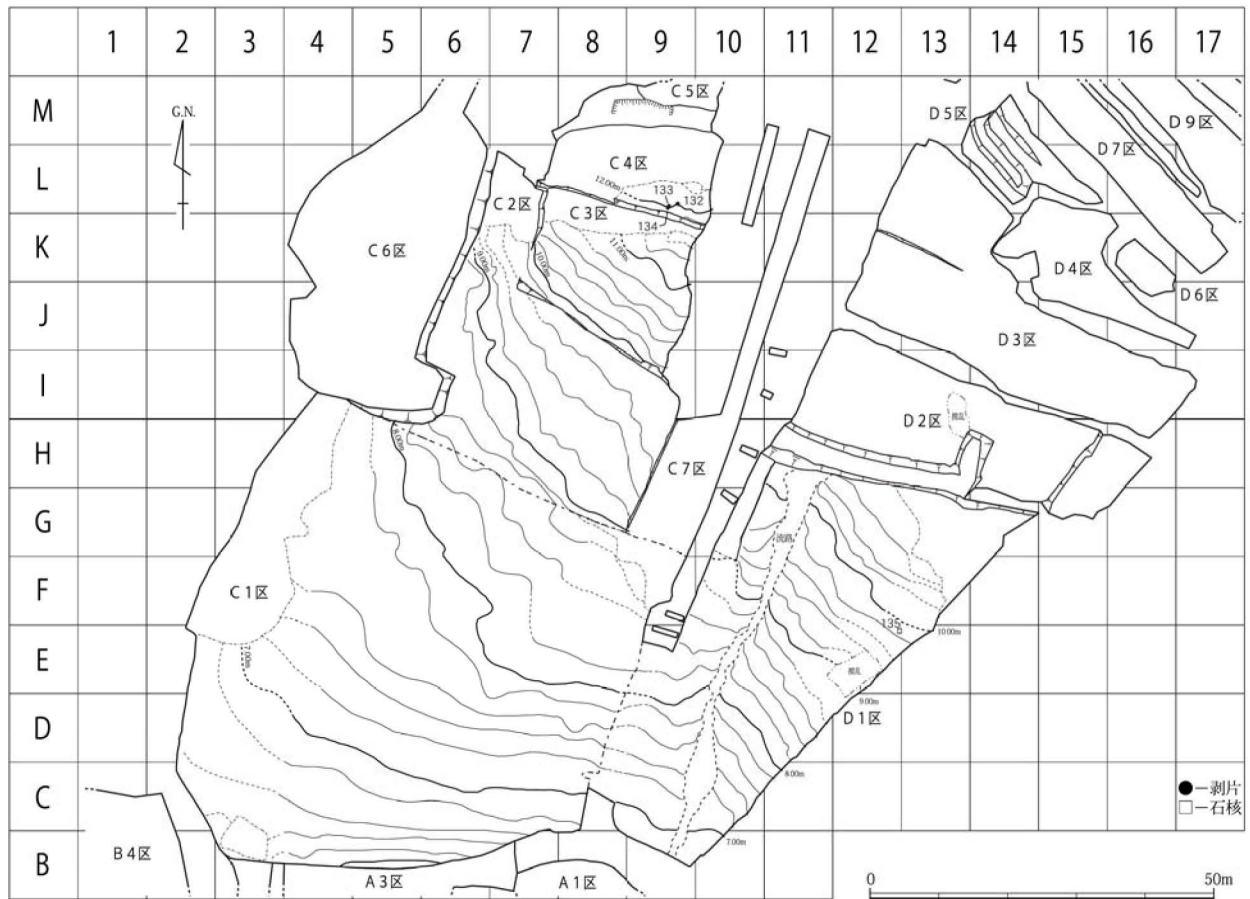
1. 第Ⅰ文化層（第31図・第32図、第14表）

第Ⅱ章、第3節でも述べているが、C1区北側からC4区南東部、D1区中央東側で掘り下げ作業を行った（第30図）。なお、D1区南側についてはⅦ層が確認されていないため、トレンチによる確認のみで終了した。

石器は、C4区L・9グリッド南側で3点、D1区E・12グリッド北東側～F・12グリッド南側で2点、総計5点がⅦa層下部より出土し、その内訳は剥片4点、石核1点で、石材はすべて流紋岩（76.9g）が利用されている。そのうち、D1区出土のものについてはⅥ層が殆ど認められず、Ⅴ層と接するため、上層からの落ち込みの可能性も考えられる。ここでは出土層を重視して報告したい。



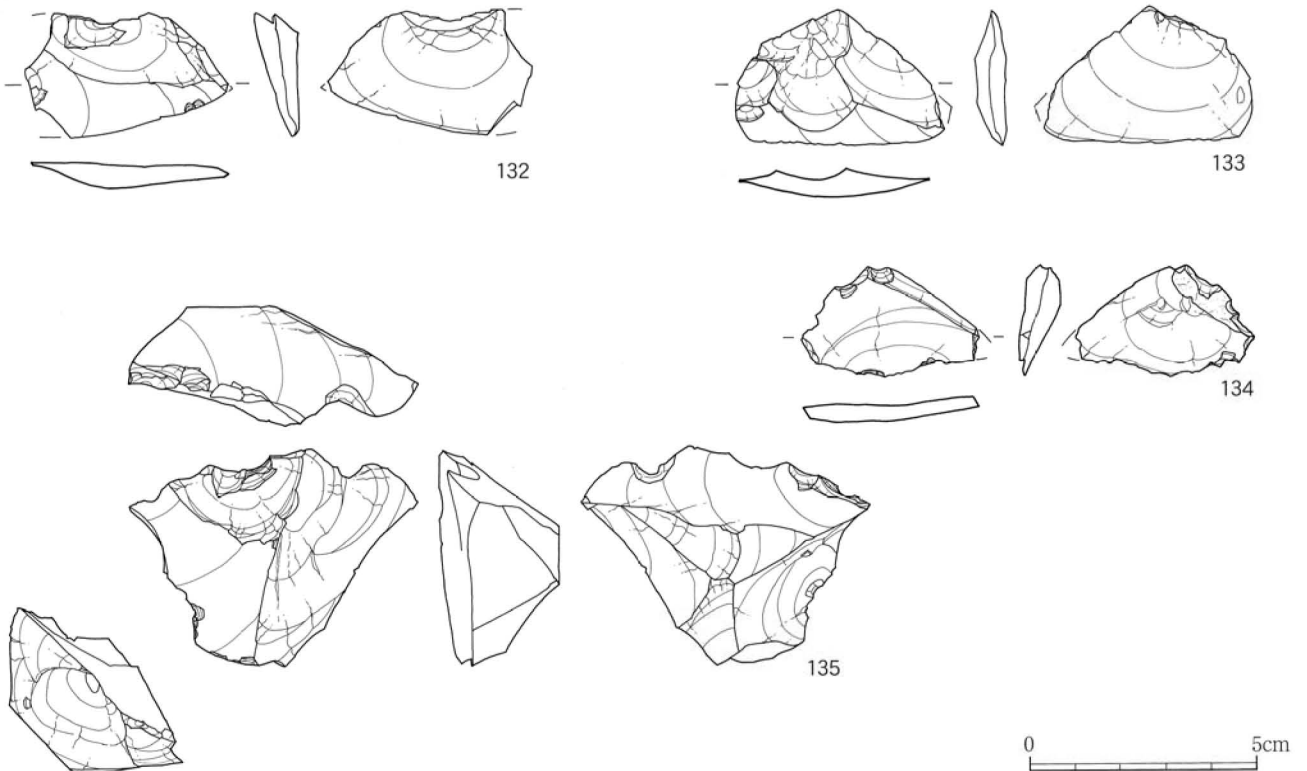
第30図 C・D区Ⅶ層 調査範囲 (S = 1 / 2,000)



※等高線はV層上面のもの。C1～4区及びD1区の一点破線内(空白)はVII層以降の露出範囲。

第31図 C・D区旧石器時代第I文化層遺物分布図 (S = 1 / 1,100)

第I文化層



第32図 C・D区出土石器実測図1 (S = 3 / 5)

132～134は剥片で、同一母岩のものである。おそらく、石核から求心状に剥出されたもので、そのうち133と134は打面が礫面である。後述する流紋岩Ⅰ類製である。

135は石核である。全体的に赤化しており、火を受けた可能性が高い。異なる風化面を持つことから、打面転移を行いながら剥離作業を行った石核を利用し、平坦な面を打面に設定して、そのまま、剥片剥離を行い、横長の剥片を剥出している。後述する流紋岩Ⅴ類製である。

2. 第Ⅱ文化層

(1) 遺構

遺構はC・D区で、礫群25基、小土坑2基、自然流路1条が確認されている。

礫群(SⅠ) (第33図～第36図、第12表)

礫群は25基(CⅠ区11基、CⅡ区10基、DⅠ区4基)確認されている。検出層は、Ⅳ層中位(C-SⅠ1・2・5・6・14～20・D-SⅠ1)、Ⅳ層下部～Ⅴ層上部(C-SⅠ3・4・7～13・21・D-SⅠ2～4)の2つのピークが認められる。形態的には縄文時代の集石遺構に近いものも含まれているが、ここでは検出層位と周辺で確認されている遺物を重視して、本時代に含めた。

分布はCⅠ～CⅡ区の比較的傾斜の緩やかな範囲に多く分布し、CⅠ区中央東側(C-SⅠ5～9)とCⅡ区西側(C-SⅠ13～17)の2箇所にとままりが認められる。

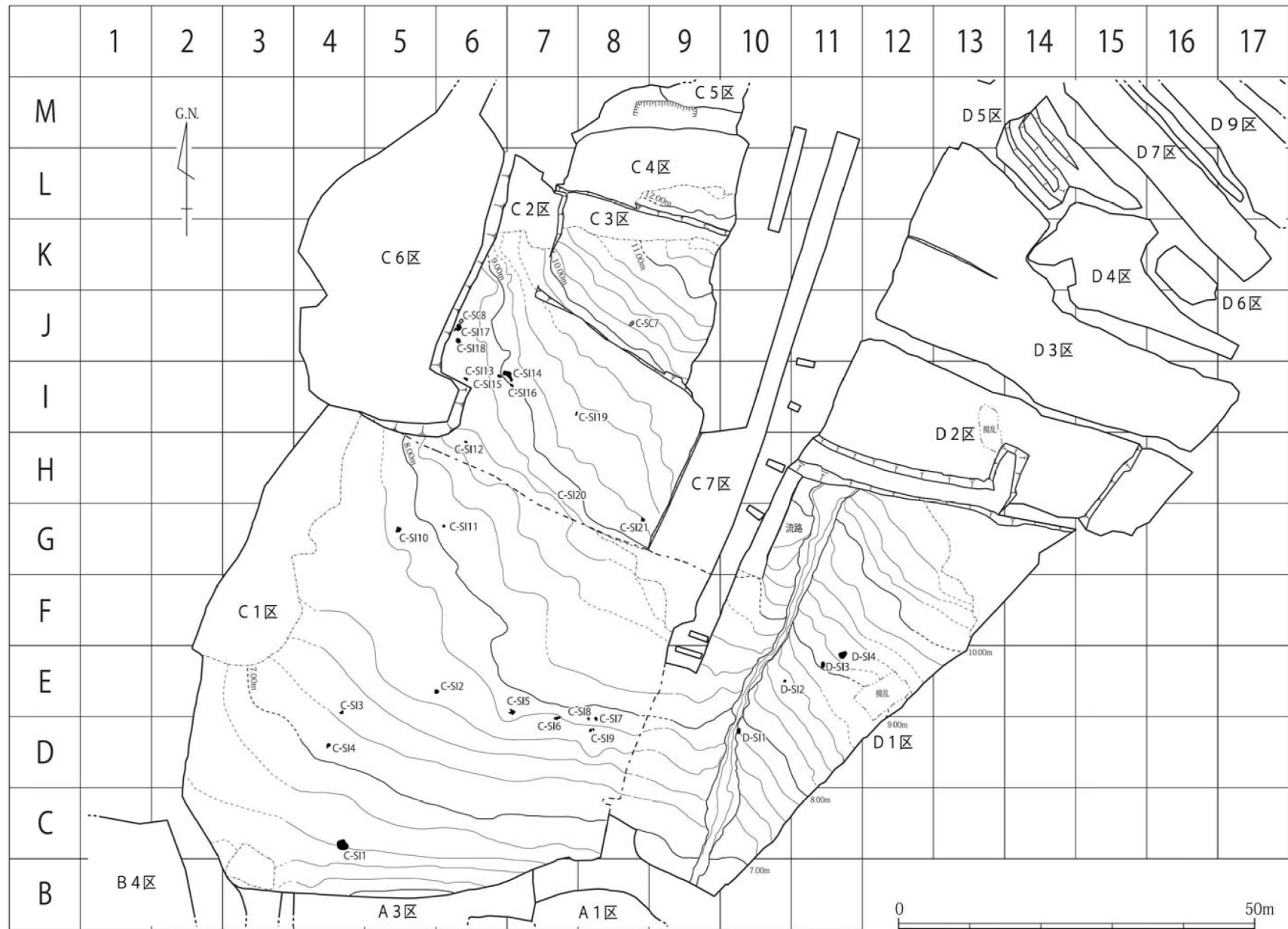
形態的には、浅い窪みもしくは掘り込みを有するものと持たないものに大別できる。そのうち、浅い窪みもしくは掘り込みを有するものはC-SⅠ1、C-SⅠ2の2基が確認されている。また礫の密集度は散漫なものがC-SⅠ2・9・15・16の4基で、他は密集している。

構成礫は大半が砂岩で構成されている。そのうち50点未満の礫で構成されているものが多く、全体の約44%を占めるのに対し、100点以上のものは全体の20%である。そのうち、C-SⅠ14～16については他の礫群と比べ、20cm程度の大形の板状の礫を多く利用しており、他の礫群と様相が異なる。遺構内では、炭化物は7基(C-SⅠ2・4・11・14・17・18・D-SⅠ1)で確認されている。またD-SⅠ2では炭化物は確認されていないが、タール状の煤?が礫に付着しているものも認められた。遺物はC-SⅠ3・16・21で出土している。そのうち2点について図化を行った。136はエンドスクレイパーである。流紋岩Ⅰ製。自然面を有する厚みのある剥片を素材の末端に刃部を作り出している。137はサイドスクレイパーである。幅広の縦長剥片を素材に左側縁に連続した加工を行い、刃部を形成している。頁岩Ⅱ類製。

小土坑(SⅡ) (第33図・第37図、第13表)

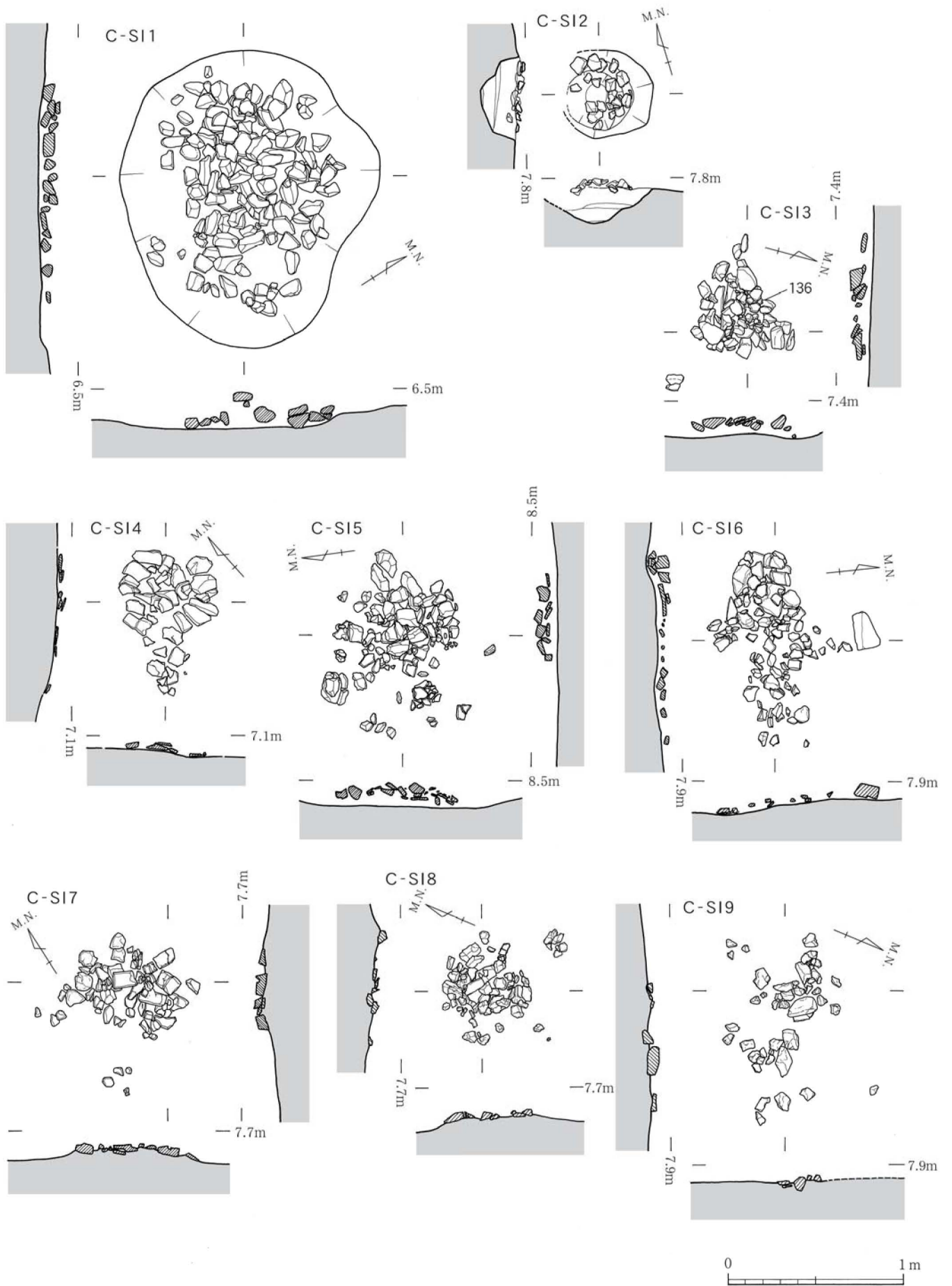
小土坑は2基確認されている。いずれもⅨ層上面で検出したが、当初C-SⅡ7の検出時にⅤ層またはⅦ層が起源の埋土を確認したことから、周辺の掘り下げを行う際には慎重に作業を実施したが、C-SⅡ8についても、Ⅴ層またはⅦ層中では確認が困難であり、Ⅸ層が現れてきた段階で結果的に確認できたという状況であった。

いずれも楕円形プランを呈し、いずれもほぼ主軸が揃い、等高線に直交するように構築されている。検出面からの深さはC-SⅡ7が0.53m、C-SⅡ8が0.66mを測り、遺構間の距離は約23.8mを測る。

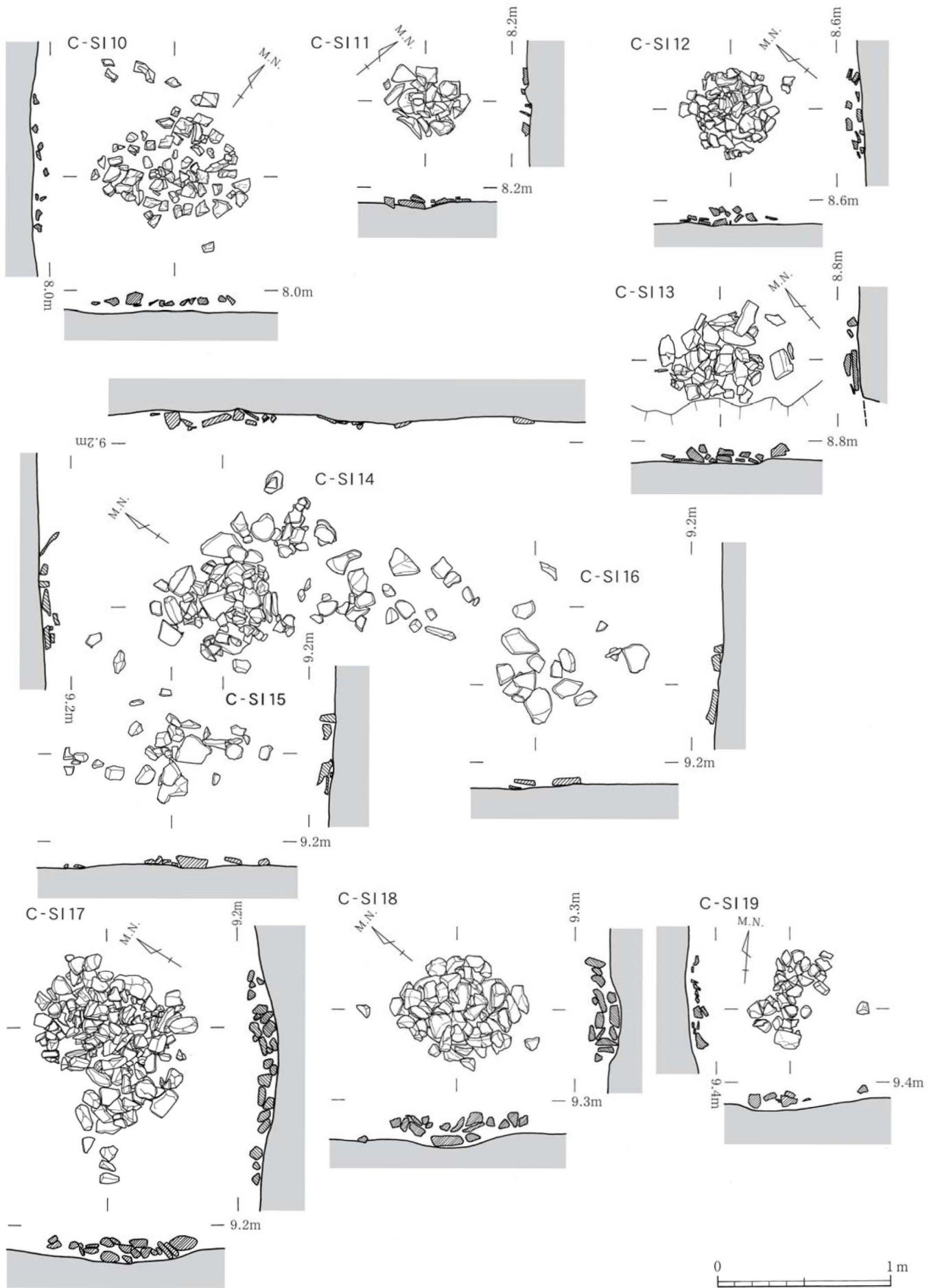


※等高線はⅤ層上面のもの。C 1～4区及びD 1区の一点破線内(空白)はⅦ層以降の露出範囲。

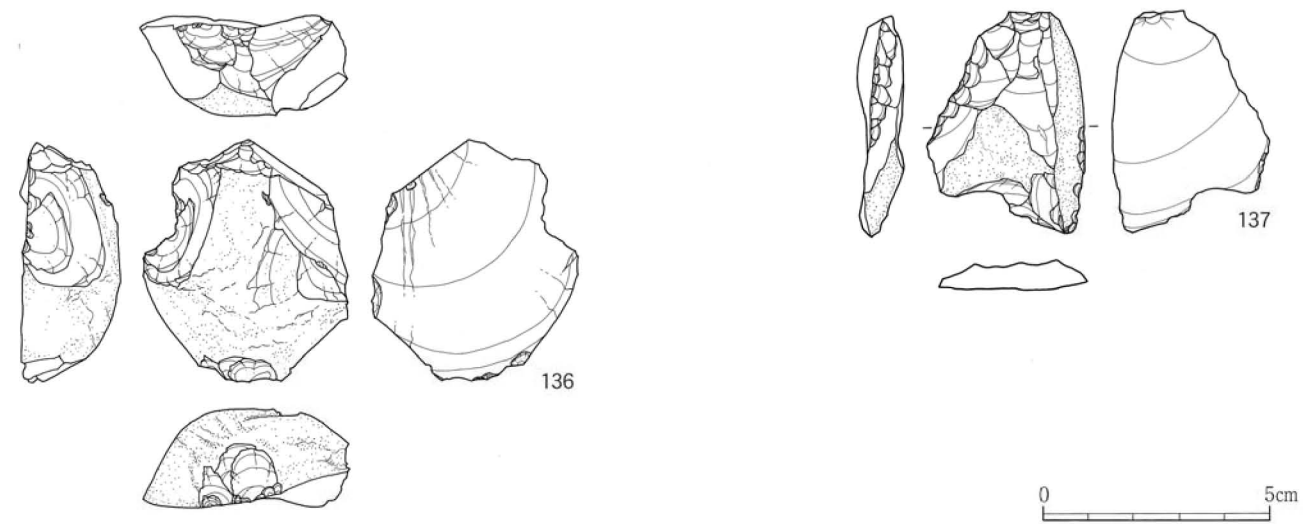
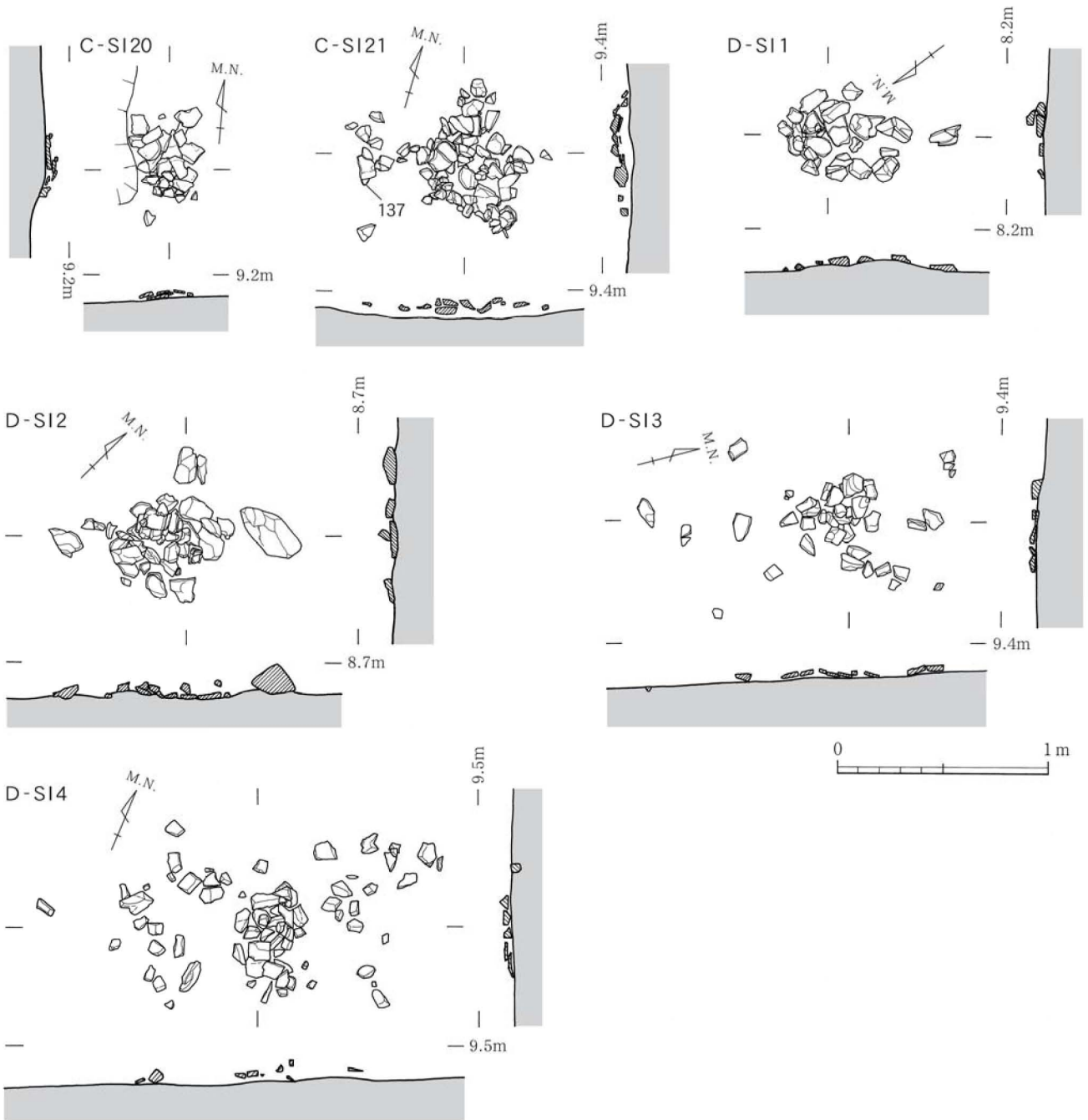
第33図 C・D区 旧石器時代第Ⅱ文化層遺構分布図 (S = 1 / 800)



第34图 C·D区礫群実測图1 (S=1/30)



第35図 C・D区礫群実測図2 (S=1/30)

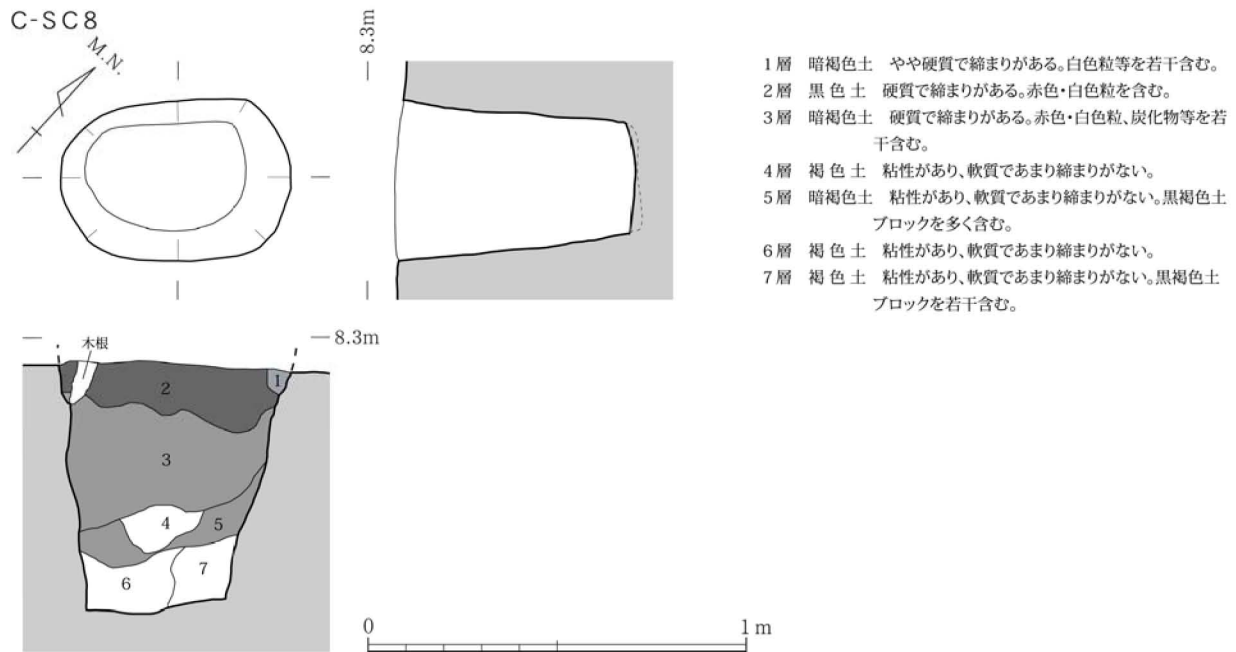
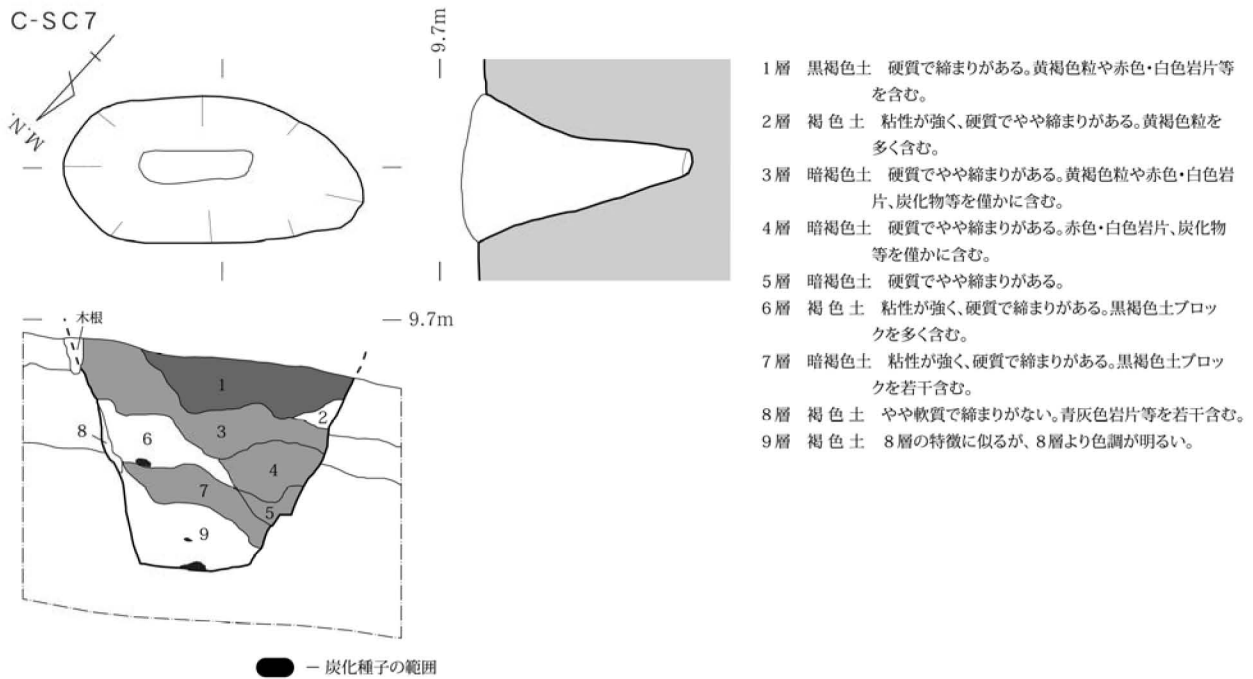


第36図 C・D区礫群実測図3 (S = 1 / 30) 及び出土石器実測図2 (S = 3 / 5)

遺構 番号	層位	調査区	グリッド	出土遺物	礫の範囲 (m) 最大長×最大幅	掘り込み規模(m) 最大長×最大幅×深さ	礫総 個数	礫の 密度	備 考
C-SI1	IV	C 1	C・4	—	1.48×1.17	1.69×1.48×0.1	121	密	礫の大半が砂岩で構成。完形に近いものが多く、赤化が著しい。掘り込みはあまり明確ではない。
C-SI2	IV	C 1	E・5～6	—	0.43×0.4	0.5+α×0.5×0.21	21	散	礫は砂岩製の垂円礫が破砕礫が多く赤化が著しい。3個体が接合。掘り込み上面には礫が集中するが掘り込みの中・下部は出土していない。掘り込みの埋土には炭化物を含む。
C-SI3	IVF ～ V上	C 1	D・4	E s	0.72×0.6	—	58	密	礫の大半が砂岩で構成。炭化物をあまりみとめられない。赤化が著しい。破砕礫が多い。
C-SI4	IVF ～ V上	C 1	E・4	—	0.82×0.53	—	47	密	砂岩製の破砕礫で構成。礫の多くが赤変している。炭化物が部分的に認められる。
C-SI5	IV	C 1	E・7	—	1.1×0.8	—	119	密	砂岩で構成。破砕したものが多い。礫の多くが赤変している。
C-SI6	IV	C 1	E・7	—	1.1×1.0	—	95	密	砂岩で構成。全体的に赤化しており、一部は部分的に黒変しているものも認められる。
C-SI7	IVF ～ V上	C 1	D・8	—	0.93×0.6	—	62	密	砂岩で構成。垂円礫が破砕礫が多く、大半が赤化している。2個体が接合。焼土・炭化物は確認されていない。
C-SI8	IVF ～ V上	C 1	D・8	—	0.64×0.5	—	57	密	砂岩で構成。垂円礫が破砕礫が多い、5個体が接合。焼土・炭化物は確認されていない。赤化が弱い。
C-SI9	IVF ～ V上	C 1	D・8	—	1.15×0.7	—	47	散	砂岩で構成。垂円礫が破砕礫が多い。中央のものは赤化が著しいが南側のものは僅かに赤化が認められる。
C-SI10	IVF ～ V上	C 1	G・5	—	0.92×0.8	—	71	密	1点のみシルト岩、他はすべて砂岩で構成。大半が赤化し、破砕礫が多い。
C-SI11	IVF ～ V上	C 1	G・6	—	0.51×0.42	—	27	密	砂岩で構成。扁平な礫が多く、北側の1点以外はすべて赤変している。礫は焼けているが一部焼けていないものもある。炭化物を僅かに含む。
C-SI12	IVF ～ V上	C 2	H・6	—	0.58×0.53	—	106	密	砂岩で構成。垂円礫が破砕礫が多く、全体的に赤化が弱い。炭化物は確認されていない。
C-SI13	IVF ～ V上	C 2	I・13	—	0.8×0.6+α	—	54	密	砂岩で構成。扁平な礫が多く、全て破砕している。大半が赤変している。
C-SI14	IV	C 2	I・6～7	—	1.92×1.15 (集中部：0.74×0.72)	—	111	密	砂岩で構成。底面付近は大形の扁平礫が配置されている。扁平礫の隙間や上に小形の垂円礫や破砕礫が密に入る。全体的に赤化しており、炭化物は僅かに認められる。3個体接合。
C-SI15	IV	C 2	I・6	—	1.3×0.66	—	31	散	砂岩で構成。扁平な礫が多く、破砕しているものも多い。全体的に赤化しているが、炭化物は認められない。
C-SI16	IV	C 2	I・7	F	0.93×0.88	—	17	散	比較的大形の砂岩製扁平礫で構成されている。全体的に赤化している。炭化物は認められない。
C-SI17	IV	C 2	J・6	—	1.3×0.93	—	135	密	砂岩で構成。垂円礫が破砕礫が多い。全体的に赤化が著しく、部分的に黒変しているものも認められる。炭化物を少量含む。
C-SI18	IV	C 2	J・6	—	0.81×0.65	—	58	密	砂岩で構成。垂円礫が多い。全体的に赤化が著しく、部分的に黒変しているものも認められる。炭化物を少量含む。下部が若干凹む。
C-SI19	IV	C 2	I・7	—	0.62×0.36	—	40	密	砂岩で構成。拳大の破砕礫が多い。全体的に赤化が著しい。
C-SI20	IV	C 2	H・7～8	—	0.45×0.36	—	23	密	砂岩で構成。扁平なものも多く、破砕している。赤化しているものが多い。6個体が接合。
C-SI21	IVF ～ V上	C 2	G・8	S s・F	0.96×0.85	—	73	密	砂岩で構成。破砕礫が多く、大型のものは扁平なものが多い。赤化しているものが多い。
D-SI1	IV	D 1	D・10	—	0.87×0.45	—	30	密	砂岩で構成。扁平な垂円礫が多い。2個体接合。赤化が著しく、炭化物を含む。
D-SI2	IVF ～ V上	D 1	E・10	—	1.2×0.73	—	40	密	砂岩で構成。完形のが6点。破砕礫が多く、全体的に赤化しているが、南～西側の礫は特に著しい。炭化物は確認されていないが、タール煤？付着の可能性のものが3点認められる。
D-SI3	IVF ～ V上	D 1	E・11	—	1.48×0.55 (集中部：0.48×0.46)	—	38	密	砂岩で構成。破砕礫が多く、全体的に赤化している。中央部は比較的密だが、周辺はばらけている。3個体接合。炭化物は確認されていない。
D-SI4	IVF ～ V上	D 1	E・11	—	1.67×0.75 (集中部：0.57×0.36)	—	76	密	砂岩で構成。破砕礫が多く、全体的に赤化しているが集中部のものは特に赤化が著しい。中央部は比較的密だが、周辺はばらけている。炭化物は確認されていない。

※E s : エンドスクレイパー、S s : サイドスクレイパー、F : 剥片

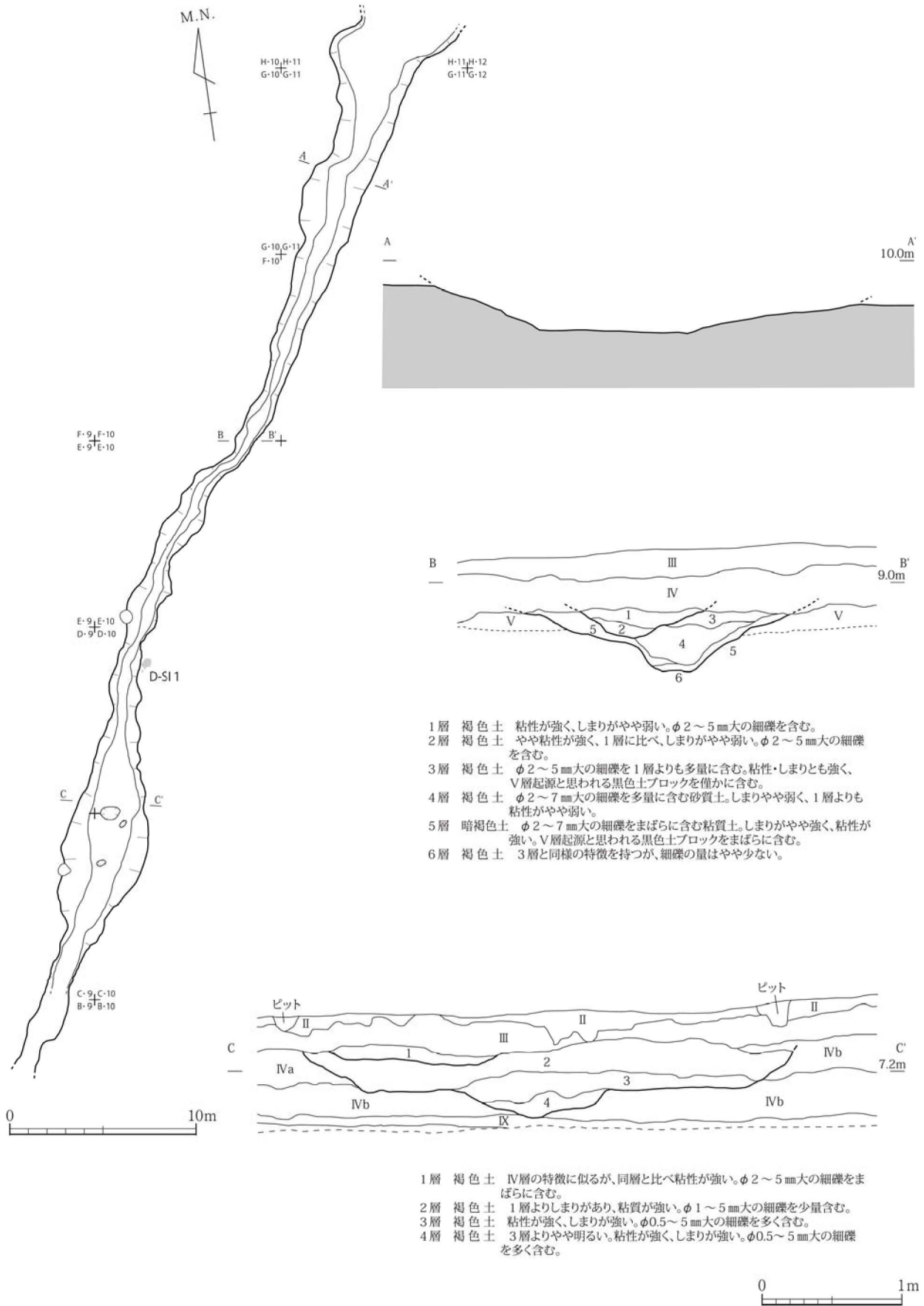
第12表 C・D区礫群一覧表



第37図 C区小土坑実測図 (S = 1 / 20)

遺構番号	検出層位	調査区	グリッド	出土遺物	主 軸	規 模 (m) 最大長×最大幅×深さ	平面プラン	備 考
C-SC7	IX	C 3	J・8	—	N-47° 30' -E	0.79×0.39×0.53	楕円形	後世の虫穴より炭化米出土。
C-SC8	IX	C 2	J・6	—	N-46° 30' -E	0.61×0.42×0.66	楕円形	

第13表 土坑一覧表



第38図 D区自然流路実測図 (S = 1 / 300、断面及び土層断面は S = 1 / 40)

遺物はC-S C 7内で炭化種子（炭化米）が出土しているが、後世の虫穴に入り込んでいるため、直接遺構に係わるものではない。

構築面は埋土より、V層またはⅦ層中の可能性が考えられることから、2基のうち、C-S C 8の埋土を青山尚友氏に鉦物組成分析を、また古環境研究所に植物珪酸体分析を依頼した。そのうち、鉦物組成については埋土上部のものがV層の可能性が指摘されている。一方、植物珪酸体の組成や量の特徴などから、Ⅶ層に対比される可能性が考えられるという、どちらとも判断がつかない結果になった。ただし、周辺の遺物分布をみていくと、V層のものが遺構周辺で確認されているのに対し、Ⅶ層はやや離れた場所で確認されていることから、ここではV層中構築の可能性を指摘しておきたい。

自然流路（第33図・第38図）

自然流路はD 1区で1条確認されている。同区北西側から南西方向に向かって横断し、区外へと続く。大半はⅣ層上面で検出したが、中央から北側に関しては地山と埋土の境界が不明瞭なため、Ⅳ層下部～Ⅴ層上面で確認した。確認した範囲での長さは約59.6mで、幅は約0.9～4.8m、深さは最深で0.45mを測る。断面形は台形を呈するが、皿状になる部分も認められる。埋土は岩盤起源の細礫を含む粘質土で、細礫は南側（下流）に進むにつれて量が少なくなる。またB-B'ラインやC-C'ラインの埋土を観察すると、少なくとも2回の痕跡が確認されたが、平面では確認できていない。

流路内では遺物等が出土しておらず、時期が不明だが、埋土状況からⅣ層中の形成と考えられ、石器ブロック5やS I 22を切っていることから、これらの時期よりも後の段階の所産と思われる。遺構の性格としては、集中豪雨等の要因により生じた小規模な土石流跡と考えられる。

（2）石器（第39図）

石器は総数1,257点出土している。そのうちの約7%についてはⅢ層で確認されたものや後世の遺構内で確認されたものである。また碎片については殆ど確認されていないが、剥片剥離が行われていることや、一部の製品についてはここで製作したことが窺い知ることができること等から、調査の精度によるものと考えられる。

分布域から石器集中箇所がいくつか認められるが、前述のとおり、遺物の包含状況は芳しい箇所が多いため、ここでは、視覚的な分布状況と接合状況を加味して、6箇所についてブロックに認定した。ただし、地形や後世の削平等を考えれば、実際にはまとまり自体はさらに多くなるものと考えられる。

また、旧石器時代の利用石材については流紋岩やホルンフェルス、頁岩、チャート、黒曜石、溶結凝灰岩、砂岩、泥岩など8種確認されている。これらの石材のうち、色調や石質の特徴、接合等から細分可能であるため、分類を行い、個別に説明を加えていく。

流紋岩 I（第40図～第45図、第14表・第15表）

礫面・剥離面ともに白色～白灰色を呈し、なかには不明瞭な白色の雲状風化が認められるものや筋が幾条も入るものも認められる。表面がやや粗いもの多い。ただし風化度の違いにより、一部は後述するⅡ類に含まれる可能性がある。石器は195点確認されており、内訳はナイフ形石12点、剥片尖頭器3点、角錐状石器7点（接合後）、スクレイパー10点、彫器1点、石錐2点、二次加工剥片6点、微細剥離を



第39図 C・D区 第II文化層遺物分布図 (S=1/800)

有する剥片4点、剥片138点、石核10点で、接合資料は6例確認されている。

138～145はナイフ形石器である。そのうち、138・139は打面を転移しながら剥出された幅広の剥片を素材としている。打面を横位に置き、打面部と末端部下半に主要剥離面から加工を施し、器形を整えている。また138については左側縁上部に対向調整剥離が認められ、基部の刃部下側は若干湾曲することから狸谷型ナイフに相当するものと考えられる。140・141は一側縁加工のナイフ形石器で、どちらも縦長剥片を素材にしている。140は右側縁に主要剥離面から加工を行い、側縁中程には対向調整剥離が認められる。基部は欠損している。141は打面をそのまま残し、右側縁に主要剥離面側からの加工を施している。先端部は欠損している。142は打面転移を行いながら剥出された斜軸状の幅広剥片を素材にして、打面側には急角度の加工を行い、左側縁の下半には微細な剥離を行い、基部を整形している。143は打面を転移させながら剥出された幅広な縦長剥片を素材にして、打面から片側縁にかけて加工を施している。先端部は欠損しているが、刃部には微細剥離が認められる。144・145は縦長剥片を素材に打面を基部側に据えて、主要剥離面から二側縁に加工が行われている。加工は一側縁には全体に認められ、もう片方には打面から約1/2に施されている。打面はどちらも除去されている。なお145には主要剥離面に平坦剥離がみとめられる。また先端部に残る剥離痕は衝撃の際に生じたものと考えられる。

146～148は剥片尖頭器である。縦長剥片の打面を基部側に据え、主要剥離面から二次加工を施し、基部を作り上げている。さらに146には右側縁先端部～中程まで加工が施され、また主要剥離面の基部付近には平坦剥離が認められる。また148の基部加工は、146・147が基部にしっかりとした抉りを持つ対し、抉りが弱く、特に左側縁のものは全体の約1/2まで加工が及び、どちらかと言えば、直線的である。またその上部には主要剥離面側に平坦剥離が施されている。

149～153は角錐状石器である。149は三面に加工が認められるため、素材剥片については不明である。全体形は柳葉状を呈し、先端部及び基部とも入念に加工が施されている。また稜上調整が顕著である。なお、器長の中程で折れており、G・4グリッド内の約3m離れた場所で確認されている（接合資料1）。150～153は縦長剥片を素材に、両側面には主要剥離面から急角度の二次加工が施されている。設定には、151が打面を先端に据えている以外は、他は基部側に打面を据えている。150は先端部の主要剥離面側にも加工が認められ、また表面下半の平坦な面には稜上及び、稜上水平調整が認められる。151も先端部の主要剥離面側に加工が施されている。表面には稜上調整が顕著に認められ、中央やや下寄りでは、さらに稜上水平調整も行われている。152の右側面には基部加工と中央付近の稜上調整以外は加工が認められず、先端部～中程にかけては稜上水平調整が行われている。153は剥出時に石核底面を取り込んだため、側面が「く」の字状に折れ曲がる。先端部付近では稜上調整が認められるが、全体的に粗い作りになっており、側面が鋸歯状を呈している。

154～158はエンドスクレイパーである。そのうち154は厚みのある縦長剥片を素材にしている。打面及び末端部を中心に主要剥離面側から加工を行い、刃部を作り出している。155は幅広の縦長剥片を素材にしているが、打面は剥出時に欠損している。末端部にU字状の刃部を作出している。156は素材に厚みのある幅広の縦長剥片を利用している。末端及び両側縁に主要剥離面からの二次加工を施し、刃部を作出している。157は打面を転移しながら剥出された大型の幅広な剥片を素材にしており、右側縁下部は主要剥離面側から加工を行うのに対し、末端部は表裏両面から加工を行っているため、刃縁は鋭い。158は縦長剥片を素材の末端に数回の加工を行い、幅の狭い刃部を作り出し

ている以外は打面側右側縁に若干加工を施し、基部を作り出している。

159～161はサイドスクレイパーである。そのうち159は打面転移を行う石核から剥離された縦長剥片を利用して、主要剥離面から右側縁全体に加工を行い、刃部を形成している。160は礫面で構成される厚みのある縦長剥片を素材にしている。剥離初期段階のものと考えられ、礫面をそのまま打面にしていたものと思われる。右側面は全体に表裏両面から二次加工を行っているのに対し、左側縁は中央付近から末端近くまで、表面からの加工に留まっている。161は上部を欠損しているが縦長剥片を素材にし、表面から両側縁に二次加工を行い、刃部を形成している。

162は石錐である。素材は礫面からそのまま剥離された幅広の剥片で、表面が礫面で構成されていることから、剥離初期段階のものと考えられる。主要剥離面側より両側縁に加工を行い、錐部を作出している。

163は彫器である。素材は同一方向から剥離された縦長剥片で打面部は欠損しており、剥離時に欠損したものと考えられる。末端部に主要剥離面から剥離を行い、平坦面を形成した後、両端に桶状剥離を行い、彫刀面を作出している。そのうち右側のものは、剥離面が2枚確認できることから、彫刀面再生を行っている。なお、左側縁下部に認められる加工は彫刀面作出前のものである。

164・165は二次加工剥片である。164は両設打面から剥出された縦長剥片で、打面は平坦打面である。右側縁上部～中央にかけて二次加工が認められる。165は平坦打面から剥出された縦長剥片で、素材石核の角を取り込んだため、やや厚みのあるものになっている。右側面中央から主要剥離面側に二次加工を施している。

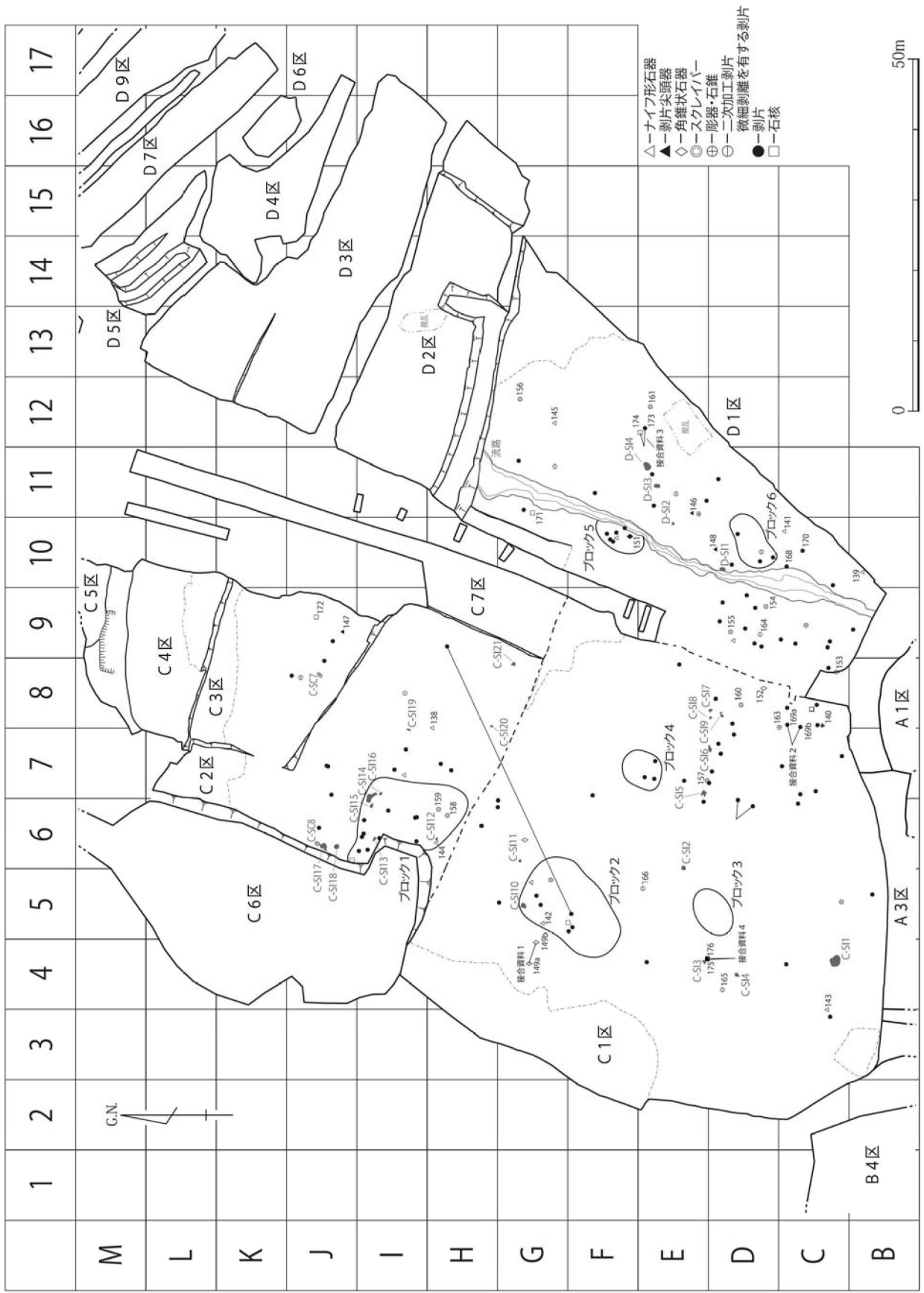
166・167は微細剥離を有する剥片である。166は縦長剥片で、末端部がヒンジ・フラクチャーを形成している。打面部は欠損している。微細剥離痕は両側縁に不規則に認められる。167は石核素材時のボジ面を稜右側に有する縦長剥片で、両側縁の下部に微細剥離痕が認められる。

168・169は縦長剥片である。168は剥離時に打面を欠損しているが、167同様、稜より右側は石核素材時のボジ面で構成されている。169は平坦打面で、中央よりやや下方で折れている。何れもC・8グリッド内で出土し、約2m離れて確認されている（接合資料2）。39は打面を転移させながら剥片剥離を行う石核から剥出された斜軸剥片で、頭部調整が顕著である。末端部は欠損している。

171・172は石核である。171は分割礫を素材にしており、上面の風化の度合いが違う剥離面（旧剥離面）に打面調整を行い、大小の幅広な剥片2枚を剥出している。その後、打面を裏側に転移させ、右側縁に幅広な剥片を剥出している。なお、この剥離面には下方から複数の剥離が認められ、打面調整の可能性が考えられるが、明確な剥片剥離は行われていない。172は幅広の剥片を素材に、末端部を除去して平坦面を作り、そこから右側縁側で剥片剥離を行い、打面を素材打面側に転移して、再度剥離作業を続けている。

接合資料3は剥片（173）と石核（174）の接合例である。D1区E・12グリッド北側で出土している。基本的には上面を打面に設定して、部分的に打面調整が行いながら、正面及び両側面を作業面にして剥片剥離作業を行っている。ただし、正面ではヒンジ・フラクチャーが多発したため、この面での作業をやめて、正面を打面に入れ替えて、剥離作業を行っている。その際、173が剥出されている。

接合資料4は剥片（175）と石核（176）の接合例である。C-SI3の南東側でまとまって確認されている。約12～13cm大の楕円形を呈する礫の一端に剥離を行い、打面を形成し、長さ約4cmの縦長剥



第40図 C・D区 第II文化層遺物分布図 [流紋岩 I] (S = 1 / 800)